Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches
cm
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
210.08
Ko5483
00712682
0 複写

文學士　矢野太郎編

國史叢書

藝侯三家誌　二
吉田物語　一

國史研究會藏版

文學士　矢野太郎編

國史叢書

藝侯三家誌　二
吉田物語　一

國史研究會藏版

吉田物語十一卷、毛利元就一代の戰績を記して詳なり。卷末少か其行と教訓に及ぶ。然れどもかの世に喧傳せる箭戒の事見えざるは何ぞや。別に附尾三卷あり、家士の功名を錄して慶長の初に至る。此書毛利氏の家臣杉岡就房の、毛利家及び古社寺の舊記・古文書、及び其父長次の遺言によりて著述せるものなりといふ、其事卷末の自記に概見せり。蓋し藝州吉田城一名郡山城は毛利氏發祥の地にして、元就に及びて大に興り、孫輝元に至るまで此に治せり。是れこの書に命くる所以なり。就房は周布氏、通稱權之助、剃髪して空潭是心と號す。毛利家の寶庫預役となり、古文書・記錄を通覽するの便を得たり。秀就・綱廣・吉就・吉廣の四代に歷事し、寶永三年八十三歳にて歿す。この書の價値以て知るべし。但し第二卷宍戸隆景の事を記せる細註に、榮通宍戸系圖を見るに云々の語あり。この榮通は就房と同人なりや、或は舊記にありしを其まゝ錄したるものなりや、或は後人の記の竄入なりや、是を

210.08
K5483
國會圖書館
41.11.28
712682

疑ふ可しとなす。

大正戊午一月

難鳴記

例言

一、本書は藝侯三家誌卷五より最終まで、及び吉田物語卷第一卷・第二卷迄を採收す。

一、語尾を補ひ、反讀を讀下しに改め、通讀の平易を計れること既刊の諸書に同じ。

一、藝侯三家誌刊行に當り、吉川男爵家は特に本會の爲め、原本の閲覽謄寫を許可せられたり、玆に同家の厚意を深謝す。

藝侯二家誌

目次

卷五

毛利三家雲州發向附比部合戰の事……一頁
末次土居明退の事……一六
雲州三笠城沒落の事……一八
熊野降參の事幷高瀨の城退口の事……二一
平田勝間兩城軍の事……二三
輝元隆景元長藝州歸陣の事……二五
羽倉城合戰の事……二六
尼子勝久末次を攻むる事……二七
備中國三村退治の事……三一
秋上父子心變の事……三七
毛利元就逝去幷末石城沒落の事……三九
義昭卿信長快く扱はざる事……四九
山中立原信長を賴む事……五二
吉川元春父子因州發向の事……五四
山中鹿之助大坪甚兵衞尉と相戰ふ事……五五
私部（きさいち）城軍の事……五八
大坪甚兵衞尉武田龜井と相戰ふ事……五九
山名豐國尼子に與する事……六〇
若佐合戰附諸寄軍の事……六一
尼子勝久鳥取城退去の事……六二
山中牛尾合戰の事……六五

公方義昭公備後國鞆御下向の事……六七
吉川小早川因州發向附私部麓合戰の事……六八
私部の城沒落の事……七一
勝久若佐城を落つ井同國宮吉城明退の事……七四
攝州大坂城へ兵糧を入るゝ事……七五
浦少輔四郎心變の事……七九
讃州元吉合戰の事……八一
淡州岩屋城の事……八二

卷六

尼子勝久播州上月城に入る事……八六
中國勢上月城を圍む事……八九
杉原家人忍討の事……九五
上月合戰の事……一〇一
播州三木城沒落の事……一一四
尼子勝久已下自害附山中鹿之助最後の事……一一七
宇喜多和泉守心變の事……一二一
南條小鴨逆意の事……一二四
毛利三家作州發向附處々落城の事……一二六
備中國忍山城合戰の事……一二九
備中國賀茂城軍の事……一三一
吉川元春伯州因州發向附山名豐國鳥取城退去の事……一三三
伯州長郷田合戰の事……一三四
因州鹿野城沒落井籠城者誅戮の事……一三九

宇津茸合戰の事……一四〇
岩倉合戰の事……一四一
吉川式部少輔鳥取籠城の事……一四八
鳥取落城の事附吉川式部少輔切腹の事……一五一
吉岡城攻の事……一六一
秀吉吉川元春と伯州馬山に對陣の事……一六五
因州山崎荒神山以下落城の事……一六九
備前國兒島蜂濱城軍の事……一七二
伯州羽衣石岩倉落城の事……一七三
高松落城附清水宗治已下自害の事……一七四
元春隆景秀吉と和平の事……一八二

卷七

經吉秀包大坂に登らるゝ事……一八七
四國合戰の事……一八九
隆景元長大坂に登らるゝ事……一九三
三浦三刀屋已下門司城に籠る附高橋秋月合戰の事……一九五
三家九州渡海附小倉城明退きの事……一九七
宇留津落城の事附障子嶽城明退きの事……二〇一
吉川元春病死井香春嶽落城の事……二〇四
大和大納言九州下向附耳川高城等合戰の事……二一一
關白秀吉九國御下向附島津義久降

參の事……二二五
吉川元長卒去 幷本郷降參の事……二二八
吉川經言本家相續 幷秀吉九州凱旋の事……二二九
九州一揆蜂起 附吉川廣家再び九國下向の事……二三五
豐前の加來福島肥後の和仁邊春沒落の事……二三九
毛利吉川小早川上洛の事……二三一
秀吉關東御進發により三家上洛の事……二三八
毛利輝元領國の御朱印を給る事……二四四
朝鮮渡海の人數の事……二四八
小西攝津守三城を陷る事……二五〇
諸勢朝鮮の都に入る事……二五一
れいせん合戰の事……二五三
平壤合戰の事……二五五
大明和議 幷李如松合戰の事……二五八
日本勢張番 附江陽合戰の事……二六五
河下城攻の事……二七一
諸將連判誓詞の事……二七五
晉州城攻 幷牧司が首日本に渡る事……二七八
諸勢歸朝の事……二八二
大明朝鮮使來朝 幷和議破るゝ事……二八九
日本勢又朝鮮渡海の事……二九〇
小早川隆景卒去 幷毛利秀元小早川秀秋の事……二九六
蔚山城合戰 幷大明勢敗軍の事……二九九

秀吉公薨去 幷朝鮮在番諸將歸朝の事……三一一

吉田物語

卷第一

有田中井手合戰の事 附武田刑部元繁討取らるゝ事……三一三
上使の事……三一九
高橋大九郎興光父子御退治の事……三二〇
坂の城攻崩され候事……三二二
西條鏡山攻崩され候事……三二五
幸松丸樣御逝去 附元就公御家督幷御夢想の事……三二七
隆元公御誕生の事……三三〇
大内義興父子藝州出馬の事 附坂の上合戰の事 幷七月三日合戰の事 附雲州勢金山後詰の事 附夜討の事 附義隆金山表退陣の事 附大内義興櫻尾表退陣の事……三三一
大内義興逝去の事……三三九
武田光和熊谷信直不和の事……三四〇

卷第二

宍戸元源御和睦の事 附山内大和守御内通の事……三四一
防州へ御使者の事……三四八
隆元公山口に御下向の事……三四七

雲州御手切の事……三四八
宮若狭守降參の事……三四八
武田信實吉田へ働くの事……三四九
備後諸城攻 附桂元澄弓勢 附井上源五郎の事……三五〇
生田の城落去に付戸坂合戰の事 井造賀合戰の事……三五一
尼子家由來の事 附晴久吉田發向評議の事……三五二
新宮衆備後表働の事……三五四
御籠城の御手配の事 井御籠城奇特之有る事……三六〇
尼子晴久吉田發向の事……三六二
御城下諸所合戰の事……三六三
大内勢後詰の事……三六七
宍戸元源御馳走の事……三六八
陶隆房内藤興盛陣替の事……三六九
宮崎長尾御合戰の事……三六九
大内勢合戰の事……三七一
民部大輔晴久敗北の事……三七二
佐東金山落城 井伴の構に於て武田衆御成敗の事 附櫻尾城攻取り候事 三七四
元就公隆元公山口御下向の事……三七五

目次終

藝侯三家誌　卷五

一　毛利三家雲州發向 附比部合戰の事

三家出雲へ發向す

元龜元年正月十六日、尼子左衞門尉勝久を退治として、毛利右馬頭輝元・吉川駿河守元春・同嫡子治部少輔元長・三男又次郎經言・小早川左衞門佐隆景、相共に藝州を打立ちて、出雲國へ發向せらる。就中又次郎經言は、今歳十一歳になられければ、元春必ず引具してとにはあらざれども、經言切に出陣すべき由望まれける故同道せらる。

〔頭書〕異書に云く、經言發向の儀、元春差止めらるゝと雖も自身頻りに望まれ、御母儀も軍陣向の儀、幼少より見馴ひたるが能く候間、御同道候へといはれて召具さる云々。

赤穴城合戰

同二月八日、輝元・隆景は都賀に著陣せられ、元春父子三人は先陣として、赤穴に陣を居ゑられたり。爰にて雲・石の勢少々加へて總勢一萬三千餘騎と記せり。此度日來より少勢なる故は、大友豐前へ發向の聞え有る故、宗像・高橋へ合力の爲め、防・長の勢は皆殘し置かれぬ。又伯州へ武田高信尼子に一味して打入らんとする間、南條・山田・小鴨・北谷・福賴（より）・福田・小森等、皆面々の城を守りて一人も赴かず、備中・備後の兵は自國に敵有る故に出でず、備前の宇喜多も勝久と心を合せて援兵を出すなど聞えし故、此押の爲に軍士を殘し置かれたる程に、日來の勢より若干少勢なり。同月九日、元春父子三人石州多久和の城へ陣を寄せらるれば、吉田勢福原・南方など相加はる。

〔頭書〕吉田勢、福原・南方など相加はる云々。　異書に云ふ、多久和の要害に尼子方秋山虎之介・横道權之允楯籠る由に付、福原一手平賀・阿曾沼相共に多久和表へ發向すとあり。一書に此時吉田勢も福原一手、平賀・阿曾沼一同に三千五百の人數にて、多久和表發向すとあり。

此城には福山次郎左衞門・遠藤甚九郎・河添右京亮五百餘にて籠り居けるが、其夜城を明退きけるを追駈け、所々にて返合せし敵を七十餘人討取りたり。元春の家人朝枝市允〔頭書〕後稱二因幡守一、朝枝源二郎・松田九郎左衞門等が父也。始めは小河内石見守依二爲養子一稱二小河内市允一。小河内石見・黑目（目黑か）市右衞門・江村源次郎・高彌三郎・二山美濃、吉田勢南方宮内少輔・井上民部少輔・末國與次郎・羽仁藤兵衞・福原宗右衞門等分捕す。其外杉原播磨守が手には、高橋右馬允・壇上監物・佐田彦四郎・安原甚次郎・同民部少輔、三刀屋が家人坂田彦六右衞門、平賀が郎黨桂右衞門允・東村平内、阿曾沼が若黨井上源右衞門など比類なき働したり。吉田衆村上又右衞門討死す。

〔頭書〕一書に、吉田衆福原一手の衆も相働き、井上治右衞門討死すとあり。異書に云く、多久和城兵叶ひ難く城を明けて逃落つる。福原・平賀・阿曾沼附送る處に、敵所々に伏勢を置き、城兵切處にて取つて返し相戰ふ。福原一手相働く中にも、南方・井上・福原・末國・羽仁等槍を合せ、其外平賀が手に桂東村、阿曾沼が手には井上源右衞門、比類なく相働き、數十人討取り、福原一手の中、井上治右衞門眞先に進

三家の謀略

みて相働き討死すと云々。

吉川勢笠間刑部少輔已下十餘人疵を蒙りたり。福山・遠藤・河添辛うじて這々比部へ逃入りたり。山中・立原敵の勢如何程と聞きしぞと此者共に問へば、兼ねては一萬五千計りと聞及びしが、二萬にも餘るべしと言へば、山中等聞きて、臆病神に祟られたりと笑ひ合へり。斯て吉川元春・小早川隆景、中國の國侍其外毛利家の老臣に言はれけるは、輝元・元就を離れて一分出陣の事今度始めてなれば、加何樣にも謀を以つて敵を呼出し、花々と一戰すべき旨、兩人元就の命を承けたり。然れば敵定めて路次に物見・物聞を出して、勢の多少、陣取の樣を見せしむべし。味方大勢と敵方に聞及ぶに於ては、深く愼んで、城を出で戰ふ事有るまじき間、味方少勢と見ゆる樣に陣を取り、味方の總勢一萬を披露すべき由下知せらる。又路次の宿々に於ては、今度は味方無勢なれば合戰危き間、先づ富田の城へ兵糧を入れ、頓て藝州へ歸陣し、重ねて防・長の勢盡く相催し、發向の筈の由言はせらる。案の如く鹿之助が宿宿に附置きたる忍の者、石見路より馳歸りて鹿之助に語りけるは、毛利家の勢所々

尼子勢の計略

の押として多く殘し置かれ、今度發向の軍勢纔か一萬計りなる故、先づ富田の城へ兵糧を籠めて加勢し、其外の城々へも人數を入れ置き、此度は歸陣の覺悟と聞えたる由告げたり。石州の一揆原も此由告來る。山中・立原等聞きて、然らば味方所々の城の人數を皆一所に集め、比部邊に陣取り、富田の城へ兵糧を入るゝを妨ぐる由にて、少々足輕を出すべし。然れども敵少勢とて實は此方より戰を好む處に非ず、然れども藝州より是迄來て、敵城へ兵糧を入れて歸るを、餘所に見て打過さば、大勢に臆したりと人嘲弄すべき間、比部へ打出で、味方多勢に見せて陣取るに於ては、常にさへ戰を愼しむ吉川・小早川、味方大勢と見ば彌〻一戰もすべからず、又勝久自身は末次に留まり、各〻計り打向ひて然るべし。然らば未だ大將の本陣にも多勢殘居る者なりと、敵方に心深く思ふべしと、種々の謀をなし、山中・立原以下一千餘騎にて打立たんとす。勝久は末次の土居に留まりて、本陣を居ゑられけるが、諸軍勢に向つて、此度如何樣手痛き一合戰は有るべき間、以來の證據の爲め、今度一番槍仕りたる者には是を與ふべしと、兼光の刀・脇差を取出して、諸軍是を取るべしと思ひ入

比部表合戰

りて、武勇を勵むべしと命ぜらる。斯て山中・立原兼ねて諸方へ羽檄を飛ばしたる故、秋山伊織助久家七百餘騎にて守山より打出で、牛尾彈正忠五百餘騎にて三笠の城より馳加はる。熊野兵庫助四百餘騎、高瀨の米原平内兵衞尉七百餘騎、宇波より は眞木與三左衞門五十餘、吉田八郎左衞門兄弟三百餘騎にて山佐より打出づる。其外末石・稻石の城々より、福山彌次郎・隱岐三郎五郎・遠藤・引田・中井以下二百・三百づつ馳付く間、其勢六千五百餘騎比部表へ相集る。山中鹿之助猶多勢の樣に見せん爲め、比部の峯々谷々に明小屋を數多作りて、人ある樣に見せたれば、實に他所目には萬餘の軍勢の陣取ると見えたり。元春先年より富田近邊所々の鄕人共に金銀を與へ、敵の謀路・計策を告げさせられける故、此度の敵方の人數、明小屋の事など、都て密策の趣委しく告來れり。敵比部の山上に陣取る由聞えける故、先づ富田の城へ兵糧を入るゝ事をば閣きて、此敵を退治すべしとて、同十一日右の注進を聞くと、則日輝元・元春・隆景三澤の鎌倉山へ陣を替へ、翌十二日比田へ移り、十三日比部表へ寄せられたり。比部の砦に森脇市正三百計りにて籠り居たるに、（頭書）此砦尼子本陣山

山中鹿之助引退く

の向ふなり。山中鹿之助使を以つて其所を明退きて、山上の陣へ窄まるべき旨言送れば、森脇曾て承引せず、此の如き時敵を防がん爲に城には籠りたり。敵多勢とて引退くべき樣なし、市正が三百餘騎は、敵の三千騎にも倍すべしと、思はるべしと謂ひて、敢て退かざる間、鹿之助重ねて横道源介・同權之允を遣して、森脇を伴はせて引取らせたり。扨鹿之助諸士を集めて、軍は明日にてあるべし。如何なる計策をなしてか利あるべきといへば、森脇市正味方六千七百に、某が手勢二百餘を加へて七千餘、此者共は皆尼子譜代恩顧の者なれば、志を一致にして戰ふべし。藝州勢一萬と雖も、方々の集り勢なれば、其志味方の軍士に似るべからず、然れば水谷・山中兩口へ勢を二手に分けて、一戰を遂げば勝利あるべしといへば、山中此議に同じて、軍勢の手分を定む。水谷口へは山中鹿之助幸盛・立原源太兵衞尉久綱・眞木與三左衞門・同與市・中井平三兵衞尉・米原平内兵衞尉綱寛・森脇市正・隱岐三郎五郎・加藤彦四郎・神西三郎左衞門・寺本市之允・進左吉兵衞・力石九郎兵衞・馬田兵九左衞門・高尾右馬允・同宗兵衞・目加田彈右衞門・同采女允・池田與三郎・相良助九郎・比田十郎太郎・德

尼子勢の部署

吉孫九郎・眞野・黒正・蓍屋以下四千餘なり。東口は牛尾彈正忠・秋上伊織助久家・岸左馬進・同孫右衞門・羽倉孫兵衞尉・平野嘉兵衞・横道兵庫助・同源介・同權介・遠藤神九郎・引田右近・同右衞門尉・自黒左近右衞門・松田兵部少輔・熊野兵庫助・同次郎・古志新十郎・福山次郎左衞門・吉田三郎左衞門・同八郎左衞門・長森吉内・馬田入道・淺山太郎次郎・日野助六・牛尾大炊助・足立次郎左衞門・熊谷・原・吉德以下二千八百餘騎、兩口に控へて、明日を限の合戰と思ひ定めて待居たり。是によりて元春・隆景も勢を二手に分かたる。輝元言はれけるは、敵勢の分際を見るに、味方の十が五六に過ぎず、然れば押寄せて、一戰を始めば利あるべけれども、敵は將卒共に先年の舊怨を報せんと、一筋に思入りて戰ふべければ、思ひ侮りて卒爾の働をば愼むべき處なりと言はる。

毛利勢部署を定む

〔頭書〕此日大雪にて先樣の樣子知れず、物見を遣さる。敵一戰を以つて待受けたる由申すに依りて、軍評定せらる。

三刀屋彈正左衞門尉・三澤三郎左衞門尉・杉原播磨守、貴命の如く敵一戰を望みて是迄出たる上は、手痛く相働くべきと雖も、吾等國方の儀に候へば、今度先陣を吾々に仰付けらるゝに於ては、身命を捨て攻付け、一時に攻破るべしと言へば、元春・隆景一同に、父元就未だ藝州も悉くは手に入れられざる時より、兩人先手にありて敵を破る事數度なり。然るに輝元總軍を司りて、一分出陣の事此度始めてなれば、往時の吉例に任せて、今般の先陣をば兩人すべし。其上備定の事は、先日衆談決定候條、今更違變成らざる處なり。敵も有無に思入りて戰ふ可きなれば、先陣は幾度も押崩さるべし。然れば後陣より入替りて追崩さるべし。三澤・三刀屋は案内者なれば、左右の尾崎より横合に攻登り、赤穴・宍道は彼處の谷より駈けらるべしと、手分を定められる。毛利家譜代の侍大將も兩川の詞を聞きて、此人にさへ此度は先陣を望まるゝに、我等いかでか二陣に控ふべき、一方の先手をば兎角吉田旗本の者共仕るべしと望むに依りて、東口は福原・桂・志道・口羽・兒玉・赤川・粟屋以下四千餘騎先陣として、其次は小笠原・平賀・檜崎・木梨以下一勢々々引分けて進みたり。水谷口は元春父子隆景向はるれば、兩手に屬する國士先手に進みて、兩勢三千五百餘騎、軍をば吉川手より始むべしとの定めなり。二陣は杉原播磨守盛重、其次は宍戸・熊谷・益田以

下と定めらる。輝元は旗本竝に後備合せて、三千七百餘騎にて後陣に備へらる。扨三澤・三刀屋其外方角の國士は左右の峯合より傳ひ、先手の戰ひ始まりたる時分、横合に突懸るべしと相圖を定めらる。斯て同月十四日藝州勢敵の樣體を見計らひて、未だ戰を始めざる處に、輝元諸將に向つて、日未だ東山に上らざれば、敵軍半ばは兵糧を遣ふまじ、備も未だ定まるまじければ、片時も早く懸つて一戰を始むべしと言はるれば、兩川も其議に同じて、諸軍に此旨を下知せらる。杉原盛重此詞を聞きて甚だ感歎しけるが、其儘立つて鎧をも著ず懸かりたり。

毛利勢戰を始む

〔頭書〕此時杉原は、黑小袖に革袴を著し居たるが、袴計り脱ぎ、直に懸りたると云々。

吉川治部少輔元長、當年廿三歳先陣に進んで軍の掟をせらるれば、元春・隆景は少し後口に控へられしが、敵も一と先づは手痛く戰ふべし、縱令味方先陣は切崩さるるも、幾度も押立々々無二に懸りて攻破るべき旨、高聲に下知せらる。既に太鼓を打つて兩口一同に進みたる處に、輝元床几に腰懸けて居られける後の山より、人二三十人計りにても動かし難き大石を礫に打ちける程に、大地鳴動いて人皆膽を消す。輝元是れ人力のなす業に非ず、今度の合戰勝利の瑞を軍神の示さるゝ處なるべし。又戰を早く始めよとの告なるべければ、早々押懸るべしと頻に下知せられたり。敵水谷口の先陣は、森脇市正・眞木與一・中井・米原等三千餘騎、弓・鐵炮を前に立て、備へ少し妻手の方へ引退いて、山中・立原・隱岐・加藤以下一千五百餘騎にて控へ、其外に又五百餘騎、力石・黑正・高尾以下に相添ひて、後の高みに控へさせ、敵閑道より攻登らば是を防ぎ、さなくば味方戰ひ疲れたる時入替るべしと定めたり。東口は先陣牛尾彈正忠・横道源介・同權允・遠藤・馬田以下一千餘騎、比部の山路を遮りて備へたり。二陣は横道兵庫助・岸・秋上・羽倉・平賀・松田・熊野以下一千七百餘騎、先陣痛く戰ふなれば、敵備を亂すべき間、其時無二に突懸りて死生を一時に決すべしと、皆下り居て控へたり。此者共尼子家に於ては、數度の戰功有りて武名顯はれたる勇士共なり。所は比部の大難所に堅固に陣を設けたれば、輙く攻破らるべしとは見えず、爰に輝元の近習に、田門右衞門尉・粟屋又左衞門とて勇士あり。輝元の前に

出で、今日の合戰に兩川の勢、其外の國人の手の者に先を駈けさせん事、旗本勢の瑕瑾なり。然れば某等一番に駈入り討死仕るべし。此儀御免を蒙るべしと、最期の暇乞ひて駈出でたり。斯て藝州勢太鼓を打ち鬨を作つて、坂口より押登る。尼子勢先に立てたる二百餘挺の鐵炮を、百挺づつ二手に作りて入替々々打立てたり。藝陽勢事ともせず、手負・死人を乘越々々攻上れば、敵の鐵炮足輕亂散りて引退く。此手一千餘騎の中に横道源介・同權允兄弟一番槍を心掛けて、足輕を押除けて眞先に進む。藝州勢には、例の田門右衞門尉・粟屋又左衞門先に進んで味方を離れ、横道兄弟と互に名乘りて槍を合せけるが、田門は權允に突伏せられて首を取られ、粟屋は源介に討たれければ、尼子勢勝に乘りて山上より下し懸れば、藝州勢突崩されて一度に山下へ引退く。

〔頭書〕一書に、此時飯田新四郎・門田右衞門尉等槍を合せ、敵數人突伏せ討死すとあり。□此門田と之あるは田門の事か。

水谷口に於ては、山中鹿之助軍士を勵まして、敵軍思の外少勢なり、殊に吉川・小早川常は後陣に控へて、軍の掟をこそなせる者が、兩家の旗先陣に見えて、前後の備相違せり。輝元は當年十七歳の大將なれば、心惡くからず、今日の合戰は先陣の一軍にあり、各〻手を碎かれて先陣をさへ突崩されば、後陣は一たまりもたまらじといへば、森脇市正・眞木與市等、敵の一陣・二陣切崩さん事、掌握の中にあり。鹿之助の手迄は一軍にも及ぶまじくといひて、各〻備を立てゝ二百餘挺の鐵炮を揃へて待ちかくる。吉川・小早川勢一手に成りて水谷口へ攻登る。尼子勢二百餘挺の鐵炮を入替入替打ちけれども、少しも疼(ひる)まず攻近づけば、森脇市正等、一千五百餘騎鬨を作りて突懸る。藝州勢暫し揉合ひけるが、敵かさより下しける故、突立てられて山の麓へ颯と引く。元長の控へられたる處迄雪頽(なだれ)かゝる。元長采配を振つて大音聲を揚げ、返せや者共とて、自ら五百餘騎にて進まるれば、元春・隆景も後より押續いて、頻りに下知を加へらるれば、前に引きたる者ども又引返して攻上る。

〔頭書〕異書に云く、此時□(出入)川勢香川又左衞門・二宮佐渡・森脇市郎右衞門・境與三右衞門・朝枝など我先にと進み懸り槍を入るゝとあり。

尼子勢敗る

森脇・米原等二度目の軍に打負けて、引退きたり。山中・立原入替りて防戰すれば、森脇以下も亦返し合せて切つて懸り、互に手負・死人を蹈付け乘越え、勇氣を勵みて戰へば、勝負いつあるべしとも見えず。然る處に初より配當たる國人ども、敵の前後左右の峯谷より、一勢々々突懸る間、山中以下終に叶はず引退く。東口にても吉田勢取つて返して攻登れば、牛尾彈正・横道・遠藤・匹田等突立てらる。熊野・松田等入替りて防ぎけるが、横道兵庫助痛手を負ひて退けば、其手の者皆負色に見ゆる處を、藝陽勢岩洞（いはほら）とも言はず攻登りける間、尼子勢多く潰えて、宗徒の者あまたそこにて討死す。

〔頭書〕一書に、熊谷が手には水落・末田・細迫槍を合せ、細迫彌三郎槍下にて討死、吉田衆粟屋右京・桂善左衞門槍を合せ、數十人突伏せると云々。出入□□云ふ、其外國出入□□右京・粟屋掃部御旗本の若侍衆、我先にと攻懸け、粉骨を盡すと云々。中にも眞木與市は無雙の勇者なるが、味方の引くにも構はず、敵數多突伏せ、敵中へ破（わり）て入り、相戰ひ討死す。水谷口にては山中・立原・森脇以下突立てられしが、坂の上にて取つて返さんとする處を、吉川勢境又平・同七郎右衞門・山縣宗右衞門・小坂越中守など眞先に進んで追駈くれば、蹈止る事を得ず、森脇市正槍を抛突にしけるが、消殘りたる雪に蹈み辷りて倒れしを、山縣宗右衞門槍の柄にて扣きたれば、下の谷へ辷り落ちて、命計りは助かりたり。尼子勢傳ひの城迄と志して落つると雖も、合戰利なき由聞きて、皆城に火を掛けて逃去る間、敗軍の者ども彌〻機を落したり。隱岐三郎五郎は引くべき樣なくて取つて返し、主從五人一所にて討死す。横道兵庫助は痛手負ひて道の傍へ立退いて追駈くる。敵に向つて是は味方なり、過すべからずと言ひければ、皆見遁して通りけるに、横道が姪壻に、中井善左衞門といふ者あり。十日以前毛利方へ降參せしが、横道を見知りて走り寄り、終に首を討落したり。眞木與一をば江田七郎衞門・淺原助六兩人して討取りたり。目黑左近右衞門尉は、手を負ひて日來知りたる土民の家に入りて、櫃の中に隱れたる處に、敵其家を取圍む故、隱れ得じやと思ひけん、櫃の中より出で切腹したり。牛尾彈正忠は具足を脫捨て引きけるが、敵手繁く追駈くれば、金尾半四郎・飛石孫太夫・由利甚

七、中間の四郎三郎など所々にて返合せ、討死しける間、彈正忠は異議なく牛尾へ歸り入りたり。山中鹿之助は銀の草摺紛れなき故、小坂越中守山路を一里計り追駈けたるが、山中終に逃延びて、しぶの木の茂りたる中に、家人後藤といふ者と只二人隱居て、命を助かりたり。此日尼子勢を討取る首員三百餘、其外切捨てたる者數多なり。藝州勢も田門右衞門尉・粟屋又左衞門・兒玉彌七郎・飯田新四郎・細迫左京亮〔頭書〕細迫左京云々。異本に、熊谷内細迫彌三郎とあり。等討死し、手負數百に及びたり。

末次に退去

二　末次土居明退の事

尼子勢悉く末次迄逃集りて、味方の討死を數ふる中に、山中鹿之助も未だ見え來らず、討死したるにやと言ひければ、各、興を醒し、尼子の弓矢是迄なりと、勝久を始め茫然として居たる處に、夜半に及んで鹿之助歸來りて、武士を元め町人迄も打出で、末次の土居を誘ふべき旨呼ばはれば、勝久を始めとして各、走出で、手を執りて悅び合へり。頓て末次に塀を付、所々に柵を結はせ堀を掘り、橋を引いて寄來る敵を待居たり。扨翌十五日、勝久昨日の合戰の手柄ある輩に勸賞を行はれて、横道源介に兼光の刀、同權之允には同作の脇差、森脇市正には鹿毛の馬を給はりたり。同日尼子勢悉く末次へ逃集りたる由告來れば、輝元・元春・元長・經言・隆景は、先づ富田の城に打入りて軍士を休め、重ねて末次へ押寄すべしとて、富田へ歸陣せられしが、同月廿四日、元春・元長・經言父子三人、七千餘騎にて末次へ陣を寄せ、向ふの山上へ打登らる。尼子方には敵陣河を隔たれば、橋は引いたり、川をこそ渡るべけれ、人馬渡り煩はん處を懸けて、一々に討取るべしとためらひ居たり。元春は兼ねて河を渡りて懸からん事危しと思はれければ、下知なきに叨にかゝるべからずと制法し、自らは元長と共に嶋根へ廻り、洗合口より寄すべしと謀りて、元の陣所には終夜所々に篝を燒かせ、軍勢の未だ陣取る樣に敵に思はせん爲め、兵少々殘し置かれたり。元春父子案の外に洗合口より押寄せらるれば、鹿之助が支度相違して、防戰の便なく、勝久以下末次を明退いて新山の城へ逃籠る。之に依りて元春、末次に河口刑部少輔・小鴨四郎次郎を籠置き、佐田の勝間に志道左馬助・中村内藏大夫、羽倉の城に長

勝久行賞す

毛利軍末次進發

尼子勢新山城へ退く

屋小次郎を置きて、富田の城へ打入られたり。

〔頭書〕異書に云く、勝間・羽倉兩城共に、志道・中村・長屋を番頭として、同心の在番歴々に、鐵炮三十挺宛差副へ籠置かるとあり。

三笠城合戰

三　雲州三笠城沒落の事

同年四月十五日、輝元・元春父子、隆景相共に牛尾彈正忠〔頭書〕或書に北彈正とあり。が籠居る、雲州三笠の城へ陣を寄せらる。然るに同十六日、吉川の臣今田中務少輔經忠・香川兵部大輔春繼、此間他所に在りて、兩人共に比部の合戰に合はざる事を無念に思ひて、家人共引具して打出たるに、〔頭書〕或説に、黑杭宗右衞門・足立彦左衞門も、今田・香川に從ひ出づるとあり。小坂越中守・岡宗左衞門も路次より相加はりて、其勢二百餘人、三笠の城の三の曲輪の固屋を攻落さんとて、城中へ攻入らんとす。敵百四五十人打出で防戰ふと雖も、寄手稠しく攻懸れば、忽ち城中へ逃入りたり。今田・香川以下勝に乘つて、一時に乘破らんとする處に、城中より大石・小石を透間なく抛掛くる。寄手是に當りて進み兼ねたるに、城兵又力を得て、七八十人槍・長刀を取りて突出づるを、寄手又追込みて一度に早く引取りたり。〔頭書〕此日各手を負ひ、香川が家人一人討死。元春・元長、諸軍の中に於て勇を顯はしたる事比類なしと、内々には感せらるゝと雖も、拔駈の事は兼ねて制禁せられし故、軍の掟を破りし事奇怪なりとて、今田・香川以下に暫し對面免されず、〔頭書〕或説に、元長より内證に感狀を出さる云々。同十七日、總懸にして城を乘崩すべしと定められければ、若き者共は十六日の夜半より、城近く忍寄りて待居たり。然る處に彈正が弟隣西堂といふ僧、城に居合ひて降參の事許容せられば、兄彈正に城明渡さすべき由詫言しければ、三家其願に任せて下城すべきに定りたるに、夜半に手過して城中の固屋より出火あり。宵より切岸に付居たる者共は、城中扱ひの事をば知らず、味方先駈して火を掛けたりと心得て、我先にと攻上る。〔頭書〕城中西の方の固屋より火出たり。井上肥前守眞先に進んで、甲の丸へ一番に乘入れば、牛尾彈正忠・同弟隣西堂槍を以つて突立つる。井上は唯一人、敵は數十人なれば、終に城戸より外へ退出づ。内藤河内守・今田中務少輔・香川兵部大輔・森脇采女、甲の丸へ乘入らんとて、構置きたる枝折戸を切破らんとす。恩田與市左衞門・飛石宗兵

城中出火

衞・岩田・熊谷など言ふ牛尾が家人共、勇を勵んで防戰ふと雖も、寄手多勢なれば終に枝折戸を切破る。恩田與市左衞門は、内藤河内守に突伏せられて、首を取らる。香川・森脇・鹽谷孫次郎、何れも首を得たり。牛尾彈正忠は今を限りに戰ひ、槍をも打折り、太刀を持ちて切廻りけるが、あはれ能き敵もがな、引組んで刺違へんと思ひ駈廻りける處に、今田中務少輔牛尾を目懸けて馳寄りければ、彈正見て、渠は吉川の家臣隱なき大剛强の兵、是ぞ能き相手なりと、詞を懸けて互に馳合せ暫し戰ひ、牛尾痛手を負ふと雖も事ともせず、二人人交せもせず相戰ふ。今田不圖思付きけるは、牛尾も名有る勇士なり、運盡き今最後の軍の爲體（ていたらく）、敵ながらも無慙なる者の身の果てかなと氣付きければ、少し心弱く、急に勝負を決せんともせず、兎角會釋して時を移す。彈正は心を悶（せか）せ、何とぞ一太刀にても討付け、疼む處を引組んで刺違へてんものをと思入りて戰へども、今田は聞ゆる大力にて、討物の達者なれば、急に勝負を決せん事、彈正が思ふ樣にも叶ひ難ければ、餘りに心悶きもどかしくや思ひけん、持ちたる太刀を中務に投打にして、其儘火中に飛入り燒死たり。〔頭書〕或書、又角井と名乘り、吉川勢立花新介と渡合ひ、數刻相戰ひ。兩人何れも兵法の達者なるが、新介終に角井を討捕る云々。舍弟隣西堂も續いて火の中へ飛込み死す。牛尾が妻は十歲計りの子を脇に立て、白き小袖に赤き手拭にて鉢卷し、太刀を持ちて働きけるが、彈正が體を見て、子を抱いて同じく火中に駈入り燒死たり。斯て城中悉く死亡せしかば、其後當城には牛尾豐前守を籠置かれたり。

牛尾豐前守城を守備す

熊野落城

四　熊野降參の事 井 高瀨城退口の事

同十八日、三家三笠表より、熊野兵庫助が居城、雲州熊野の城へ陣を寄せらる。兵庫助は先年富田落城の時、毛利家へ降りしが、勝久雲州へ打入られし時、又尼子方に成り替れり。然るに井上肥前守渠と昵（むつま）じかりけるが、再び毛利家へ歸參せば、本領申與ふべき旨進めければ、熊野異見に任せ、頓て城を明渡したり。輝元は夫より平田へ打入り、元春父子・隆景は六千餘騎を率ゐて、高佐へ押寄せらるゝに、城兵則城を明けて、高瀨の城へ窄みたり。五月、元春父子鴟巢表へ打越え、平田の手崎の城を築いて、牛尾大藏左衞門・岡宗左衞門を籠置き、それより平田へ打入らる。七

高瀬城没落

月、元春父子・隆景高瀬へ打出で、同三日狼が森に陣を居ゑて、城の樣體を窺はるゝに、容易に力攻にし難き城なるに依りて、近邊の稻盡く刈捨てさせ、同廿七日此地を引拂ひ、平田へ打入らるゝ處に、米原平内兵衞が一族、米原與一兵衞・同四郎兵衞等高瀬を出て附送る。味方返合せ戰ふと雖も、渠等至剛なる故少しも疹まず追來る。隆景の臣井上又右衞門數度返合せ、比類なく働きたり。されども其日は敵・味方共に手負・死人一人もなし。次の日又敵城を出で跡を慕ふ處に、寄手一同に皆取つて返しければ、城兵遁少勢なる故、此より一度に引返しけるを、岸際迄追込んで、其より平田迄打入られたり。此時元春は、米原等纔の勢にて、味方の多勢をも恐れず慕ひ出たる事、敵ながらも神妙なり。平内兵衞勇氣乏しければ、命を惜んで頓て城を明け去るべき間、與一兵衞等は抱置きて、家人と成すべきなりといはれけるとなり。

五　平田勝間兩城軍の事

平田合戰

勝間落城

平田の手崎の城には、牛尾大藏左衞門・岡宗左衞門在番しけるが、米原與一兵衞尉・同四郎兵衞尉、高瀬より押寄せ足輕をかけ戰を挑めば、城中より牛尾・岡打出で、伏軍して城中へも敵數人討取る。米原も分捕して打入りたり。同八月加藤彦四郎・福山次郎左衞門・岸左馬進・力石九郎兵衞・目加田采女允以下一千餘騎、手崎の城下へ相働く、之に依り此由を元春の陣所へ注進しければ、則ち杉原播磨守を遣さる。牛尾・岡打つて出で散々に相戰ふ。半ばは杉原懸合ひ、城兵と一手に成りて相戰ひ、敵數多討捕れば、尼子勢叶はず、則時追崩されたり。

〔頭書〕異書、勝久三刀屋藏人をして、勝間を攻めさせらる。城番の志道・中村謀を廻らし、味方の軍士に下知して、一旦弱々と會釋して呼寄せ、切所にて取つて返し左右より引包み、三刀屋を始め、首百十餘級討取る。翌日入江彌六と云ふ者を使として、元春の陣へ此旨注進すと云々。其後勝間の城山下に梟首すと之あり。又志道左馬助・中村内藏大夫が籠居る、佐田の奥勝間の城を尼子勝久、三刀屋藏人・中村平三兵衞等に、八百餘騎を添へて攻めさせらる。寄手山下へ働きけるを、志

道・中村打出で相戰ひ、忽ち勝利を得。其日の大將三刀屋藏人を討取りたり。〔頭書〕又曰、三刀屋をば志道が手へ討取るとあるなり。

〔頭書〕異書に云く、奥比野勝間の城に、志道左馬助・中村内藏大夫兩人に、同心歷歷三十挺差添へ籠置かる云々。

勝久其事を憤りて、此後も度々勝間邊へ人數を出さるゝ間、元春、森脇若狹守に、森脇若狹父も、若狹と云ふ。森脇内藏大夫の父也。同名飛驒守の兄なり。二百餘人差添へて城の樣體を見て歸るべしとて遣されけるに、益田越中守藤包が手の者も、百計り伴ひて行きて歸る處に、新山より森脇市正・平野嘉兵衞・眞木眞三左衞門等七百計り、跡を慕ひて討止めんとす。敵大勢なる故、雜兵共足竝亂れんとすれば、森脇若狹守取て返し、慕ふ敵を追拂ひ、又附送れば突退いて追歸し、味方を救ひて歸りたり。又高瀨の城兵糧乏しきに依りて、新山より兵糧を運送する由、元春の陣所へ注進あるに依りて、元春其臣吉川式部少輔經家を遣さる。目加田彈右衞門・同采女允・高尾右衞門尉等、高瀨の城へ兵糧を入れて歸らんとする處へ、式部少輔懸合せて散々に相戰ひ、敵船少々乘破り、數多首取りて歸りたり。

毛利軍引上ぐ

〔頭書〕敵新山より萬願寺の城を討取り、佐田の鄕より船を出し、高瀨へ兵糧を入るゝなり。吉川式部少輔・岡宗左衞門馳向ひ、兩人手柄仕るなり。其後敵籠城叶はず、降を請ふに依りて、米原平内兵衞、其外の城卒新山へ送り遣され、方角の仕置せらる。

六　輝元隆景元長藝州歸陣の事

尼子家の諸士、所々の軍に利を失ひて、勢ひ微々になり行けば、退治せんに手間取るまじ。然れば元就の老病重らせらるれば、先づ速に立歸りて是を扶助すべしとて、同年八月下旬、毛利右馬頭輝元・小早川左衞門佐隆景・吉川治部少輔元長、雲州平田を發して藝州へ歸陣せらる。吉川元春は勝久及び其黨類を退治の爲め、猶雲州に留まらる。斯て元春、九月上旬六千餘騎を帥ゐて、古志因幡守〔頭書〕古志因幡守、一書に玄蕃とあり。が十倉〔頭書〕一書に德良とあり。の端城を圍まるゝ處に、因幡守叶ひ難く、一向詫言して降を乞へば、

元春富田入城

元春許して本領相違なく施して、其城に鹽屋豊後守を相添へて籠置き、其より元春は富田の城へ打入られたり。

毛利軍苦戰

七　羽倉城合戰の事

尼子勢横道源介・同權允等、長屋小次郎が在番しける羽倉の城へ數度押寄せ、在家を放火し、足輕をかけて働きけるに、城兵も初の程は弓・鐵炮にて稠しく防ぐと雖も、敵入替々々攻めける間、後には城を落されざるを專らにして堪へ居たり。

〔頭書〕異書に云く、羽倉城に長屋小二郎其□同心歸々鐵炮三十挺差添へ、籠置かる云々。

虫入

其後山中鹿之助・横道兄弟相共に、一千餘騎にて羽倉の城へ寄せ來り、一時に乘破らんとすれば、城よりも打出で防戰し、井上源左衞門・中島善左衞門等武勇を顯はす。

〔頭書〕同日、此時佐々井村の住人井上源左衞門・小山村の中島善左衞門眞先に進んで相働き、鹿之助が先手の物頭垣田與三郎を兩人して討取るとあり。一書に垣田を植田に作る。

羽倉落城

尼子勢垣田與三郎、鐵炮に當りて死すと雖も、寄手少しも疼まず、横道兄弟等眞先に進んで攻めたれば、城兵終に引退きたり。之に依りて寄手、外構の固屋を一宇も殘さず燒捨てたり。斯て此由富田の城へ注進しければ、元春急ぎ後詰すべき由言はるゝ處に、益田越中守藤包長屋は、甚だ氣の短き者なれば、後詰遲滯せば堪りかねて落つる事も有るべし。速に某馳向ふべしとて、則ち打立ち、其勢一千餘騎にて馳向へば、元春・三刀屋彈正左衞門・三澤三郎左衞門にも同じく向ふべき由下知せられば、兩人も頓て二千餘騎にて續きたり。益田後陣をも待たず、山中が陣へ一文字に切つて懸れば、尼子勢崩引きけるを、數多討捕り、三刀屋・三澤も引く敵の跡を追つて、少々討取りて歸れば、山中以下は新山へ逃入りたり。是に依りて長屋も運を開きたり。

元春逆戰

鹿之助新山城に退去す

八　尼子勝久末次を攻むる事

勝久諸兵を集合す

尼子左衞門尉勝久は、山中・立原・横道・森脇等を集めて、輝元・隆景歸國に依りて、敵兵過半是に從ひ、當地に殘る兵纔なるべし。此間に諸所の城に籠置きたる味方を一所に集めて、國中に打出すべしと評議して、此由諸所へ觸遣す。秋上三郎左衞門は病氣なりとて、嫡子伊織助久家に五百餘騎を副へて新山へ遣したり。米原平内兵衞尉綱寛四百餘騎、福山次郎左衞門・同彌次郎・神西三郎左衞門・加藤彦四郎七百餘騎にて相加はる。寺本安藝守隱岐國より渡り合はせて二百餘人。其外大山の衆徒經悟院などを先として、百・二百集りて、都合其勢四千餘騎、十月三日新山を立ち

元春末次表へ向ふ

て、同五日の曉より河口刑部少輔・小鴨四郎次郎が籠居る末次の土居を圍攻む。河口小鴨城を堅固に抱へたり。此由富田へ告來れば、元春、末次は塀の一重も墓々しからで、構へ堅固ならず。殊に城兵三百には過ぎまじければ、難儀すべし。急ぎ後詰すべしとて、五百計りを率ゐて富田を打立たらるれば、路次にて杉原播磨守・南條豐後守・三刀屋彈正左衞門・三澤三郎左衞門・益田越中守以下相加はり、總勢五千餘騎、其日の暮方に末次表へ馳著たり。尼子勢後詰ありと見て、攻口を退き陣々を

南條山田歸陣

堅く構へて敵のかゝるを待懸けたり。元春明日未明敵陣を伐崩すべし、今夜先づ新山へ兵を差向け置きて、敵の退道を取切り、盡く討取るべしとて、南條豐後守宗勝・山田出雲守重直等に、早く新山の麓へ打出で、敵の後を遮るべしと命ぜらるれば、南條・山田一千餘騎にて新山へ馳行きたり。山中鹿之助、勝久に言ひけるは、爰にて對陣あらば後詰勢大軍に成り、味方の後を塞がれ、一人も助かる者あるまじければ、敵後へ勢を廻さゞる先に、早く引拂はるべしと言ひて、夜半に竊に引退いて新山へ逃入りたり。南條・山田未だ新山へ行著かざる先に、勝久早く引拂はれし故、異議なく歸陣せられたり。藝州勢深更に至りて、敵陣の篝次第に消え行くを見て、人を遣して見せたるに、敵一人も無き由告げたれば、今一日堪ふるに於ては、悉く討取りて、尼子の根を斷つべきに、賢くも逃げたりと何れも言合へり。元春、河口刑部少輔久氏・小鴨四郎次郎に對面して、當城を堅固に守りし事を感ぜらるれば、兩人の者速に後詰せられし故、運を開くのみならず、吾々が武名迄顯はれたりと謝詞を演べて悅びたり。元春は夫より新山表へ移軍して、城下放火せられ、三日陣を

元春高瀬攻城

元春病む

居ゑられけれども、敵出合はざる故、同十日南條豐後守宗勝・杉原播磨守殿して、新山を引拂ひ、夫より高瀬の城へ押寄せらるれば、米原平内兵衛一戰にも及ばず城を明渡して、新山へ引窄みたり。之に依りて高瀬には人數を籠置き、夫より神西三郎左衛門が籠居る、末石へ赴かんとせらるゝ處に、神西は末石の城を明けて、因州へ立退き、其跡へ山中鹿之助幸盛七百計りにて入替り、稻石へ働き、鄕人共多く討取りたりと告來れば、さらば山中を攻むべしとて、既に打立たんとせられし處に、元春俄に風氣に侵され、末石をば重ねて攻むべしとて醫療を加へらる。

〔頭書〕或記に云く、此頃尼子方に古志玄蕃と云ふ者、雲州德良の要害に住す。義久兄弟富田下城以後、彼城を明退き、玄蕃は京都へ上り、今度勝久雲州亂入に依りて、又本國に歸り、德良の要害毛利家よりの城番を追出し、彼城に籠居る。之に依りて吉川元春發向して、取卷いて稠しく攻め給ふ。古志も城中を打出で、暫く防戰ふと雖も、寄手の謀計淺からず、每時利を失ふ。依りて始終叶ひ難く思ひけるにや、其後城中より使を以つて。諸卒の命を助けられば、玄蕃一人自殺を遂げ、城を渡すべき旨申斷る。元春聞き給ひ、則ち吉田へも御相談ありて、此儀如何計らはるべきやとの事なる處に、此者尼子家に於て無二の忠志有りて、度々武功を顯し、近年上方に於て松永逆心、三好家退治の時、將軍家を賴み、洛中に於て武功ありと聞ゆ。然らば一命を助けて下城させ、領地を與へて毛利家に奉仕せしめば、向後味方の爲め宜かるべしと、元就命せられければ、元春此旨を玄蕃に宣ひ聞かせられけるに依りて、則ち添きと領掌し、人質等差出すに依りて、身上仔細なく其儘彼城に差置かるゝと云々。案ずるに此事本文に之ある古志因幡守事か。

三村兄弟元春に助勢を乞ふ

九　備中國三村退治の事

備中國三村元親・同實親兄弟より、元春の方へ使を以つて言ひ越しけるは、親修理亮家親、御味方に屬して馳走仕り候處に、先年宇喜多和泉守直家が爲に、方便(たばか)られて討果されぬ。然らば我等宇喜多を亡して、父の仇を報ぜんと存ずると雖も、力微にし

宇喜田和泉守亦助勢を乞ふ

毛利家宇喜田和泉守を助く

て叶ひ難く候間、御哀憐を蒙り、彌〻幕下に屬し、御太刀影頼み奉る由申し越す。又浦上帶刀左衞門尉宗景よりも、宇喜多和泉守主從の義を亂し、不忠を企て候間、彼者を討亡して味方に參るべき由言ひ越したり。又宇喜多和泉守直家より、洲波隼人入道如慶と云ふ者を使として、隆景へ加勢を請ひ、其上安國寺惠瓊を頼み、三村・浦上を退治するに於ては、備中一國をば悉く輝元へ進ずべき旨言ひ送りたり。元就は病氣故大抵計りを聞屆けられ、兩川の計らひに任せらる。元春よりは宇喜多は表裏の佞人なり、三村儀は家親より以來、毛利家に對し忠功を勵み、志淺からざるは、三村を見繼がるべき旨言ひ達せらる。此事僉議の上、隆景如何思はれけるにや、宇喜田を見繼ぐべき旨達て言はるれば、輝元も南表は隆景の計らひなればとて、是に任せられて、宇喜多へ同意の返事せらる。之に依りて宇喜多和泉守直家八千餘人を率ゐて、三村が人數を入れ置きたる備中國才田の城を取圍ませ、三村一分の後詰成り難く、同國穗田の庄式部少輔元祐を頼みければ、式部少輔二千餘にて三村に先立ち、才田表へ打出で、宇喜多が先陣・二陣迄忽ち切崩したる處に、元祐が馬口強く

才田落城

遠藤謀りて家親を殺す

桂賞を給ふ

して、ふと宇喜多が陣中へ駈入りて、敵の爲めに取籠められ、元祐終に討果さるれば、〔齋カ〕才田の城も落去したり。

〔頭書〕宇喜多直家、三村家親を討果す事は、直家家人遠藤と申す者に申含め、備中へ遣す。遠藤、三村が許へ立越え、宇喜多が勘當を蒙り、是迄相越したり。召置かれ給はる樣にと言ひて罷居り、時節を窺ふ處に、家親或る夜酒宴の半ば、燈近く居たる處に、遠藤緣際迄忍寄り、二三間程にて鐵炮にて射たり。間近き故胸を打貫き、有合ふ者共歷々有りけれども、家親を介抱し騷動する間に、遠藤は異議なく岡山へ立退きたり。此褒美として、同姓に任じ宇喜多河内守と稱し、一城を預置くなり。

〔同〕或書に云ふ、三村が臣三村孫兵衞、元親に背いて己が家城同國成羽へ引籠り、毛利家へ内通す。是に依りて諸事示談の爲め桂善左衞門を成羽へ遣され、桂上下五十人計りにて赴く處に、元親が者□所々に於て見咎め討留めんとす。桂勇剛なる故、數人討取り、追散らして成羽に到り、孫兵衞に對談し、異議なく吉田

三村三好へ通ずる由を知らす

毛利勢三村を討伐す

木實落城

に歸る。之に依りて備中知屋・花見二箇所を桂に給はると云々。

其後宇喜多より毛利家へ告げけるは、三村は阿波の三好へ一味するの由言ひ來り、又三村が家老三村孫兵衛といふ者よりも、元親は毛利家を恨みて、三好に一味の約をなし、又信長にも内通するの由申し越したり。　茲に因りて輝元・隆景發向して、三村兄弟を退治せらるべきに相極りて、先づ桂善左衛門尉を成羽へ遣し、樣子聞合せられ、元龜元年十二月上旬、毛利右馬頭輝元・叔父小早川左衛門佐隆景相共に、備中國へ出張せらる〔頭書〕或記に、十二月八日吉田を打立ち給ふとあり。輝元は、同國小田に陣を居ゑられ、同廿七日隆景手の城へ打寄せらる。　當城には三村右京籠居たるが、落失せて嫡子新四郎城を守りて留居たるを、翌年正月朔日終に攻落さる。　城主新四郎をば、毛利勢粟屋彦右衛門討取りたり。　其外長井右衛門大夫・市川甚左衛門・三木新右衛門・三戸六郎右衛門・田原平右衛門・兒玉七郎右衛門・内藤彌左衛門・宇喜多右衛門尉・三木市助・三上平兵衛・積山覺阿彌等高名す。　宍戸が家人深瀨彈正・中村刑部・淺原木工允・木原彦右衛門已下、熊谷が手に熊谷新介直顯能き首を討取りたり。　同十二日成羽へ陣を替へられ、其より木實の城を取圍まるれば、城主三村上野入道、養子實親に腹切らせ、自分は命を助かりて落行きたり。　又荒手の城も明退き、幸山の城主石川久孝も城を捨て逃行きたるを、則ち討手を遣はされて討果す。　其より元親が家城松山へ陣を寄せらるれば、元親稠しく一戰して、其後諸勢の命に替ふべしと申し斷り、終に切腹したり。　之に依りて備中國悉く平均す。　其後庄式部少輔元祐が穗田の居城へ毛利元清入城して、是より穗田治部少輔と云ふなり。　三村退治の後、諸牢人多く、國中靜謐ならず。　又境目肝要の地なればとて、同國新見杠（ゆづりは）の城に吉川の老臣今田上野介經高に、次男兵部丞〔信イ〕春倍を附けて、今年より天正十九年迄、廿一年の間在番させらる。　又同國木實の城をば、宍戸安藝守に預けられけるに依りて、宍戸より佐々部美作を入置きたり。

三村元親切腹

杠の城の守護を嚴にす

〔頭書〕異書に云ふ、手の城には三村越中守、比野因幡守籠居て手强く防ぎ戰ふ。

比那三太夫大勢にて駈出で、寄手を突退けんとす。　毛利家旗本の番頭長井與二郎一番に槍を合せ、組口川已下本文に所載の勇士相働き、積山覺阿彌、深手負ひ

早速死たりと云々。又云ふ、三村越中守、比野因幡守を宍戸が手へ討取りたりと云々。又云ふ、其後松山の城へ取□（虫入）城既に落城せんとする時、大庭加賀守狂歌に、

一つ二つ三村の家は四の海浪こそ越ゆれ末の松山

元親自害の時、「よし去らば水ほの上の泡消えて」と、上の句計り書捨て自殺すと云々。

〔頭書〕木實城或は鬼身城とあり。或書に云く、木實城能く抱へて防ぐ。之に依りて志道・福原已下宗徒の輩馳向ふ。味方手負・死人數々、佐々木七郎右衛門敵數人討取り、討死すと云々。

〔同〕又云ふ、大庭加賀守狂歌を詠みて、矢に附けて松山の城中へ射入れたりとなり。此歌則ち前に之あり。一つ二つの歌なり云々。但し大庭加賀守大内家の侍にて、文武の達人なる由、或書の説眞僞詳かならず。但し陶滅亡の後毛利家へ降れるにや。

〔同〕杠城に、森脇源右衛門・富屋若狭・觀音寺・井上甚兵衛（或有二志摩一）・新見宗兵衛・初田與兵衛・桑原孫右衛門・井下四郎兵衛・大屋次郎兵衛・森脇對馬守・河邊又右衛門など、其外歴々今田に差添へ籠置かるゝ由、或書に見ゆ。兵部丞春倍は、新見左衛門尉入道以云が事なり。今田忠左衛門家知が父なり。今田杠在城の中、三村が殘黨國中にありて、狼藉する故、城より人數を出し、度々討取りたり。

秋上三郎左衛門毛利勢に降る

一〇　秋上父子心變りの事

元龜二年三月、杉原播磨守盛重より、元春の陣所へ注進しけるは、某が居城伯州泉山の近邊へ、尼子勢度々働くと雖も、戰毎に盛重勝利を得、敵の將平野・馬田・羽倉其外數多討取りたる由を告げたり。同年四月、雲州神魂の大宮司秋上三郎左衛門・同嫡子伊織助久家、尼子を背いて元春の陣所へ降參す。其故は、尼子勝久雲州へ打入らるゝ時、京都よりす廻文を送りて、若し本意を達して本國へ打入るに於ては、山中・秋上兩人に執事せしむべき旨約束せられし故、秋上父子守山の城を出で、山中・立原と共に軍忠を勵めり。然るに初こそあれ、後は鹿之助一人の計らひに成りて、

秋上久家山中市之助と訣別す

秋上は何事も耳の餘所にのみ聞きしかば、此事を殊の外本意なく思ひ居る由、元春聞及ばれ、秋上は尼子家に於ては多勢の者にて、殊に智勇も勝れたり。勝久へ恨を含む折節、味方に招かば早速降參すべき間、此時節を幸に味方に引成すべしとて、竊に使を以つて味方に組ませば、平田近邊に於て、七百貫知行させしむべしと懇懃に言ひ送らるれば、秋上大に悅んで、毛利家一味の領掌したり。元春頓て平田七百貫の判形を秋上に與へ出されたり。伊織助久家唯一人鹿之助が許へ立越し、愚父三郎左衞門存ずる仔細ありて、毛利家へ罷成りぬ。然れば某も父と一所に有るべきなれば、日頃の好み捨て難く、今一度見參して暇乞をもすべきと思ひ、來りたる由言ひければ、鹿之助、賢父毛利家一味の事、尤もさぞあるべき。貴方と某は若年の時より斷金の交をなしき、其名殘を思はれて、是迄の入來本望の至りなり。武士の習明日を知らぬ命なれば、暇乞の盃して明日よりは足下を目に掛けて討留むべし、貴殿も某を討つべき謀を廻らさるべしと、酒を出して數返飲み、相互に涙を流して別れをなしたり。よも二心はあるまじと賴みたる秋上、敵となる上は又誰人か心變すべきと、安き心もせざる處に、吉田八郎左衞門尉も秋上と一味して、毛利家へ心を通ずる由、告ぐる者有りければ、勝久是を信じて、頓て吉田を新山に於て誅戮せられたり。此八郎左衞門は、元就に一生對面すまじきと、神水を飲みたる程の者なれば、無實の讒に陷りたるなるべし。

元就逝去

一一　毛利元就逝去井末石城没落の事

毛利陸奥守元就は、良〻久しく膈症の樣に煩はれて、醫療の驗なく、元龜二年六月十四日、行年七十五にして終に死去せられたり。

〔頭書〕元就逝去の時、聖護院門跡道澄御追善の爲め、法華無量壽品を書寫し給ひ、悼の和歌二首を手向けらる。前書有りて

おしなべてなげきの枝に鳴く蟬のなみだ伴ふ袖の上かな

無量壽品の心を、

惜む夜の月は入りても鷲の山嶺より高き名やはかくるゝ

〔頭書〕異書に云く、元就御在世の中、和歌七十有餘首、連歌百三十句、詠草二卷となして、聖護院殿より三條大納言實賢卿へ差出され、彼卿より判言を添へらる。連歌をば紹巴法印に見せて註釋を加へさせ、右の詠草、何も叡覽に達し給ふ。因りて叡感の餘り、元龜三年卯月、從三位を贈り給ふ云々。

〔同〕公方義稙卿の時、永正十四年依武田元繁誅伐之功任刑部少輔、大永六年後奈良院御即位之時大膳大夫、翌大永七年上洛敍從五位下、公方義晴卿之時賜錦直垂、天文二癸巳九月廿五日從五位上、翌廿六日任右馬頭、永祿三二月十五日敍從四位任陸奥守、公方義輝卿被加御相伴衆、元龜二六月十四日、七十五歳卒。翌元龜三四月贈參議從三位。

元春孝養の道を辨ふ

輝元隆景を始め遠近の臣、其外領國恩顧の族、何れも是を歎き悲めり。頓て早打を以つて元春の陣所雲州高瀨へ此由注進せらる。諸軍士則ち本陣へ參向して之を弔ふ。元就對面して、元就の臨終に膝下に居合はざる事殘念の至りなり、然りと雖も今陣中にあれば、深く悲むべき時に非ず、作善・佛事等の儀は、吉田に於て輝元・隆景執行はるべし。某は一日も早く敵を亡すを以つて孝養にすべし。然れば伯州大山の經悟院、勝久に合力するに依りて、夫を便りにして、山中鹿之助末石の城に籠り、福山次郎左衞門・横道源介・同權允、八幡の城に居て國中を惱亂せしむる間、先づ彼經悟院を追討すべし。元就へ志有る輩は、日來に超えて軍功を勵まし、敵を挫るゝに於ては、亡父の弔には供佛・施僧にも猶勝るべしと言はるれば、諸軍士涙を流して暫しは物をも言はず、良〻有りて南條豐後守宗勝入道、某事尼子の爲に本國を除かれ、山名を賴み數年罷居ると雖も、終に本望を達する事もなき處に、元就の御太刀影にて本國へ歸入り、其上新恩數箇所給はり、身を安く樂める事、天地・父母の恩より猶勝りたり。然れば今度經悟院に於ては某一番に攻入り、彼生前の御恩を報ずべしと、聲を立てゝ泣きたれば、其座の面々一度にわつと叫びたり。

元春經悟院を攻む

南條宗勝確志を陳述す

同廿一日、吉川駿河守元春、伯州大山へ發向と稱して、高瀨を打立たれば、三澤三郎左衞門爲清・三刀屋彈正左衞門尉久扶・杉原彌八郎元盛・南條豐後入道宗勝・宍戸安藝守隆家・口羽刑部大輔通良已下、雲伯の兵殘らず馳集りて、六千餘騎相從ふ。山中鹿

元春石を攻むることを祕す

之助此事を聞きて、元春伯州へ打越されば、諸所の味方を一手になし後詰し、經悟院と揉合して、勝利を得べしと巧み居たり。元春實は經悟院誅伐の爲に非ず、末石へ押寄せて鹿之助を討取るべきとの事なれども、兼ねて末石發向と聞きなば、鹿之助城を明け去る事も有るべしとて、味方の軍士にも大山發向と披露せられたり。元春物見を遣して見せられたるに、鹿之助未だ末石に在る由告げければ、元春路次より俄に末石へ取懸けらる。

末石沒落し鹿之助降る

〔頭書〕或説に、元春此時末石の城二十町隔て陣を居る、辻々に高札を立て、鹿之助城を落去らん時、在々浦々に於て隱し置く者あらば、後日重科に處すべきの旨掟し給ふと言へり。

鹿之助は斯る謀略有るべしとは知らず、油斷したる處へ、元春ひた〳〵と取圍み、返り鹿垣しつかと結廻し、仕寄を付け勢樓を上げ、城中を目の下に見下して、急に攻められければ、鹿之助防ぐに術なくして、宍戸安藝守・口羽刑部大輔に詫びて降參す。

〔頭書〕城の土手高くて、寄手の矢・鐵炮役せざる故、勢樓を三重に上げ、矢・鐵炮は云ふに及ばず、礫を打込むに依りて、城中難儀したり。又或説に云く、此時國崩と言ひて、唐より渡りたる鐵炮七八十人程して抱ふる計りなるを、城の向の山に仕掛け打ちけるを、城より盜取り、多人數にて切岸を引上げけるを聞付け、寄手へ取返す處に、城兵比野彌吉兵衞と云ふ者、城の矢倉に登り、寄手を射る。鐵炮重き故多人數にて元の所へ取上げ、兼ねて時刻移る處に、吉川衆今田中務筒口を抱へて引上げければ、其頃雲・伯に雙びなき人力、入江彈正と云ふ伯州士火皿本の肩に掛け、兩人して山をかゝへ上げ、難なく元の所へ取戻したりと云々。此説陰德太平記にも之ある歟。

末石城攻めに國崩の大炮を用ふ

毛利勢鹿之助の去就を試す

元春城を請取りて、鹿之助をば頓て其夜頸を刎ぬべしと言はれける處に、宍戸・口羽辭を同うして、强いて渠が一命を助けらるべしと請ひけるに依りて、元春許して宍戸・口羽に預け置かる。鹿之助若し透間を伺ひて、逐電する事も有るべし。一と先案堵の思ひなさしめ、長く味方にも成るべき者か、其心を見んとて、防州德地に於て千貫、伯州にて千貫の所宛行はるべき旨言はせらる。鹿之助は多年の科を赦免

鹿之助毛利に從ふ旨を述ぶ

せられ、一命を助け置かるだに有るに、所領を給はる事、偏に隆家・通良の〔祕カ〕披計に依れりと謝詞を述べて、元春の目見しければ、尾高と云ふ所に宿を言ひ付け、宍戸・口羽より警固を附置くべき由下知せらる。其後鹿之助宍戸安藝守・口羽刑部大輔兩人を以つて、元春へ言ひけるは、今度一命を助けられし事、厚恩の至なり。然りと雖も此報恩の爲め、勝久に弓を引かせん事、人倫の道に背きて畜生殘害の働に候へば、此事をば御免を蒙るべし。然れば五百人扶持給はるに於ては、牢人を集め伊豫國へ押渡り、其より長曾我部が領分土佐の内へ切入り、手の際切取り、御領國と成すべしと言ひけれども、元春曾て許されず、鹿之助又言ひければ、四國は中國へ程遠からざれば、某を疑はれて承引なきにや、然らば千人扶持給はらば、九州へ渡りて討取りに仕るべしと望むと雖も、是又許容せられず。鹿之助扨は元春深く疑心せらるるなり。此上は所々の城共悉く明渡さすべし。先づ當國八橋の城を明けさすべしとて、宍戸・口羽が勢三百餘騎に、鹿之助が家人日野又六と云ふ者を添へて、八橋の城渡すべしと言ひ送りたり。當城には兼ねて福山次郎左衞門籠居たるが、横道權

杉原盛重鹿之助の實意を元春に報ず

鹿之助の飛脚捕はる

允先日稲石へ働きし時、手を負ひたれば、養生の爲め是も當城に居合はせて、兩人使の詞を聞いて、鹿之助味方に有らん程こそ、其下知にも從ふべし。渠命の惜さに侍の本意を忘れて敵に下り、人の嘲りを受くるのみならず、我々にも城を渡せと云ふ事奇怪なりとて、大鐵炮を打懸けて追返したり。然れども當城守得難くて、南條入道取扱ひて、福山・横道城を明渡して新山へ窄みたり。杉原播磨守盛重、其頃所勞の事ありて、末石の城へは向はざるが、元春の陣へ使を以つて、山中鹿之助降參の事、一旦命を續くべき謀にして、全く實儀にあるべからず、心を免さるまじ。若し逐電の事もあるべきなれば、某所々の道辻に人を出し、様子を窺はすべき旨言ひ送りたり。元春聞かれて、盛重が言へる處吾心と符合せりとて、頓て使を返さる。斯〔出入〕口杉原播磨守忍に馴れたる者を、〔重尾カ〕くずまう・三柳邊に隱置きたる處に、鹿之助方より、勝久の陣新山へ遣す飛脚を搦捕りたり。盛重其使の持ちたる文と共に、元春の陣所へ送りたり。元春其書狀を披見せらるゝに、末石の城圖らず取圍まれ、防ぐに術なく、一旦命を全うして重ねて本意を遂げんが爲め、僞りて敵に降りぬ。何とぞ透間を

鹿之助逃る

窺ひて免出で、新山へ歸參るべし。其迄は心強く思はれて、新山を堅固に守らるべし。若し無勢にて新山籠城成り難きに於ては、隱州へ渡海あるべし。然らば某も跡より彼國へ罷渡るべきなりとの趣なり。元春頓て其書狀を宍戸・口羽が許へ送られければ、兩人杉原と鹿之助とは、敵ながらも勝れて仲惡し。是は如何樣盛重が謀書なるべしと言合へり。鹿之助は如何にもして隙を窺ひて拔出でばやと思ひけるが、或夜山中赤痢付きたりとて、宵より鷄鳴迄厠へ通ふ事、百七八十度に及びければ、警固の武士も初こそ心をも付けたれ、後は坐に油斷してありける程に、鹿之助此透間を得て、厠の樋をくゞりて大山の麓を經、美作の州へ上りたり。警固の者鹿之助が久しく厠より歸らざるを不審して、紙燭を取りて行きて見れば、鹿之助は居らず。何れも驚いて、鹿之助こそ逐電したれと云ふより、我も〳〵と追駈けゝれども、終に行方を知らざりけり。

〔頭書〕他國の說に云く、山中雪隱の樋をくゞり出で、外圍高さ八尺にして、二重に結びたる柵を飛越し、逃出でたり。跡にて番の者共も驚きて追行く。木次左衞門其夜の警固頭なるに依りて、甚だ無念に思ひて、追駈けゝるに、難なく荷野河原にて鹿之助に追付き、上に成り下に成り組合ひ、既に木次、山中を組伏せけれども、勇力の敵なる故、搦め兼ねたる處に、木次源五郎駈來り、此樣子を見、其儘走り寄り、左衞門尉は上か下かと言へば、鹿之助上も下も木次なりと云ふ。源五郎少しためらふ氣色なり。左衞門尉、敵・味方をば聲にて知るべしと言へば、心得たりとて近付き寄る。鹿之助足を延べ蹴りたり。源五郎倒るゝと雖も、頓て起上り、兩人して山中を搦取り、其より彌〻用心嚴にして、油斷なく警固したる處に、四五日有りて又逃出で、白晝に高さ一丈に二重に構へたる柵を飛越え、大山原を東を指して逃行く。追手馬にて追駈くると雖も、行方知れず、程なく日暮れけるに依りて、追手の者力なく引返したり。鹿之助は夫れより隱岐國へ渡り、勝久に行合ひ、共に京都へ上りたりと云々。

鹿之助再び逃る

盛重宍戸口羽を訶る

盛重此由を聞き、宍戸・口羽油斷故、大事の敵を取拔かしたりとて、大に憤り、頓て彼書狀を副へて、鹿之助が飛脚を宍戸・口羽が陣へ引かせたれば、兩人初め麁言した

毛利元就逝去并末石城沒落の事

新山城沒落

る故、今は詞なく面はゆげに見えたり。元春飛脚をば兎も角も計るべしと、盛重に命せらるれば、頸を刎ねても詮なしとて、路錢を遣して追放ちたり。八月廿五日、元春、尼子勝久を退治として、宍戸安藝守・口羽刑部大輔・杉原播磨守・南條豊後入道・三澤三郎左衞門尉・三刀屋彈正左衞門尉已下、七千餘騎を帥ゐて新山へ向はる。勝久堪へずして、同日新山を明けて簾岳と云ふ所へ落ちられたり。其由告來るに依りて、元春續いて押寄せらるれば、香賀のかつら島へ船にて逃行かれけるを、則ち兒玉大藏大夫に命じて數百艘の兵船にて追はせらるれば、そこにも得堪へず隱岐國へ渡り、其より都へ上られけると聞えし。

〔頭書〕異書に云く、勝久新山を落ちて、北前海邊近き簾岳と云ふ所へ取登る。吉川勢續いて押寄れば、勝久又此山を落ち、香賀の勝浦島へ船にて退く處に、兒玉大藏大夫兵船數百艘にて攻寄せければ、此島にも忍び得ず、隱岐國に船にて渡らるゝと云々。

是より國中の敵城悉く落行きて、暫らく無異に成りけり。翌年元龜三年三月廿七日、吉川元春從四位下に可する由の口宣、同四月藝州へ到來す。

義昭信長不和

毛利三家和談を謀る

二二　義昭卿信長快く扱はざる事

天正元年將軍家義昭卿、織田信長と不和になりて、將軍は宇治の眞木の島に籠り給ひ、信長是を攻めらるゝ由聞えしかば、和睦の事取捌かんとて、輝元より林木工允・安國寺瓊西堂、元春よりは井下左衞門尉、隆景よりは兼久内藏允を上せらるゝ處に、此者共眞木島落去の後上著したり。將軍家をば信長命を助けられしが、其上にても公方人質を取置かるべしと、固く上意に依りて、此段の扱として羽柴筑前守秀吉・日乘上人を眞木島へ遣すに依りて、安國寺も一同に罷越し、扱の上も曾て承引し給はず、斯の如くにては御一大事に候間、早々何方へも御忍び然るべき由、秀吉の計らひにて、河内の若江迄送りければ、七月中旬、其より紀州の方へ越え給ふと聞えし。〔頭書〕七月十六日紀州へ送らるゝと云々。

〔頭書〕一說、信長大軍を遣して、討取り奉らんとせられし處へ、三家より四使行

三家信長をして尼子氏を助けざらしむ

きて、羽柴藤吉郎竝に日乘上人に就いて、扱の旨申入れ、之に依りて義昭卿の命を助けられ、紀州へ送らるゝと云々。此説關西記等にもあり。

信長三家に盟ふ

四人の使者、羽柴秀吉に付いて三家よりの辭命を述べ、次には山中鹿之助上方へ逃上り、柴田修理亮に付いて信長へ目見えし、信長の武力を以つて雲・伯兩國を取返さんと望むの由風聞あり。此段許容なき樣にと口上に申しければ、信長、安國寺已下に對面して、毛利家の人々とは先年より申通ず、向後以つて水魚の思ひをなすべしと言はる。其後四使中國へ歸るべき由、暇を乞ひければ、信長頓て對面し、毛利三家に對して聊も疎意を存せず、某は關東へ馬を出し、武田・上杉・北條等を退治すべし。三家の人々は九州へ發向して、大友・龍藏寺已下を攻隨へらるべし。信長・輝元と心を合せ、天下を太平たらしめん、相構へて三家の人々信長と互に別心なき樣に申さるべしと云はれて、四使一同に歸國しけるが、安國寺は宇喜多直家が居城へ立寄り、備前の岡山より兩川の使井下兼久に、元春・隆景への書翰を言付けて、當時京都の趣信長終身の事など、委しく書付けゝるが、後來符節を合せたる如くにありける。惠瓊は無類の惡僧なれども、智能も人に勝れたり。

義昭より元春へ出せる書翰

〔頭書〕公方義昭より、此節元春樣への御書に云く、

今度當國移座付而、早々爲禮儀、差越同名中務少輔段、尤喜悅候。殊分國中諸侯輩同前之儀、併馳走故候。次歸洛事、彌〻忠勤被賴思召候。委細輝元可申遣候。

天正元年十二月　義昭

吉川駿河守どのへ

就當國被移御座、被差越同名今田中務少輔、御太刀一腰長光・御馬一匹鵜毛・竝青銅萬匹御進上令披露、尤御感悅候。仍被成御內書候、彌〻御歸洛之儀、被賴思召候。委細輝元可被申越候通、猶得其意可申之由、被仰出候。恐々謹言

十月二日　眞木島玄蕃頭昭光

謹上　吉川駿河守殿

義昭卿信長快く扱はざる事

右文章の中當國とあるは紀州なり

〔三〕山中立原信長を賴む事

山中立原信長に面謁す

信長鹿之助の依賴を納る

山中鹿之助幸盛は、去々年元龜二年、毛利家の囚はれを免かれ、美作へ逃上り、其より忍びて上洛し、勝久を待つ處に、勝久は新山を落ちて隱州へ渡り、其後是も京都へ上られたり。其頃織田信長上洛の時、山中鹿之助・立原源太兵衞相共に、大津へ出向ひ、惟任日向守を賴みて案内を遂げければ、信長頓て對面せられたり。兩人目見えの時、鹿之助先に出で、先づ伺候の諸士に一禮して、其後信長の前に出で盃を給ひて退出し、次に源太兵衞すら〳〵と出で盃を給はり、退く處にて諸士に一禮して通りたれば、信長、此兩人よき骨柄なり、殊に源太兵衞立振舞勝れたりと譽められしとなり。扨て山中には四十里鹿毛と云ふ馬を給はり、立原には貞宗の刀を與へらる。山中・立原言ひけるは、信長中國御發向に於ては、我々御道しるべ仕るべし、然れば信長の武光を以つて、尼子勝久に、本國出雲國を給はり置かれ候樣にと望めば、信長仔細に及ぶまじ、山陰道は惟任日向守に先陣を言ひ付けたる間、彼が手に屬して、

安國寺惠瓊

忠義を抽ずべしと言はれたり。

〔頭書〕勝久尼（子脫カ）家の重寶、鈴蟲と云ふ輿を信長へ獻ぜらるゝと云ふ說あり。

〔同〕安國寺、兩川への書翰の中に、信長武威を以つて、當時以下に威勢强大なりと雖も、却て終身危く、今の如くにては追付け仰向（あふのけ）に高轉びに倒れられん。羽柴筑前守事、さりとは〳〵の者に候趣など、書き載せたりとなり。

〔同〕或說に、安國寺惠瓊事、藝州武田刑部少輔元繁の末子にて、幼子武若と云ふ。出家して頓藏主と號す。始め同國新山にて、一寺の住侶なり。才智勝れたる故、此時信長へ扱の使仕り、秀吉彼が利口發明を知り給ふ故、後年備中高松に於て、秀吉と毛利家和睦の扱をも、秀吉安國寺を呼寄せ賴まれ、和睦調ひ、夫れよりして秀吉に咫尺し、都東福寺に住して、奉行仕りたるとなり。慶長五年庚子關ヶ原落去の時生捕られ、同十月朔日に三條河原にて刎首せらる云々。藝州廣島安國寺の住職たる故、安國寺と稱す、今の國泰寺と言へり。

元春父子因州發向の原因

一四　吉川元春父子・因州發向の事

天正元年七月、吉川駿河守元春・同治部少輔元長、七千餘騎を帥ゐて雲州富田を立ち、伯州を經て因州に著陣し、暫く爰に留まりて、但馬の様を窺ひ、彼州へ發向せんとせらる。是は但馬國山名入道宗仙、尼子へ與力して、先年勝久出雲へ亂入の時、奈佐日本助を語らひ、渠が海賊船にて勝久已下を雲州島根迄送りしが、今以つて其志を尼子へ通じけるに依つて、是を退治のためなり。宗仙尼子一味に依りて、因州の守護山名大藏大輔豐國も尼子に志を通じけるが、元春の謀略にて、豐國は味方に屬したり。但馬には山名宗仙一族、家臣を集めて評定すと雖も、垣屋・太田垣を始め、一戰の義勢に及ばず、異議區々にて日數を送る處に、同十日元春父子因幡の篠尾に著陣し、此所に逗留して頓て但馬へ押入るゝの由聞え有りければ、山名宗仙終に降參し、垣屋駿河守・同播磨守・太田垣軍監等も人質を出して味方に降りぬ。山名大藏大輔は、是より先に毛利家へ隨ひしかども、今度幼少の子に太田垣勘七と云ふ者を

山名宗仙降る

元春父子雲州へ歸る

差副へて、人質に出したり。茲に因りて其家老大坪甚兵衛尉・森下出羽入道道與・中村對馬守竝に鹽冶周防守等、皆己が子供を人質として差出す。奈佐日本助・佐々木三郎左衛門も降を乞ひて、元春の手に屬しける間、因幡・但馬は事故なく平均しける に依りて、大坪甚兵衛尉が私部の居城に、牛尾大藏左衛門を附置く。元春・元長、十二月の末に因州を立ち、明年天正二年正月三日、雲州富田へ歸陣せらる。

鹿之助因幡へ入る

一五　山中鹿之助大坪甚兵衛尉と相戰ふ事

山中鹿之助幸盛は、立原源太兵衛尉久綱相共に、信長の見參に入りて、彼扶助の言を得たりしかば、再び雲州へ亂入すべしとて、勝久を守護し、山中・立原・神西三郎左衛門・加藤彦四郎・龜井新十郎・吉田三郎左衛門・森脇市正・横道源介・同權允・進左吉兵衛・牛尾大炊助・足立次郎右衛門已下、去年十二月但馬へ下向し、因州へ入らんとしけれども、其頃吉川元春父子、因州篠尾に在陣なる故、打入る事を得ず、但州に集り居けるが、年明けて元春因州を引拂はれたる由を聞きて、山名但馬守を賴みて、因幡

山中大坪合戰

の國へ打入る。其より備州を打從へて、雲州へ亂入るべしと巧みたり。山名大藏大輔豐國、表裏第一の人なる故、鹿之助が許へ使を以つて、某事毛利家に隨ひ人質等差出す上は、唯今貴方に屬す事心に任せず、然れども勝久に對し全く楯を突く覺悟にあらず、兵糧等の儀は所望に隨ふべき旨言送るに依りて、勝久悅び、其より則ち因州へ入りて、敵城を落す事三箇所なり。是を聞いて尼子家の浪人爰彼より馳集りて、既に其勢三千餘に成りぬ。斯て山中鹿之助・立原源太兵衞尉等、大坪甚兵衞尉が私部の居城を攻むべきと僉議しける折節、大坪は年始の賀詞を述べんため、僅百騎計りにて、正月三日城を出で藝州へ下向したり。此由を聞き、山中鹿之助一千餘騎にて駈出で、鳥取の邊雁金山の麓に待居たり。大坪是をば知らず打過ぐる處に、上の山より旗を差揚げて、遙々藝州へ下向の由承り、首途を祝はん爲め、山中鹿之助是迄罷出たりと高聲に呼ばはりたり。大坪聞いて、是迄の出張御芳志の至りなり。然れば首途を華々と一戰し、各々の首を給ひて毛利家への土産にすべしと言ひて、一所に集りて待ちかけたり。鹿之助猶豫して敢て懸らざれば、大坪が百餘人、かさに控へたる鹿之助が勢の眞中へ切つて懸れば、敵陣跡より崩れて引立つる。鹿之助こは如何に返せ戻せと下知すれども、ひた引に引きける間、鹿之助も力に及ばず、後の林に逃入りたり。大坪笑ひて人に逢ひて、林に逃入るは鹿と云ふ名に應じたりとて、藝州へ下りたり。

〔頭書〕入洛已後、至二當城一雖二馳上一、逆徒等及二一戰一口討果、彌〻天下屬二本意一訖。然ば少々四國逃籠敵有之間、此節急度可二退治一、之由、對二元就・輝元一申遣候。相共申談、戰功肝要爲二其差一下柳澤一候。委細聖護院門跡可有二演說一候。猶信惠・藤澤可申候也。

正月十三日　　義昭御判

吉川駿河守どのへ

〔同〕至二讚州一、香川入國之儀、最可二然候一。彌〻彼表之儀、可合二馳走一事肝要候。自然阿州之者共和談與申候共、不可二許容一候。於二當方一和平之儀申聞口候間、以二其上一可二申遣一候。委細申二含元政一候。猶一色式部少輔藤長可申候也。

八月朔日　　義昭御判

吉川駿河守どのへ
小早川左衛門佐どのへ
毛利右馬頭どのへ

右二通何れの時下されたると云ふ事分明ならず、但し永祿十一年、義昭卿信長奉迎として美濃に赴き、信長輔佐に依りて、上洛の上、毛利家へ下されたるか。

一六　私部城軍の事

山中私部城を攻む

山中鹿之助宿所に歸り、今日味方敗軍の事、諸人皆吾を嘲弄すべし。然れば私部の城へ押寄せ、即時に攻落して此恥辱を雪ぐべしとて、同正月五日、山中鹿之助・立原源太兵衛尉等、雲・伯の諸浪人一千餘を從へて先陣に進み、二陣は武田源三郎五百餘騎、其次日野五郎三百餘騎、各〻私部の城へ押寄せたり。當城甲の丸には、牛尾大藏左衛門籠居、三の曲輪に大坪が家の子姫路玄蕃允居たるが、敵門外迄詰寄せたるに依りて、玄蕃允二百餘人にて門を開き、稠しく突出づれば、寄手の先陣・二陣一度に引退く。三陣受留まりて戰ふ間に、先に引きたる一陣・二陣も取りて返して迫合へば、姫路小勢なる故終に押立てられ、門内へ引退く。鹿之助透間なく攻入りける間、姫路一二の城戸を攻破られて、本城へ引籠る。寄手勝に乘じて甲の丸へ乘入らんとする處に、牛尾大藏左衛門尉、弓・鐵炮を揃へて頻りに射出し打立つれば、手負・死人時の間に數百人に及べり。鹿之助當城乘取り難しとや思ひけん、今日は先づ引退いて、重ねて押寄すべしとて靜に引拂へば、牛尾・姫路も城を落されざるを勝にして、引く敵の後をば附送らず。

鹿之助退く

一七　大坪甚兵衛尉武田龜井と相戰ふ事

武田龜井鹿野へ出兵

同年三月十日、武田源三郎・龜井新十郎七百餘騎にて、鹿野の城を出で、小松原のありけるに陣を張りて、邊りの民家を放火せんとする折節、大坪甚兵衛尉藝州より歸り、人馬を休め、其後鹿野邊へ働くべきとて、三百餘崎にて打出でけるが、武田・龜井に不圖行逢ひたり。大坪敵陣を見るに、多勢にて而も山上に陣取れば、甚兵衛山下の

武田龜井退去

田中に備へて、半時計りは敵の樣體を窺ひ居たり。武田・龜井多勢なれども、大坪が武名兼ねて知りたる事なる故、戰を愼しみて敢て懸らず。然るに大坪堪へ兼ねて、姫路玄蕃允を先に立て、鬨を作りて切つてかゝる。武田が二百五十騎山の半腹に下し合はせ、差詰め引詰め射ると雖も、大坪事ともせず攻付くれば、敵の後に控へたる勢共、捨鞭を打つて逃退く間、武田・龜井も力なく引退きたり。大坪鹿野の麓迄敵を追詰め、數人討取りて歸りたり。

山中鹿之助鳥取城を攻む

一八　山名豐國尼子に與する事

同年九月廿二日、山中鹿之助・立原源太兵衞尉・牛尾大炊助・森脇市正・横道源介・同權允・足立次郎右衞門・同治兵衞已下二千五百餘騎、因州鳥取の城へ押寄せ、先陣天王の尾迄攻登りたり。當城は山名豐岡が抱への城にして、毛利入道淨意と云ふ者籠居たるが、城中より弓・鐵炮を頻りに射かけ、敵の足竝漂ふ處を、城兵三百餘人門を開いて突出づれば、先陣忽ち突立てられて引退きたり。其後寄手仕寄を丈夫に拵へ、勢樓を組上げて攻めける程に、城中防ぎ兼ねて終に城を明渡しければ、勝久頓て入替らる。かゝれば勝久の勢盛に成りて、因州半ば過ぎて尼子に隨ひたり。山名大藏大輔豐國、鹿之助へ使を立て言送りけるは、鳥取の城は某が端城にて候間、返し給はるべし。然らば毛利家一味の約を飜して勝久に與し、伯州へ出馬あらば加勢を出すべし。若し此儀承引なきに於ては、力なく敵對し、山名宗仙と言ひ合せて、一戰すべしと言ひ入れたり。豐國は山名宗仙が壻なれば、豐國當家に楯を突かば、宗仙とも矛盾に及ぶべし。彼等と中違ひては、當國に有らん事叶ひ難かるべしと、鹿之助已下評議して、甲の丸をば豐國へ返し、勝久を始め鹿之助已下は、二の曲輪に窄み居たり。豐國が臣大坪甚兵衞尉は、山名一旦毛利家へ屬し、今又尼子一味の事侍の本意ならず、表裏の働甚だ非義なりと、强ひて諫むると雖も、豐國承引なければ、大坪吾は毛利家との約を變ずる事成難し。又家城に居て豐國へ弓を引く事は尙以つて本意ならずとて、牛尾大藏左衞門に此趣を申し斷り、相共に城を明けて、牛尾は家城雲州高手へ歸り、大坪は藝州へ退きたり。山名大に怒りて、大坪が子二人を人質

山名豐國尼子に與す

鹿之助鳥取城を返す

大坪甚兵衞主に背いて毛利勢に從ふ

として取り置かれたるを、後來の見懲らしの爲めとて、鳥取の山下に機物にかけられたり。

鹿之助若佐城を攻む　草刈三郎左衛門逆襲

一九　若佐合戰附諸寄軍の事

天正三年二月五日、山中鹿之助當國若佐の城を攻むべしとて、鳥取の城を出で暫く陣を居るける處に、方角諸寄の城主草刈加賀守が嫡子三郎左衛門尉、一千餘騎にて逆寄せに押寄せたり。尼子方先陣は、龜井新十郎・武田源三郎八百餘騎、二陣は山中鹿之助・立原源太兵衛尉已下三百餘騎なり。先陣の龜井・武田勝利なく引退けば、山中・立原渡合ひ暫く戰ふ。此陣も草刈聊か勝色なる處に、横道權之允、味方一足も引退くべからずと言ひて槍を取り、草刈が家人、美作の住人高村某と云ふ槍遣を手の下に突伏せて首を取りければ、尼子勢是に力を得て、一度に突懸る間、草刈が勢突立てられ、四五町計り引きけるが、頓て又取つて返し、備を堅くして控へたれば、尼子勢敵の備尋常ならず思ひけるか、續いても懸らず、暫く對陣して、其後相引に打入りたり。其後山中鹿之助五百餘騎を率ゐて、諸寄の民家を放火し、引退かんとする處を、陰山・簑部等八百餘騎にて打出たり。是を聞いて山口左馬允七百餘騎、毛利入道淨意四百餘騎、後の山に陣取りければ、鹿之助籠中の鳥の如くにして、逃るべき方なし。然れども山中少しも臆せず、後の敵には目も懸けずして、陰山已下に斬つて懸かる。今日の合戰は唯勝負を思はず、我人衆に先立ちて、一太刀も敵に打違へて討死すべきと思入りて、死を一途に窮めて戰はゞ、運を開くべしと味方に下知し進みたれば、陰山等渡合ひ戰ふと雖も、終に叶はず散々に成りて引退けば、毛利・山口が勢も一支も支へず逃退きたり。鹿之助十死一生を逃れて敵數人討取り、鳥取へ歸りたり。

鹿之助鳥取歸城　尼子勝久伯州に入らんとす

二〇　尼子勝久鳥取城退去の事

尼子勝久は、大坪甚兵衛私部の城を去りしより後は、因幡の國中に恐るべき敵なく、然らば伯州へ打越ゆべしとて、山名豐國に加勢を請はるれば、豐國則ち領掌す。斯

元春加勢の風聞によりて止む

て大坪甚兵衛藝州へ下りて、因州にての様子委細に語りければ、吉川元春父子因幡へ出張の聞え有るに依りて、勝久伯州發向の事をば閣き、當城に籠りてや戰ふべき、國境へ打出でてや防ぐべきと、僉議未だ決定せず。　吉川元春は頓て因州表發向すべきとて、先づ南條豐後入道宗勝・杉原播磨守盛重・山田出雲守重直等に、因州荒神山の城を切取るべき旨下知せられ、各〻出張して卽時乘崩し、城兵山崎十兵衛を、山田出雲守が嫡子山田藏人討取りたり。　山名大藏大輔豐國、毛利家と矛盾に及ばん事叶ふまじと思はれければ、森下出羽入道・中村對馬守已下の家臣を集めて、相談せられければ、何れも大坪甚兵衛が再三の諫言も此事なり、速に元春へ使を馳せて元の如く味方に屬すべき由申さるべし。　然りと雖も、其の驗なくては如何なる間、勝久已下當城を追出して、是を一面目に毛利家へ歸服有るべき旨諫めければ、豐國是に從ひ、則ち元春へ使を以つて、尼子勝久事、某抱への鳥取の城を攻め落し、楯籠り候に付いて、彼の城を取り返すべき爲め、一旦彼と和睦せしむと雖も、全く毛利家へ逆心を存せず、自今已後は、何れにても一人某に附置かれ候樣にと言ひ送りたり。

山名豐國再び毛利に降參を乞ふ

元春諸士荒神山を攻め落す

元春豐國の降を許す

尼子勢鳥取城退去

山中牛尾を攻む

元春聞かれて、豐國が隱謀を許して、頓て牛尾大藏左衞門を鳥取へ附置かる。　山名豐國頓て勝久に對し、敵の色を立てける間、勝久竝びに鹿之助已下、是を忿ると雖もすべき樣なく、鳥取の城を去つて、勝久は山中・立原・神西・加藤等相共に、同國若佐の鬼の城へ移り、又私部の城を誘ひ、鹿之助が壻龜井新十郎に、山名藤四郎・横道源介・同權允・森脇市正・牛尾大炊助・進左吉兵衞已下、一千五百餘騎相添へて籠置かれたり。　然る處に草刈三郎左衞門・同弟太郎左衞門、毛利家へ志の者なる故、若佐表へ打出で、度々相戰ひ勝負日々に變りぬ。　鹿之助も亦草刈が端城、同國淀山の城へ折折働きけるが、草刈太郎左衞門眞先に進みて下知し、度々敵を挫ぎ、斤寄市允を先として、多くの敵を討捕りたり。鹿之助如何にもして、太郎左衞門を討取るべき旨、軍士に下知すと雖も、草刈曾つて討たるゝ事なし。

二一　山中牛尾合戰の事

山名大藏大輔豐國が請に任せて、吉川元春・牛尾大藏左衞門を因州へ差遣す。牛尾二

百餘騎にて鳥取の山下に到り、在家に止宿して居たる處に、山中鹿之助此の由を聞き、牛尾城へ入らざる先に夜討にすべしと謀りて、兵を選びて五百餘人、同三年五月七日の夜半に、牛尾が旅宿へ押寄せ鬨を作り、足輕五十餘人に手毎に續松を持たせて、門外より切入らんとす。牛尾其儘槍を提げて突出づれば、仁田又兵衞・金尾藤三以下三十餘人、相續いで門外へ突いて出づ。敵續松を灯すと雖も、門内は暗ければ、牛尾間近く寄りて、側より俄に喚き懸れば、寄手一度に咄と引きて足を立兼ねたり。鹿之助後陣より廻りて、牛尾が跡より討つて懸る。殊に闇夜にて何處に敵有りとも見えざる間、鹿之助邊りの在家に火を掛くる。牛尾火の光にて見るに、敵大勢にて所々に群り控へたれば、牛尾今夜必死と思ひ定めて、とて〔も脱カ〕死なん命、鹿之助に逢ひて討死すべきと心掛けて、勢の黑みたる所を見て、無二に突いて懸る。敵多勢なりと雖も、散々に切立てられ逃げ退く。鹿之助も力なく引退きけるが、味方に引兼ねたる者や有るべしと思ひ、四五町計りより又取つて返し、相圖の篝を燒きければ、所々の木蔭藪原などに隱れ居たる者ども、皆一所に集まれば、鹿之助此の勢を散らさず、靜かに若佐の城へ引返したり。山中城に歸りて、當國の弱敵に慣うて、負けまじき夜討を仕損じたり。牛尾が勇は聞きしより勝りたりと感じける。今度鹿之助當國へ入りてより、城十三箇所攻落したれば、人皆鬼神の如く思ひけるに、牛尾纔の勢にて切勝ちたれば、牛は鹿に勝りたりとて、又大藏を稱美したり。

鹿之助若佐城に退去す

義昭毛利家による

二三　公方義昭公備後國鞆御下向の事

公方義昭公は、紀州宮崎に落魄れて御坐しけるが、其處にては御本意も遂げ難く思召して、一色式部大輔・武田刑部少輔・飯河肥後守など御供にて、天正三年二月竊に宮崎より御船に召され、播州明石の浦へ漕ぎ著き、宇喜多和泉守が方へ、毛利家を賴み、是迄御下向の由仰せ遣さると雖も、宇喜多渴仰せざれば、暫しの御逗留もなく、其れより備後國鞆の浦に著きて、毛利三家へ上野大和守・小林民部少輔を以つて、此内よ下向して扶助を受くべき旨度々申遣すと雖も、織田信長、毛利家へ懇切の樣に申通ずるに依りて、其儀思慮を加ふる由聞召されぬ。然りと雖も、信長内意毛利家

に對し、表裏有る事其隱れなき間、先づ當國に下向したり。

〔頭書〕度々下向之事雖申遣、織田依相談加思慮之由被聞召訖。然者信長對輝元逆意無其隱條、先至當國相越候。委細申含上野大和守・小林民部少輔遣之候。此度加意見馳走可爲神妙候也。

二月八日　　義昭御判

吉川駿河守殿

吉川・小早川、輝元へ異見を加へて、義昭を馳走せば、祝著たるべき由仰下さる。之に依りて輝元・元春・隆景評議せらるゝは、將軍家に於て、さしも忠節を致せし信長とさへ、不和に成り給ふなれば、扶持し置きても當家に於て益なしと雖も、公方の御賴と有れば一先づ承引する處、義の當然なりとて、頓て許容の返事せられたり。是則ち毛利家と信長と矛盾に及ぶの基本なり。

二三　吉川小早川因州發向附私部麓合戰の事

三家因州へ發向す

山名豐國私部を攻む

尼子左衞門尉源勝久、因州を切隨へ、伯耆國へ打入るべきの由聞えけるに依りて、吉川駿河守元春・同治部少輔元長・同又次郎經言・小早川左衞門佐隆景、勝久を退治として、天正三年八月上旬因州へ赴かる。元春に從ふ面々は、熊谷伊豆守信直・嫡子兵庫介隆直・天野紀伊守隆重・山內新左衞門尉隆通・杉原播磨守盛重・南條豐後入道宗勝・同嫡子伯耆守元次・小鴨左衞門尉元清・益田越中守藤包・同嫡子右衞門佐元祥・佐波越後守廣忠・三澤三郎左衞門尉爲清・同攝津守爲虎・三刀屋彈正左衞門尉久扶・宍道五郎兵衞尉正儀・羽根彈正少弼、其の外廣田・櫻井・福瀨・福田・牛尾・吉田・周布・都治・久利・岡本・山田・香川・飯田以下一萬七千餘騎、後陣隆景には、三吉式部少輔・同新兵衞尉・同三郎左衞門尉・久代修理亮俊盛・高野山久意入道子息五郎兵衞尉・木梨治部大輔元經・平賀太郎左衞門尉・小笠原少輔七郎・同彈正少弼・有地美作守・同左近大夫・古志清左衞門尉・三村紀伊守・伊勢・細川已下二萬餘騎相從うて、兩勢合せて三萬七千餘騎、矢走に著陣す。山名豐國是を聞きて、牛尾大藏左衞門に向ひて、某一度も尼子勢と戰はざる事、勇なきに似たり。元春・隆景を待ち設けの爲め、私部邊へ一働すべ

山名敗軍す

しと言ひければ、牛尾同意して、同廿二日一千五百餘騎を率ゐて、私部の山下へ押寄せ、在家を放火し、所々の柵の木を切破れば、城中より進左吉兵衞尉已下千人計り、鐵炮を提出し散々に打つ。山名が手の者鹽冶・佐々木・山口・森八百餘騎渡合ひ、足輕をかけ暫く矢軍する處に、城兵左の山の根を押廻して懸り來れば、山名が勢忽ち突立てられて、八百繩手へ我先にと引退きたり。牛尾大藏左衞門是を見て、手勢二百餘騎無二に切つて懸れば、敵大勢なれども道狹き繩手故、一同に懸る事能はざれば、終に突き崩され、二三町計り引退きたり。牛尾源次郎手勢二十人計りにて、引く敵を追駈けしが、深入して手を負ひ、既に危き處に、是を救はんとて大藏左衞門二百餘騎一手に成りて突いてかゝる。然れども敵大勢なる故、牛尾が勢突立てられ引退き、大藏左衞門は敵二人と戰ひ、終に後の岸へ突き詰められ、已に討たるべく見えし處に、家人金尾藤三・大藏左衞門を尋ねて廻りけるが、是を見付け一人の敵を討取りければ、今一人をば大藏左衞門切伏せたり。

〔頭書〕一說、牛尾源次郎も此時討死す云々。

私部攻城

經言の剛勇

二四　私部城沒落の事

同年九月二日、吉川・小早川因州鳥取の城下に著陣せらるれば、山名大藏大輔豐國、二千餘人を帥ゐて出迎へ、千谷河に船橋を架けて、諸勢を渡したり。同三日より總勢私部の城を取圍み、仕寄を付寄せ〳〵、勢樓を組んで攻め近付きたり。敵若し仕寄へ切つて出づる事も有る可しとて、勢を差向けて請手とせられける。吉川又次郎經言、當年十五歲なるが、仕寄張番の所へ度々出で、あはれ敵討つて出よかし、某も一太刀打ち違へてんものをと言はれければ、乳母人の小坂越中守、自身の太刀打を好むは小勇と言ひて、大將のする處に非ずと制しければ、經言當家に於ては元春・元長はさも有るべし、我は庶子に生れて手勢百騎と持たざれば、只今に於ては諸卒に等し。敵夜紛れに討出づる事有る可しと言ひて、夜毎に彼の所に居られたり。然る處に同七日の夜闇紛れに、城兵牛尾大炊助已下三百餘人、吉川勢の仕寄へ切つて出でんとする由、何者か聞出しけん、仕寄番の者共以つての外に騷ぎける處に、吉川經言

中間に持たせたる槍を取つて、手勢五十餘人を從へて待懸けらる。是に依りて仕寄番の者共も、敵出でば渡合せんと勇み進めり。斯くて牛尾巳下城門を開きて討出づれば、寄手も待受けて相戰ふ。然る處に吉川經言名乘りかけて勇み進み、稠しく突いて懸られけるが、城兵忽ち駈立てられて、城戸の内に引退きたり。

〔頭書〕或る説、此時吉川家人新見助右衞門討死すと云ふ説あり。

寄手、所は無案内なり、殊に闇夜なれば跡を附くる事能はず、本の陣へ打入りたり。斯くて寄手晝夜の界なく攻め近付き、尾頭のから堀一つを隔て、弓・鐵炮にて迫合ふ程に、城中はや防ぎ兼ねて見えし。斯る處に同九日、森脇市正城の女墻の上に出で、寄手へ物申さんと云ふ。すはや城中より降參を請ふなるべしとて、弓・鐵炮を止めて聞けば、此山の紅葉常は見る人なくて打過ぎ候に、今折を得て人々の詠覽に入る事、山の面目なり、風與存じ寄り候間、長陣の眠醒に聞召さるべしと言ひて、

山ははやかつ色見する時雨哉

と高聲に吟じたり。元春邊りを見廻はさるゝに、香川兵部大輔春繼側近く居たるに、早く附句仕るべき旨言はるれば、兵部大輔、

あきのあらしに落つる朝つゆ

と附け、夫よりかはる〴〵表八句迄附終つて、色代して城内陣中へ打入りたり。

〔頭書〕此時元春の前に、口羽左衞門尉其の外歴々居たるが、此脇早速に成り兼ねぬ、時刻拔けたる間、兵部に成るべくば、何にても附けよと命ぜらる。

其後横道權允楯の表に出で、詞戰ひしける處に、今田中務少輔經忠、普通の者四五人して漸く張る程の弓に、三尺有餘の大矢を番ひ、此矢一つ受けて、弓精の程試みらるべしと言へば、權允曾て存じ寄らず、詮なき所にて敵の矢受くる程なる虚氣にてはなしと言ひて、楯の蔭に隱れたり。今田蓬き敵哉と言ひて、例の矢取つて番ひ、よつ引いて放つ。其の矢横道が隱れたる楯の表を射洞して、矢尻三寸計り眞白に射出したり。其の時横道楯の外に立出でて、あら大便の弓精哉。吾等が受けざるも理なりと言へば、敵も味方も尤是は道理なりとて、一度に咄と笑ひたり。其の後仕寄を付け、ひた攻に攻めける間、城中防力盡きて、龜井新十郎巳下城明渡すべきと詫

森脇市正の風雅

今田横道言合ふ

私部落城

言す。吉川・小早川其の請を許さるれば、龜井・山名退散したり。森脇市正・横道源介・同權允・牛尾大炊助等は、尼子の弓箭是迄なりとや思ひけん、降人に出で、杉原播磨守を賴み居たるが、後は何れも吉川へ出で仕へしなり。

二五　勝久若佐城を落つ井同國宮吉城明退の事

勝久若佐城を沒落す

私部城明渡して、森脇横道も降參したる由、若佐の城へ聞えければ、尼子勝久驚いて、當城をも守り得難し、但馬へや引取るべき、京都へや上ると詮議せらるゝ處に、吉川元春より杉原播磨守盛重に香川兵部大輔・小坂越中守を檢使として差添へ、三千餘騎同月若佐の城へ差向けらるゝ處に、方角の國士草刈三郎左衞門・同太郎左衞門千餘騎にて相加はり、某方嶽なれば、先陣すべしと言ひて、一番に切岸へ付く。城よりも打出で互に手負・死人を乘越え攻め戰ふ處に、杉原並に香川・小坂突いて懸れば、敵城内へ引退きたり。其の後仕寄を付けて攻めんとしたる處に、山中鹿之助、今杉原に對して城を落つる事口惜しと雖も、後陣續いて取卷きなば、遁るべき方なく、擒と成る可しとて、勝久を伴ひ、山中・立原已下夜に紛れて城を出で、但馬を指して忍び落ちぬ。又杉原・香川・小坂は、其れより田公新右衞門・同新介が居城、同國宮吉へ押寄せたるに、田公父子は早速落失せて、殘居たる者身命を捨て防戰し、四五十人の者悉く討死したり。寄手田公が跡を慕うて追駈けたれば、郎黨共爰に彼にて返合せ、討死せし間に田公は落ち延びて、命を助かりたり。此日寄手へ討取る首數七十餘、香川が家人三宅源允城へ一番に乘入り、一番頸を取る。是より因州の敵盡く退散して靜謐すれば、若佐の城に牛尾大藏左衞門を入置き、元春父子隆景、九月廿五日因州表を引拂ひ、雲州平田迄打入り、隆景は是より早速勢州へ班軍せらる。

宮吉落城

二六　攝州大坂城へ兵糧を入るゝ事

信長本願寺顯如と不和

攝州大坂石山の本願寺顯如上人と織田信長不和に成りて、矛盾に及び、上人石山に城郭を構へ楯籠り、紀伊・越前等の宗門を賴まれければ、多く石山に入籠る。其頃毛

毛利家顯如を助く

利家へ使を以て一加勢兵糧等の儀頼み來るに依りて、先年より飯田越中守を大坂の城に差籠め、其の外本津の城に粟屋内藏允、花隈の城に香川美作守・杉次郎左衛門を入置かる。然るに今歳天正四年大坂の城へ兵糧を入れ給はるべき旨、三家へ頼まるゝに依りて、則ち船六七百艘に糧米を積み、兒玉内藏允・粟屋内藏允・香川左衛門尉・村上八郎左衛門尉・浦兵部丞・野島大和守（傍書「能に作る」）・同掃部・同三郎兵衛・井上又右衛門・遠藤左京亮等警固船三百餘艘に取乘り、同年七月上旬播州室の津に著く。

（頭書）或□粟屋内藏允事、大坂の城へ兵□入（出入）らる。□村□同に差遣（出入）さるとなり。粟屋事、兼ねて本津の城城番に差置かる。此時右の兵糧船本津迄著（出入）船の上、各、

一同に内藏允も打連れ、河口へ向ひたるなるべしと云々。

毛利家兵糧を登す

木津川合戰

木津川には信長より大あたけ三艘作りて、城郭を構へたる如く川口を塞がれ、又兵船三百餘艘相浮びて大坂へ入る可き樣なし。中國船先づ物見を遣して見せけるに、川口へ船を入れん事叶ふまじき由を言ひける間、各〻詮議して、先づ射手船を漕ぎ向け、敵の樣體を試む可しとて、五十艘・三十艘毎日漕ぎ寄せければ、川口よりも漕ぎ出で、迫合ひ度々あり。其の後數日ありて、中國勢兵船を先に立て、糧船を後に漕がせ、大坂へ押入る。敵方には大和國の住人間鍋主馬兵衛尉・沼野伊賀守・同越後守・河内の住人杉原兵部丞・宮崎鎌大夫・同弟鹿目之助・寺田又右衛門、尼崎の小畑・花隈の野口など射手船三百餘艘漕ぎ出し防戰ふ。中國船には能島を先として、船軍は代々其の妙を得、浦・村上も船軍に數度の功有りて、能島にも劣らざる者共なる故、何も船の懸引自在なれば、次第に敵船を押立て押入りたり。爰に大船一艘漕退かんとする處を、村上八郎左衛門追駈けて、既に間近く成りしかば、船頭を敵船に付け申さんかと言へば、八郎左衛門早く付けよと言ひて、ひたと押付くる處に、敵船の艫（とも）に鐵炮を構へ置きたりけるが、先に進んで船を付けんとする船頭を、一人打倒しければ、村上が船三四間程退きたり。八郎左衛門一番に敵船に乘り移れば、郎黨共も我先にと乘敵猶鐵炮を打つと雖も、八郎左衛門頻りに下知して、又押付けさせ、り移る。八郎左衛門は股をしたゝか突かれながら、當の敵を突伏せ首を取り、手の者共も重に分捕して、其船難なく乘取りたり。野島・兒玉・粟屋・浦・香川・井上・遠藤等

も、皆敵船に乗り移りて戰ひ、大安宅二艘切取り、其外小船數艘乘り破りたり。敵多く水中へ飛び入りたるが、助かる者は少なく、多くは溺死したり。寺田又右衛門は水を游ぎて終に命助かり、其の外間鍋主馬兵衛尉・沼野伊賀守・同越後守・杉原兵部丞・同鹿目之助・野口・小畑已下、一人も殘らず討死す。

〔頭書〕信長譜に云く、七□能□玉・粟屋□等積兵糧於船七百餘艘、而納之於大坂城。信長兵士等防之不勝、間鍋主馬・沼野伊賀守・同越後守・杉原兵部・野口某・小畑某討死云々、

中國船は敵船多く乘取り、兵糧を思ひの儘に大坂の城に入れて歸りたり。此時中國船室の浦迄上著せし時、紀州雜賀の鉄木孫市等も室迄出合せて馳走す。斯て公方義昭公、一色宮内少輔を以つて三家へ御内書あり。吉川元春へ給りたる御書に云く、

今度差上艦兵敵船早速切崩數多討取段、無比類旨對輝元可申聞。爲其差上一色宮内少輔候。諸士粉骨神妙之由、褒美肝要候。次輝元言上之通、委細秀政・昭光可申越候也。

七月廿五日　　義昭御判

吉川駿河守殿江

〔頭書〕今度其表諸城切崩、敵數多討捕之段、寔無比類。彌任存分由珍重候。永永遂在陣抽粉骨儀、奇特覺候。爲其指越小林民部少輔家孝、帷子一重遣之候、猶昭光可申候也。

八月五日　　義昭御判

吉川治部少輔どのへ

浦四郎毛利家を背く

二七　浦少輔四郎心變の事

信長と毛利家和平破れて後は、所々に於て取合ありけり。備前の國常山に浦兵部丞宗勝が嫡子少輔四郎在城しけるが、毛利家に逆意す。其の故は、浦兵部丞聞ゆる勇士なる故、羽柴筑前守秀吉、彼を味方に引成さばやと思ひ、秀吉竝に小寺官兵衛

浦四郎心變りの因由

浦四郎の逆心を父宗勝に報ず

尉・蜂須賀彦右衞門尉書狀を以つて、宗勝味方に組せば、所領過分に宛て行ふ可き旨言ひ送る。父宗勝は曾つて同心せずと雖も、少輔四郎欲心にして自立の志ありける故、父に隱して秀吉へ同心の返事したり。其頃備前の兒島渡口の究めとして、神田右馬允を差置かれたるが、或時怪しげなる僧、編笠を被ぎ竹杖を突き來りたるを究めたるに、此僧念佛修行の出家なりとて、なま佛法など吐散らすと雖も、神田怪みて僧を執へ、平包を解いて見けれど、怪しき物もなし。さらば其の竹杖を割つて見よとて打ち破り見れば、蜂須賀が方より浦少輔四郎が許へ送る文あり。神田則ち僧を搦めて文と共に沼田へ遣したり。隆景是を見られ、頓て兵部丞宗勝を呼びて、潛に此趣を告げらるれば、宗勝涙を流し、誠に子の心を親知らずと申す如く、我等此事努々存ぜず、然れども彼斯る存立之あるを、親として知らざる事は有るまじとの御疑も有る可き事なれば、爰に於て自害仕り、御不審を晴らし申さんと言ひて、既に自害に及ばんとす。隆景、我汝に於て一點も疑心なき故、此趣をも告げ知らせたれ、兩人潛に謀りて、少輔四郎に常山を明けさすべしと思ふなりと言はれたり。其後頓て少輔四郎を何となく沼田へ喚び越し、兵部丞が所領に置き、常山には別人を入置かる。少輔四郎は後程なく病死したり。

浦四郎病死す

長曾我部元吉城を攻む

小早川元清渡讃

二八　讃州元吉合戰の事

讃岐國元吉の城主香川淡路守義景といふ者、多年隆景に屬して毛利家の旗下なる處に、土佐の長曾我部土佐守、長尾・はいかつ兩人に讃岐の國人を催し、軍士三千餘騎を差副へ、元吉の城を攻めしむ。義景防戰に數度利ありと雖も、土・讃兩州を敵に受けては、終には叶ひ難く思ひ、此の由を急に隆景へ告げて援兵を乞ふ。隆景則ち輝元・元春と相談して、舍弟穗田治部大輔元清を大將として八千餘騎、讃州へ差渡さる。天正五年閏七月廿日、先陣浦兵部丞・井上又右衞門已下二千餘、長尾が陣へ押寄せ、長尾・はいかつと渡合せ相戰ふ。中國勢末近助兵衞・山田平右衞門・志道藤右衞門尉・村上刑部・深野左衞門・弘中藤右衞門等槍を合せ、比類なき働したり。浦・井上等士卒を下知して頻に進めば、敵突立てられて引退きたり。其後長尾・はいかつも敗

元清凱旋す

高砂合戰

軍す。元清は香川に會面して、當城守保の事沙汰し置き、諸勢を率ゐて藝州へ立ち歸りたり。浦兵部丞は其れより船を上せて、播州の浦々へ打上りて放火し、高砂へ打上らんとす。爰には黑田官兵衞尉居られけるが、部府に人數を籠置きける間、浦岸際迄押寄せ、足輕を懸くれば、城中より突いて出で、散々に戰ふ。浦が家人白井彌次郎討死す。浦一戰して颯と引き、船に乘らんとする處に、黑田官兵衞二千計りにて打出でたり。宗勝是を見て、爰は十死一生の合戰せでは勝利有り難しと思ひ、少し高き處に馬を乘上げ、死を一途に定めて控へ居たり。黑田は浦が思ひ切りたる體を見て、斯る勢には戰を憚しむものなりとて、頓て打入りたりければ、浦も必死を免れて藝州へ下りたり。

二九　淡州岩屋城の事

淡路の國の在廳、岩屋の城主菅平右衞門尉・同新右衞門尉父子、さる勇士にて、多年毛利の旗下なる故、藝州より兒玉内藏允を岩屋の城へ籠置かれける處に、今歳菅父

岩屋城主菅父子叛逆の風聞

香川廣景岩屋城を攻めん事を望む

子逆意を企て、兒玉を討つ可き用意有りと、兒玉に告ぐる者あり。内藏允某少勢なれば、當城に居ては犬死すべし。急ぎ藝州へ下りて此の由を訴へ、重ねて多勢を以つて菅父子を退治すべしとて、忍んで城を去り、藝州へ下りて其事を申す。三家評議せられしは、菅志を翻したりとて、岩屋の城を其の儘捨て置かんも、當方矛先の弱きに似たり。殊に彼城は大坂への傳ひに能し。然れば誰か彼城へ行つて菅が逆意を押詰むる者やあるべきと云はるゝと雖も、淡州一國を敵となし、其の上間近き天王寺にも敵あれば、吾こそ向つて退治すべしと云ふ者なし。然るに香川左衞門尉廣景、人の恐れて行かざる處へ向つてこそ、忠も勇も人に抽でめ、某彼の城へ向はばやと思案す。然れども手勢漸く二百計りなれば、此勢計りにては叶ひ難く覺えて、從子の冷泉民部大輔が許へ越して、此事を語つて兩人淡州へ發向すべき旨相談す。冷泉快げに同意して、則ち其の由を訴へければ、輝元其志を感じ、香川・冷泉淡州へ差渡さるべきに定まる。兩人今度淡路へ向つては、二度歸國せん事難かるべしと思ひければ、親しき者共に暇乞して、既に船に乘らんとせし處に、菅父子使者を以つ

信長衆佐久間信盛岩屋城を攻ひて敗戰す

て、何者の申出したる事にてか、我等父子野心の由聞かれ、兒玉内藏允岩屋を忍出られぬ。某身不肖ながら一度味方に屬し、爭で其の志を變ずべき、以來御不審なき爲めとて、寵愛の娘を人質として差越し、委細逆心なき由を申し述べたり。玆に因りて香川冷泉心を安じて、頓て淡州へ渡りて在番す。菅父子彌〻其の志を深くしける間、國中に敵する者もなし。然る處に信長より大坂の押として、佐久間右衞門尉信盛を天王寺に置かれたるが、或時佐久間が手の者一千餘、天王寺より淡州へ渡りて夜中に岩屋の城へ押寄せたり。香川左衞門尉何とやらん物騷がしとて、城中の夜廻りしけるが、纔か二十人計りにて其の儘一の城戸へ下し合せ、槍を以つて突き立つれば、敵一度は追崩されけれども、城兵を少勢と見て取つて返し、切つて入る。香川が家人防ぎ戰ひて、數多に手を負はせたりと雖も、寄手大勢にて攻めかゝる間、香川も危く見えたる處に、冷泉民部大輔閑の聲に驚いて物具し、三十人計りにて跡より馳せ來り、名乘りかけて突懸れば、敵忽ち押立てられ、磯邊へ颯と引行くを、城兵跡を慕ひて十五六人討取り、殘る者共は急ぎ船に乘りて天王寺へ引き歸りけるが、其後は寄せ來る事なし。

藝侯三家誌　卷五　終

藝侯三家誌　卷六

一　尼子勝久播州上月城に入る事

尼子左衞門尉勝久竝に山中鹿之助幸盛・立原源太兵衞尉久綱已下、京郡に集合して詮議しけるは、毛利家に於て元就より已來、吉川・小早川南北を分ち弓矢を取る。北表は元春、南前は隆景司れり。然るに近年、因・伯・雲に於て數度合戰を遂ぐると雖も、元春三德を兼ねたる大將なる上に、相從ふ手の者國人謀士猛卒多き故に、味方毎年利を失へり。隆景は智仁の良將と雖も、兵を用ふる手段は元春に比すべからず。然れば北表の合戰を閣いて、南前へ下り隆景と一戰し、弱強の程を試みて、何方にても軍に利有らん方へ向ふべしとて、此程は惟任日向守が手に屬しけるが、引替へて羽柴筑前守秀吉に附きて、播州より美作を經て雲州へ入るべしと相謀り

勝久上月城を乘取る

て、播磨路へ下られたり。播州上月の城に宇喜多和泉守直家より、眞壁彦九郎と云ふ者を籠置きけるが、勝久已下二千餘騎にて押寄せんとする由聞えければ、眞壁元來臆病者にて、取圍まれては大事なりとて、急ぎ城を逃去る間、勝久安々と上月の城へ入替られたり。

眞壁四郎次郎上月城に逆寄す

〔頭書〕宇喜多直家は、元播州赤松の家老浦上が臣なり。明應五年、赤松正則早世以後、浦上自立して威を振ひ、主國を掠領す。其後永祿十年、又浦上其臣宇喜多直家の爲に國を奪はる。是れ戰國俗變の形勢なり。

眞壁が舍弟次郎四郎、兄が聞逃げしたるを口惜しく思ひ、直家に言ひけるは、軍士三千給はるに於ては、上月の城を切返し申すべしと望みければ、直家、次郎四郎兄が恥を雪ぐべしと思入りたれば、定めて手痛く合戰をすべしとて、究竟の兵三千餘騎差添へられたり。眞壁悅びて、此度上月の城を陷れ、鹿之助等が首を切先に貫く歟、我が命を上月の城戸口に抛つ歟、二つの中を出づべからずとて、天正五年正月下旬、上月表に出張し、其日已に暮れける故、軍は明日と定めて、城より六七十町程

尼子勝久播州上月城に入る

次郎四郎討死

隔て陣取り、馬の鞍を下し鎧を脱ぎて休息す。鹿之助是を聞きて、敵は定めて大勢なるべければ、今宵逆寄にして其不意を討たんとて、宗徒八百餘騎眞壁が陣へ夜中に押寄せたり。宇喜多勢思ひも寄らぬ事にて、鬨の聲に驚き周章騒ぎて、我先にと逃散りけるを敵追詰めて、所々にて多く討取りたり。眞壁次郎四郎は牀几に腰を懸けて、不覺なる味方かな。敵は小勢なり引返して追拂へやと呼ばはる處へ、素膚の歩武者一人討つて懸るを、眞壁やさしき志かなとて、眞向二つに打破りたり。其跡へ足立治兵衛透間なく切つて懸る。眞壁一太刀打つと雖も、打損じたる處を足立横打に兩膝を薙倒して、首を討取りたり。城兵思ふ圖に仕澄し首七十餘討取り、歸りて勝久の實檢に備へたり。其後宇喜多直家、大軍にて上月發向の由聞え有りければ、城中に兵糧の蓄なき故、先づ當城を引拂ひ、重ねて又打入るべしとて、勝久已下攝津の國へ退きたり。之に依りて宇喜多より、高月十郎・矢島の某を上月の城に差籠めたり。然るに天正五年十一月下旬、羽柴筑前守秀吉二萬餘騎を率ゐて上月の城を取圍まるれば、城兵忍へ難くて、高月・矢島を討つて出で、命を助けらるべし

秀吉上月城を圍む

宇喜多直家毛利三家へ援兵を乞ふ

と、手を摺りて詫言しけれども、秀吉悉く搦取り張付に掛け、上總踊と云ふものをさせんとて、簑笠を著せて、一度に火を附けて燒殺したり。斯くて當城に誰をか籠置くべきと有りける處に、尼子勝久・山中鹿之助已下楯籠るべき旨望みければ、秀吉許容せられたり。之に依りて勝久大將として、從子尼子助四郎氏久・日野五郎・山中鹿之助・立原源太兵衛・福屋彦太郎・龜井新十郎・吉田三郎左衛門・河添右京亮・同三郎左衛門・米原助四郎・目黒助次郎・加藤彦四郎・足立治兵衛・同弟慶松・目加田采女允・同彈右衛門・寺本市允・神西三郎左衛門已下、都て三千三百餘騎、上月の城に楯籠りたり。

二　中國勢上月城を圍む事

天正六年、宇喜多和泉守より、小早川隆景へ申越しけるは、某人數を入置きたる播州上月の城を羽柴筑前守攻め取り、其跡へ尼子勝久竝に山中鹿之助・立原源太兵衛・神西三郎左衛　已上籠置きぬ。直家早速馳向ひ、取返す事も最安く候へども、筑前

守定めて後詰仕るべし。　さる程ならば如何樣大軍にて有るべきの間、三家の御出馬頼入るの由言送る。隆景急ぎ吉田へ打越えて、輝元へ相談を遂げられ、彌〻上月發向有るべきに極めらる。　爰に丹後の石川、但馬の垣屋播磨守・同新五郎・同駿河守・大田垣駿河守・同權兵衞尉・同軍監、丹波に荻野悪右衞門・石川彌七郎・赤井刑部・宇野六彌太・波多野伯耆守等、數十人一味同心に元春の方へ使を以て言送りけるは、當國へ御出馬有るべし。　各〻先陣して愛宕山へ打登り、京都を目の下に直下して攻戰はば、信長は定めて本能寺を本陣として、軍勢は皆愛宕山へ向うて洛外に陣取るべし。　其時味方の勢を洛中に忍んで入置き、相圖を定め所々に火を放ちて、不意に戰を決するに於ては、如何に信長猛くとも敗亡に及ばんか、其より逃るゝ敵の勞に乘じ、江州安土へ攻入り、織田の一族盡く誅戮すべき由言送る。　元春納得せられて、則ち丹波龜山の城へ家人兒玉市之助を差籠め、（頭書）吉彦三郎、兒玉一同に差籠めらる。元春も頓て出雲・伯耆・石見の勢を催して、丹波表發向有るべきに極めらるゝ處に、隆景より申越されけるは、元春丹州發向延引して、宇喜多が請に任せ、各〻一同に播州表出馬候へかしと言送らる。　元春上月表の儀は、某向ふ迄も有るまじ。　隆景南前の勢に宇喜多が勢を合せ三四萬も有るべければ、縱ひ秀吉後詰有るとも、危き事は有るべからず。某は雲・伯・石の勢を相催さば、二萬には及ぶべければ、此勢を所々の押に五千差置き、殘る勢一萬四五千に丹波の國人一萬を合せて、愛宕に陣を張るに於ては、信長吾等に對陣有るべき間、羽柴へ加勢成るまじければ、秀吉微勢にして上月後詰中々叶ふまじ。　然らば城は十日が中に沒落すべし。　其時隆景は、輝元の旗本勢を合せて大坂へ上り、門跡を牒し合せ、京都へ攻上らるれば、大坂・愛宕兩方より京都へ押寄すべし。　然るに於ては、根來・雜賀の者共も元來味方に志有れば、是又加勢を出すべし。　迚も信長と矛盾に及ぶ上は、今度存亡安危の一戰と定められて、輝元・隆景は上月へ馬を向けられ、我等父子は丹波表出張せしむべき旨返事せらる。

（頭書）其表著陣の由、誠忠節之段感悅候。　今度三木以下引付味方之間、彌〻入精輝元・隆景相談無油斷、急度到播州可及行事頼入候。　爲其差越昭國候。　猶昭光可申候也。

天正六年三月十九日　　義昭

吉川駿河守殿へ

吉川治部少輔殿へ

毛利三家上月に向ふ

隆景は危き戰を愼む大將なる故、上月を中に隔てゝ兄弟二手に分れ、大敵の信長と有無の防戰せん事危く候間、先づ上月を攻落し、其れより二手に分れ京都を攻むべき間、先々播州御出張候へかしと、重ねて言送らる。輝元よりも再三使を以て此旨を申越されければ、元春止む事を得ず、然らば上月發向すべき由返答せられたり。之に依つて三家相談して相圖を定め、天正六年三月十二日、藝州を發せらる。隆景に相從ふ輩は、穗田治部大輔元清・天野六郎左衞門尉元政・宍戸安藝守隆家・嫡孫備前守元好、國人には三吉式部少輔・同新兵衞尉・高野山五郎兵衞尉・久代修理亮俊盛・古志清左衞門尉・有地美作・粟屋新十郎・楢崎彈正忠・平賀太郎左衞門尉・同木工頭・三村紀伊守・淸水長左衞門尉・草刈太郎左衞門尉・小笠原少輔七郎・上原右衞門大夫・田治部藏人・比幡六郎兵衞尉・伊勢・細川一族、大石・志賀・杉次郎左衞門・仁保右衞門大夫・三浦・吉田・朝倉・坂・福原・桂以下、其勢二萬餘騎、元春には嫡子治部少輔元長二男左近丞元氏・三男民部大輔經言・毛利七郎兵衞尉元康・同少輔十郎元秋、其外國人には山內新左衞門尉・同刑部少輔・益田右衞門佐元祥・羽根兵庫助・佐波越後守・同又左衞門尉・津野駿河守・三澤三郎左衞門爲淸・同攝津守爲虎・宍道五郎兵衞尉・多賀吉六・天野紀伊守隆重・三刀屋彈正左衞門久扶・古志因幡守・湯佐渡守・杉原播磨守盛重・嫡子彌八郎元盛・次男又次郎景盛・有地右近大夫・同左近進・南條伯耆守元次・小鴨左衞門尉元淸・山田出雲守重直・小森和泉守・吉田肥前守・日野左近・福賴治部大輔・同藤兵衞尉・田利・小曳・周布・祖式・久利・都治・出羽・岡本・小束以下、一萬五千餘騎相從へり。宇喜多和泉守直家は存ずる旨有りて、自身は病氣と號し、舍弟宇喜多七郎兵衞尉忠家に、家の子岡越前守・戶川肥前守・明石飛驒守・長舟紀伊守・宇喜多信濃守・岡强介・沼本新右衞尉・花房志摩守・同助兵衞・中村三郎左衞門・伊賀左衞門進・富山半右衞門・市五郎兵衞・芦田五郎太郎・延原內藏允・宇喜多河內守・小原入道信明・楢原監物以下、一萬四千餘騎を添へて差出す。吉川・小早川此勢を合せて總勢五萬餘騎、上月の城を打

吉川小早川上月城を圍む

秀吉信長へ加勢を乞ふ

圍む。又舟手には兒玉内藏允・村上八郎左衞門・浦兵部丞以下大船七百餘艘に取乘つて、播州の浦々を警固したり。毛利輝元は兩川の異見に任せて、備中の松山迄出馬して陣を居ゑらる。斯くて寄手上月の城を十重、二十重に取圍み、元春二宮佐渡守〔頭書〕始め木工助と云ふ。に鬨頭を揚ぐべき旨下知せらる。二宮華やかなる出立にて、指物の金の團を拔持ちて、城を三度招いて鬨を揚ぐる。三度目の聲に附いて總勢同じく鬨を作る。其後元春諸軍に下知して、敵より後詰せんを防がん爲め、總軍の廻りに芝土手を上げ、堀を鑿ち塀を付け、所々に柵を結ひ、亂杙を打たせて向ひ城の如く構へさせ、晝夜隙無く攻寄せ仕寄を付けて、諸陣鐵炮を揃へて、城中へ時々刻々に打懸けさせらる。杉原盛重請口より石火矢を打掛けしが、或夜城中より盛重の陣へ忍を入れ、石火矢を奪取つて岸中迄立退きたるを、盛重自身追駈けて取返したり。斯くて羽柴筑前守秀吉、敵上月の城を圍攻むる由聞いて、馳向つて後詰すべきとて、此旨信長へ訴へて加勢を請ひければ、則ち荒木攝津守を差添へらる。羽柴・荒木其勢四萬餘騎、四月晦日上月表へ出張して、高倉山に陣を取る。中國勢は兼ねて意得たる事なれば、少しも驚かず。猶も用心を嚴しくして、元春よりは新見左衞門尉春倍〔信イ〕、森脇相模守〔頭書〕同和泉守孫左衞門大夫子なり。隆景よりは楢崎彈正忠を差出して、柵の内外より出入る者を究めさせらる。扨元春隆景は後詰勢大勢加はらぬ先に、城を攻落すべしとて、仕寄を付け寄せ攻懸かる。城兵も尼子の鋭卒數を盡し、此度の合戰有無の決する處なりと思入り、身命を抛ちて防ぎたり。

明智光秀筒井等播州下向

〔頭書〕新見左衞門尉云々。今田上野助經高の次男なり。父に隨ひて備中新見杠城に在住する故、新見と名乘る。法體して以云と號す。今田忠左衞門家知の父なり。

三　杉原家人忍討の事

織田信長我身も、頓て播州へ下向して、毛利家を討亡すべし。先づ羽柴筑前守に心を付くべしとて、惟任日向守・筒井順慶・武藤彌平兵衞・瀧川將監以下を差下され、四月廿八日九日の間に打立つて、五月初旬上月表へ著陣すれば、高倉山の勢は八萬餘

吉川元長敵陣に忍を入る

騎に成りぬ。其後相續きて信長の二男北畠中將信雄・三男神邊三七信孝・織田上野介・長岡兵部大輔藤孝細川幽齋・蜂屋兵庫・氏家左京亮・伊賀伊賀守・稻葉伊豫守・佐久間右衞門尉など、一日二日程引下つて追々馳下る。又三位中將信忠は惟任五郎左衞門已下三萬餘騎を率ゐて、五月七日京都を打立ち、兄弟三人は、信長の出張到來を聞合せて下るべしとて、攝州に留まり、蜂屋・氏家・伊賀・稻葉・佐久間等は、先立ちて上月へ馳下りける程に、後詰日々に加はつて十萬騎に餘りぬ。吉川・小早川、此猛勢にも少しも疼む體なく、豫ねて定置きたる後詰押の勢に又人數を加へ、城の攻口をも彌〻油斷なく言付けらる。吉川治部少輔元長、敵の援兵日々に加はるを見て、敵陣の樣體を委しく見て來るべしとて、足立彦左衞門・佐伯源左衞門を遣さる。彼等山傳して、具に敵陣を窺見て馳歸り、見及びし處を申しければ、元長さらば後詰の大軍加はらざる中に、夜軍して高倉山の敵を討崩すべしとて、元春へ其由告げられければ、尤宜しかるべし。隆景へも此事を知らせ、猶ほ申合されよと言はれければ、元長則ち隆景の陣屋へ行きて、此事を相談せられけるに、隆景思案して、今度はまづ夜合戰をば止まらるべし。縱ひ敵大軍加はると雖も、味方地の利を得たれば、少しも危き事なし。頓て敵屈して退散すべきなれば、此方より戰を望む事無用なりと言はるれば、元長、城兵後詰を賴に漸く籠城せしめ候へば、高倉山の勢を追拂ひなば、城は自と落去すべきと言はるゝと雖も、隆景、兎角存ずる旨あり。唯先づ城を拔く籌有るべしと、頻に制せられて、元長力なく夜合戰を止まられたり。爰に

杉原播磨守秀吉の陣へ忍を入る

杉原播磨守は、內々忍に狎れたる者を扶持し置きけるが、秀吉の陣へ忍入りて、敵の用心の程を試むべき由下知して、德岡久兵衞・佐田彦四郎・舍弟甚五郎・菊池肥前など、夜每に高倉山へ遣し、陣屋に火付などさせけるが、五月初旬、德岡・佐田彦四郎・弟甚五郎・其弟小鼠・別所三次兵衞・舍弟雅樂允・安原神次郎・菊池肥前等已上二十餘人、高倉山の陣へ忍び入りけるが、一番に德岡久兵衞、篝燒の眠り居たるを首討に討落し、其外の者は傍の陣屋へ忍入り、手每に頸を取出しぬ。其中に別所雅樂允、敵の首を討つ處に、刀の寸延び殊に鍔大きにて、つかへて落し得ざるを、敵聞付けて、夜討入りたりとて、馳合んとする間に、二十餘人の者共は、皆向の尾崎へ引取

り、爰にて聞けば、別所未だ首討つ音したり。佐田彦四郎、向山より鍔がつかへて切れずと覺えたり。中に提げて討てと言ひければ、別所實にもと思ひて、首討落し、杉原が郎黨別所雅樂允、當陣の眞中にて、忍討して歸るなりと、匂り走り歸りたり。敵其男遁すなとて追駈けけれども、闇夜にて所は不案内なれば、すべき樣もなく、頓て打入りたり。夫れよりして高倉山には、白日の如く篝を燒きて用心しけれども、杉原が者共は、數度忍入つて分捕したり。又城中より、高倉山へ忍んで通ひける伊丹孫三郎と云ふ者を、元春の家人搦取り、此者に城中の樣子を尋ねけるに、寄手の鐵炮頻に、就中杉原が攻口の鐵炮にて水の手を止められ、矢倉一箇所崩されて、吉田三郎左衞門已下討殺され、難儀しける由を語れり。

〔頭書〕異書に曰く、秀吉大兵を率し、上月表對陣の中、戰を催さる。之に依つて元春、新庄志摩守を物見として遣さる。志摩守歸りて、敵はひよ鳥山を片取り、此山の峠を限りて備を立て、味方近付かば、敵より懸つて合戰を始むべき樣子と□□出入候。御□出入段多き所なりと申す。元春聞き給ひ、御思案有つて、境與三右衞門・森脇市郎右衞門に軍士を差添へ、ひよ鳥坂の此方、道の左右竹木茂りたる所に伏せ置き、味方山上に登つて敵を欺かば、敵懸り來らん。味方一支へして引退かば、敵追來るべし。其時四五町やり過して、跡より一同に貝・太鼓を相圖に、俄に伏を起して鬨を作つて、敵の跡を引包んで、弓・鐵炮を放しかけ、猛威を顯して懸るべしと、言含めて差向けらる。又香川又左衞門を召して、ひよ鳥坂の峠に備を立て、敵を欺き呼引かば、敵定めて懸つて合戰を始むべし。其時味方を進め、勇を振ひ相戰ふべし。一支して、さのみ味方戰ひ疲れざる中、叶はで引く體にもてなし、勢を引取るべし。敵勝に乘じて追來るべし。其時坂の此方竹木の茂りたる所を過ぎば、味方の伏兵起つて敵の後陣を襲はん時、俄に取つて返し、先後より引包んで敵の先陣を討取るべし。敵二陣入替はらば、味方も勢を入替ふべしと言含めて、段々に備へて打向はる。斯くて境森脇は、前の夜潛に彼所に行き時刻を相待つ處に、香川又左衞門山の峠に備へて、敵を呼引けば、敵軍其日の先手木下孫六、敵を小勢と見て、打散らさんとて打つて懸る。香川も剛强なる故、

敵の多勢にも臆せず、暫く支へて戰ひけるが、兼ねて相圖に任せて、坂を下りに引退けば、敵すかさず、嵩より追つて慕ひ來る。味方思ふ圖に敵を引受くれば、伏兵俄に起つて後より襲懸りければ、香川又取つて返し、前後より取挾んで攻戰へば、敵も爰を切拔けては、先陣悉く討死すべきと思ひければ、身命を捨てゝ相戰ふ。上方勢取籠められて難儀の樣子を見て、秀吉の旗本を始め、諸勢一同に突懸れば、元春味方の諸勢を進めて懸合せ、敵味方入亂れ、思ひ〳〵に相戰ふ。然るに先手の戰の中、木下孫六を木次次左衞門討取りし故、中國勢機に乘じて、勇氣を勵んで戰ひしにより、羽柴筑前守、味方を纏めて引退き給ふ。境與三右衞門後を附送りて、坂上りに秀吉の馬印を目懸け、正なくも大將の母衣付を見るものかな。返して勝負あれと高聲に匂れども、聞入れずして引退きたり。其日討取る首五百餘と言へり。又說に、其後秀吉より、木下孫六の首を所望せられければ、元春則ち木次次左衞門に彼首を持たせ送られけるとなり。

上月城合戰

四　上月合戰の事

同六月廿八日、宇喜多勢の先陣、作州三星の城主中村三郎左衞門尉、高倉山の麓に小河の流れたるに、敵陣より朝毎出でて馬の四蹄を洗ひ、手水などする者多かりければ、是を討取るべしとて、伏兵を置かれたり。小早川家の井上彌兵衞も、是に加はつて待伏する處に、高倉山よりいつもの如く出でたるを、鐵炮にて忽ち三人打殺したり。近方に居ける上方勢、手早く懸合せ、伏兵を討たんとす。中村少勢なれば、已に討たるべく見ゆる處に、出雲國の住人宍道五郎兵衞尉、三百計りにて伏兵に加はり、上方勢を追拂ふを見て、又上方勢よりも中村式部少輔・神子田半左衞門尉等、二三千計りにて援け來りて、宍道が勢を取込むる。是を見て中國勢、伯州の南條伯耆守元次・小鴨左衞門尉元清、一千餘騎にて渡合ひ、吉川勢も少々馳加りて迫合ひたり。南條が手の者一條市助、元春の二男左近丞元氏の家人江田次郎兵衞、山田出雲守が郎黨山田利兵衞・同外記・鍛冶屋市允・佐伯五郎次郎、吉田肥前守が若黨

福島正則の高名

瀬尾孫右衛門、其外吉川衆都野主水正・境孫次郎・湯頭助兵衛・遠藤彌九郎・足立彦左衛門、小早川衆兼久内藏允など槍を合せ相戰ふ。味方難儀に見えたれば、杉原播磨守が手の者渡邊左近・所原彌太郎・同兵庫助・入江平内・茶道坊主の全從庵等、助來りて槍を合せ、渡邊・所原・入江何も首を得たり。味方にも吉川衆遠藤彌九郎・杉原家人所原兵庫助討死す。爰に南條が手の者一人手を負うて伏し居たるに、上方勢の中より武者一人、敵の弓・鐵炮稠しきをも構はず、走せ寄つて首を討つに、眞黑に鎧ひたる武者一人、後に槍を提げ、敵懸らば一突に突伏せんと、仁王立に立ちて少しも動かず、首打澄まして二人打連れて歸りたり。天晴大剛の者と見えたるが、後に名を聞くに、頸討ちたる人は福島左衛門大夫正則、此時市松と言ひて十八歳、初高名と聞えし。後に控へたる大の男は、郎黨星野越前守と聞ゆ。斯くて敵勢、高倉山の人數も半過ぎて打下したると相見え、二萬餘上月の在郷に盡く駈合すれば、南條・杉原・宍道・中村が五千餘騎、一太刀打ちては後へしざり、一矢射ては引退く。是を見て杉原播磨守盛重・同彌八郎元盛・又二郎景盛・吉田肥前守・河口刑部少輔等を相伴ひ、二千餘騎にて討出づる。吉川衆も今田中務少輔經忠・吉川式部少輔經家・新見左衛門尉春倍・山縣四郎右衛門尉・香川兵部大輔春繼・森脇市郎右衛門尉等、味方難儀に見えたり。先陣の樣體見計ふべしとて一千餘騎。杉原と一手に成りて打出づれば、天野・三刀屋・三澤・古志・益田・佐波、其外雲・伯の勢悉く打出づる。此勢一萬餘騎なり。吉川治部少輔元長は、兼ねて吉川式部少輔經家・香川兵部大輔春繼を以て、杉原播磨守が許へ、上方勢若し懸り來り、合戰に成るべしと見及びなば注進すべし。元春隆景は容易に打出づる事は有るまじけれども、某は大將と云ふにもあらねば、自身手を碎き秀吉の鋒先の强弱を試むべしと言ひやられければ、盛重承り、本陣遠く隔り候へば、合戰の期に望んで注進仕るとも、御出馬遲々に及ぶべし。足輕迫合有りて槍にも成るべしと見及び候はゝ、相圖の火を立つべき間、其時御馬を出さるべき由返事したるに依つて、敵味方三萬餘互に勇氣を顯して打つて出でたるを見て、盛重相圖の火を立てたれば、是を見て吉川元長・舍弟左近丞元氏・民部大輔經言と共に急に打出でられたり。杉原盛重待受けて、今日の合戰は某に任せら

るべし。上方勢を始めての戰に、一鹽付けさせずば、本の陣へは歸るまじと言ひて、眞先に進む。本道筋は吉川元長兄弟三人に、杉原播磨守盛重・南條伯耆守元次・其外雲・伯の勢一萬餘騎、相從うて向うたり。脇々の小迫合は所々にて有り。本道筋の合戰已に始りぬまと見てければ、秀吉の本陣は云ふに及ばず、蜂屋・氏家・伊賀・稻葉・佐久間等の兵ども、我も〳〵と駈出で、入替りて戰はんと段々に備へて控へたり。先陣には中村式部少輔・神子田半左衞門・美藤甚右衞門・大谷刑部少輔・木下備中守已下、秀吉の郎黨五千計りにて進めば、其次には黑田官兵衞・同吉兵衞・同兵庫助・蜂須賀彥右衞門・一柳市介・堀尾茂介など三千餘騎にて備へたり。

〔頭書〕私に曰く、此處に大谷刑部少輔之を載す。慶長五年關ヶ原討死の時、廿八歳云々。之に依る時は則ち今年天正六年、刑部少輔六歳なり、不審。總べて此上月合戰一章は、關西鬪記の說に因つて之を書す。其外眞僞正しからざる趣間々之有り。追つて正說により之を添削すべしと云々。

又曰く、大谷關ヶ原に於て討死の時に、人の子大谷大學吉勝・木村山城守賴繼と云ひて兄弟あり。刑部關ヶ原出張の時、兄弟引離れ出陣して、東國勢と相戰ひ、吉隆討死の後、兄弟が從兵忽ち落失せ、僅百騎計りになりけれども、兄弟氣を屈せず、大敵を突崩し、大いに武勇を盡し、主從十八人に討ちなさる。大學今は是迄なり、兄弟共に腹を切らんと覺悟したる處に、家人橋本久八と云ふ者諫言して越後筋へ落ちたり云々。此時刑部少輔斯く年たけたる子供兄弟之れ有る時は、討死の時廿八歳と云ふ說も正僞覺束無しと云々。又一說に、大學は刑部が甥なりとも云へり。

總じて信長譜・秀吉譜等の諸書、此時節大谷・福島市松・加藤虎之助・同左吉等の事、之を載せず。

其後は信長よりの援兵四萬餘騎、勇み誇りて控へたり。吉川元春より軍使を以て謀を傳へられければ、元長總軍に掟せられけるは、上方勢は敵の虛を窺ひて、無二に馬を入れ蹴崩すの由聞えたり。然れば味方の足輕共射拂ひ〳〵して、敵馬を入れんとせばばら〳〵と下敷き、假令膝の上に乘懸くるとも、一人も立上らず馬の足

上方勢敗軍

を薙ぐべしと、下知せらる。斯くて上月河を隔てゝ矢軍始まりしが、中國勢聊か勝色なりと雖も、昨日より今朝の曉方迄雨頻にして、河水增してければ、渡り兼ねて猶豫したる處に、吉川經言と名乘りて一番に打入れらるれば、舍兄元長、續けや者共と下知して同じく乘入れらるれば、吉川勢一度に川へ打入りたり。是を見て杉原・南條等も劣らず馳入り渡りければ、上方勢押立てられて引退く。黑田官兵衞・同吉兵衞・同兵庫助・福島市松・蜂須賀彦右衞門・一柳市介・堀尾茂介・宮部善乘坊・加藤虎之助・同左吉など、馬を一面に竝べて進來る。元長足輕は居敷き、弓鐵炮を射出すべし。侍も悉く下敷けと下知せらるれば、一度に颯と下敷き、弓・鐵炮を射懸けるに、上方勢十四五騎馬上よりばら〳〵と射落さるれば、さしも勇める上方勢進む事を得ず、又引く事も流石にて、一所に控へて漂ふ處を、元長采配を振つて味方を進めらるれば、杉原播磨守盛重・同彌八郎元盛・同又二郎景盛、其外吉川勢一手に成りて、二千餘騎咄と突懸れば、上方勢又押立てられて四五町計り引退く。此時上方勢宮田の某と名乘りし者を始め、多く中國勢へ討取りたり。元長永追を制して、又本の如く備へらるれば、上方勢又取つて返し、馬を入れんとすれども、中國勢大將の下知に從つて、一度は坐し一度は起ち、或は左し或は右して、自在に擧動しける間、上方勢破る事能はずして、次第々々に引退く。敵引けば中國勢、靜かに跡を追ひ、太鼓を打つて進む。上方勢馬を入れんとすれば、又ばら〳〵下敷く間、上方勢射立てられ押立てられて、高倉山の麓迄廿餘町引退きたり。秀吉の本陣其外筒井已下の諸陣より、是を見て、我も〳〵と助け來れば、上方勢却つて後陣の大勢に支へられて、駈引自由ならざれども、續く味方に力を得て、高倉山の麓にて、一度に取つて返し、足輕を先に立て鬨を作りて、馬を一面に竝べて備へたり。杉原父子三人、吉川勢眞先に先み、ばら〳〵と下敷き、弓鐵炮を先に立て散々に射たり。然れども互に虛實を見計らうて、唯矢軍・足輕迫合計りにて、有無の戰をば愼めり。此時若し荒木攝津守、上の山より下し懸け横合に突いて懸からば、中國勢多分押立てらるべし、されども、荒木存ずる旨有つて、空しく遠見して居たり。此攝津守毛利家へ志を通じける由露顯して、上月開陣の後、信長より退治せられたりと聞えたり。又宇喜多勢

宇喜多勢の去就

の陣より、高倉山の間には少し高き嶺有りて、尾上續きなる間、彼の峯へ備前勢押登り、一萬に餘る勢にて秀吉の本陣へ逆に切つて懸りなば、秀吉忽ち敗軍たるべき處に、宇喜多和泉守其頃上方へ志有りける故、敢て備前勢此義勢にも及ばず、時の勝負を窺ひ居たり。吉川元春・小早川隆景は、上月の城を取圍み、陣々を堅く守りて、二備中・備後の勢共をば一人も出されず。斯くて中國勢高倉山の麓迄敵を追詰めて、山上を見上げたるに、羽柴筑前守秀吉、陣を嚴しく構へ、總勢は山の半腹迄下し合せ、其外惟任・筒井・伊賀・稻葉・蜂屋以下一勢々々備へたれば、中國勢纔に二萬の勢を以て、五萬餘の大敵を破るべしとは見えざれども、上方勢を廿餘町追退け、既に勝に乘じたれば、大軍懸らんとするに少しも臆せず、足輕を先に立て弓・鐵炮を隙無く射懸け暫し時を移す。大谷刑部少輔・神子田半左衞門・美藤甚右衞門等の勇士共、後陣つかへたれば引くとも引かれまじ、一度懸りて敵に一當して、其勢に勢を打入るべしとて、六七千騎馬を立直し、歩立を先に立て押來れば、後陣の高倉山の勢、我も〳〵と馳續く。吉川元長是を見て、采配を擧げて下敷けと下知せらるれば、眞先

大谷刑部と中村式部の武勇

に進まれたる民部大輔經言・左近丞元氏・杉原播磨守・同彌八郎・同又次郎、其外吉川勢今田中務少輔・吉川式部少輔・香川兵部大輔・新見左衞門・森脇市郎右衞門・境與三右衞門・二宮右京亮・伯州の住人吉田肥前守・牛尾大藏左衞門等の勇士、皆田の畔に尻打懸けて前に鐵炮を立て、膝の上に槍を置いて、敵懸らば先づ其馬を突き、主落つる處を討取るべしと待ち懸けたり。上方勢は敵の備堅固なる故、乘入るゝ事を得ず。大谷刑部少輔唯一騎、間近く乘寄せて透間あらば味方を進め乘入らんと、備を窺ひ駈廻りける有樣、天晴れ大剛の者なりと見ゆ。中村式部少輔は鐵炮數百挺揃へて散々に打懸け、敵少しも色めかば、其費に乘じて、虛を擊たんと思入りたる勇氣顯然たり。此者は羽柴家に於ては、神子田・中村とて數度の譽有りて、武功の者なりと世に名を知られたる勇士なり。中國勢餘りに深入りしければ、勝つても負けても引退かん事難しと思ふ處に、毛利家の侍大將天野紀伊守隆重下目押に居たるが、後馳に馳著き、彼元來總軍の勝利を心に懸けて、一身の手柄をば好まざる故、手勢三百計りにて後の山へ打登り、備を立てゝ味方の機を助く。穗田治部大輔元清も

小兒次郎勇戰

杉原播磨守よりは右の方打出でられけるが、高倉山の茂りの中に、敵數多隱れ居て鐵炮を打ち、後には山下へ下りて瀬りに打懸りける故、元清槍五十本計りにて喚いて突懸られければ、敵忽ち茂りの中へ逃入りぬ。兒玉小次郎〔頭書〕一書に兒玉兵庫元兼此時小次郎と言ひたるにやは、輝元より當表合戰見合せの爲め、轉輿三右衞門を物頭として鐵炮三百挺差添へて上せられけるが、兒玉も高倉山近く打出でたるに、敵堤を楯に取りて鐵炮を打懸くる。兒玉も塘の陰より鐵炮を打たせ迫合せけるが、小次郎壯年の者なる故、動（やゝもず）れば突懸らんと勇みけるを、雲州浪人若林藤兵衞尉〔頭書〕宗甫の事なり傍に居けるが、今暫し待てと言ひて、草摺を取つて控へたりしが、能き時分を見て、早懸かれと免せば、兒玉槍を取つて突き懸かる。相隨ひたる者も續いて懸る間、敵堪へず逃去り、茂りたる竹の蔭に隱れたるに、兒玉續いて追駈け、竹を隔てゝ戰ひたり。上方勢の中に藪内匠〔頭書〕中村一氏が家老と云々本姓中村と云ふ。と名乘つて兒玉と槍を合せ、汗を流して突合ひしが、兒玉小次郎手を負ひたり。若林藤兵衞尉は聞ゆる勇士にて、眞先に進み敵數多突退け、勇氣あたりを拂うて見えし。菅田三郎左衞門も若林と同じく進みて、刀にて働きけるが、敵に股を突かれながら、其槍を引挫じき奪取りたり。兒玉身命を捨てゝ戰ふ間、敵終に打負けて後の茂りの中へ引入りたり。斯くて本道筋の戰、高倉山の大勢も下合（おろしあ）ひて迫合ひ時を移せば、鐵炮の音・矢叫の聲、天地に響きて夥し。中國勢勝に乘りて、手負・死人を踏越え〳〵次第に敵を迫詰めたり。是を見て羽柴秀吉、味方の陣へ使を以て、速に引取るべき旨言はせられしが、はや本陣より崩立つて引退きたり。されども先陣は備を亂さず、一段づつ繰引に引拂ふ。中國勢引く敵と見て、心安く鐵炮をため澄して打ちける程に、上方勢手負・死人數知れず。吉川經言並に杉原彌八郎元盛・同又次郎景盛、何國迄も追詰めんと勇まれしを、吉川元長、斯樣の所にて長追如何なりとて、制止めらる。上方勢次第に引退きて、遙山上に打入りたるを見て、中國勢も靜に打入りたり。都べて今日三箇所に於て迫合有りたるに、何れも中國勢勝に乘り、初めての合戰に、上方勢に一鹽付けさせたりと悅び合へり。吉川元長は敵早く引取りたる故、入亂れたる手詰の合戰なき事殘念なりと言はれしとなり。此合戰の中、元春・隆景は敵の働に依りて打出づ可しとて、備定めして後陣

秀吉敗北

信長播州に下向せんとす

に控へられたり。斯くて織田信長播州へ下向すべしとて、諸勢を先立て、既に京都を打立たんとせられける處に、羽柴筑前守より、先づ今度は御延引なるべきの由言上せられたる故、其事止みぬ。秀吉は斯くては當陣全からずと思はれて、惟任・荒木・筒井已下の諸將を集めて詮議有りけるに、宮部善乗坊、今度は先づ當陣を引拂はれ、重ねて信長卿を進めて御發向をなさしめ、毛利家の根葉を斷るべき謀有つて然るべき旨言ひければ、秀吉聞かれ、城を救はんとて永陣を張るは、味方危くして、其上にても上月城落城すべし。又さしも頼みに思ひて籠りたる味方の後詰しながら、當陣を引拂ひて尼子を見捨てば、我非義の名を得て、千歳迄の瑕瑾なりと言はるると雖も、惟任・筒井已下一同に、尼子を捨てんこと苦しからず。兎角引拂はれ然るべしと言ひて、同月廿九日の曉に秀吉上月表を引拂ひて、同國書寫山迄打入れられたり。

秀吉書寫山に退く

〔頭書〕豊臣秀吉譜曰、信忠出京之時、信長亦欲繼發。而家臣悉猜秀吉之武名、抑遏信長之發洛、亦使秀吉退兵、秀吉不得如何之。一日毛利兵出野伏、使殺刈馬芻者、秀吉兵殺野伏。毛利兵大出戰秀吉兵、尾藤氏・戸田氏先登被創、中村氏能戰、宮田氏戰死。秀吉軍殆危。竹中半兵衛重治見之、指揮兵士而退時、信長使者又來使、秀吉退於之。秀吉不得已而歸書寫山、故山中鹿之助失援力竭、降毛利家、遂被殺。秀吉往信忠之宅曰、以無援、故上月城陷、鹿之助授首、是非公之過謬歟。信忠曰、然吾慙於吾子、乃聚兵謀攻三木城云々。

〔頭書〕或書に曰く、天正六年の春、尼子勝久播州佐用上月籠城、毛利・吉川・小早川六萬人にて攻め圍む。然るに織田信忠、後詰として三萬人を帥ゐて、高倉山に陣を居る、日夜の合戰止む時なし。此時藪内匠、足輕二百人を進めて弓・鐵炮を放ちければ、毛利方より、兒玉兵庫元兼も足輕二百人計り從へ、鐵炮迫合ありしに、互に玉薬矢種盡きて、藪と兒玉と槍を合すべしとて駈寄りけれども、陣間に茂りたる竹藪あり。兩人藪越に槍を合せけるに、兒玉が郎從三戸善兵衛、内匠が乗りたる馬の三頭を突きければ、馬騒ぎ飛んで、内匠が十文字の鉞葛にかゝり取落しけるを、三戸藪をくぐり其鉞を取る。内匠は馬徐々と歩ませて、本陣に打入りた

り。此迫合を敵味方見物して、一同に鬨を作りしに、善兵衛取りたる鉈を差上げて、二度鬨を揚げければ、彼迫合に兒玉が働を勝れたりと言ひあへり。凡そ柵越・堀越・藪越の槍は、強き働にせざる例あれども、彼の兩人は晴なる迫合なるによつて、世に其の隱れなし。此時より中村を改めて、藪と稱したりと言へり。彼□は（虫入）一氏と同姓の一族なる故に、中村氏に仕へて、後に藪氏に□（虫入）るにや。但又此時、藪越に槍を合せたる働比類無きに依つて、夫より藪氏になりたりと、或說あり。

秀吉三木城を攻む

五　播州三木（或作神吉）城沒落の事

爰に播州三木の城主別所中務（小三郎とも）長治と云ふ者あり。羽柴筑前守秀吉當國下向の時、姫路の城主小寺は秀吉に屬しけるが、別所は毛利家に志有りける故、是に隨はず。小早川隆景より、浦兵衛丞宗勝に人數を差添へて、三木の城へ籠められたり。是に依つて秀吉、書寫山を本陣として三木へ相働かれけるに、別所長治・浦宗勝申合せ、城より打出で稠しく相戰ひ、羽柴勢を追退けたり。其後浦罷歸り、三木の城兵糧乏しき由言ひけるに依つて、是を見繼ぐべしとて、隆景より兵糧を送らるゝと雖も、上月落城の時節なる故、小人數にて漸く魚住へ著き、其れより兵糧計り三木へ入れて歸りたり。斯くて信長の嫡子中將信忠は、舍弟信雄・信孝相共に上月合戰の間は、同國加古川に本陣を居ゑて居られけるが、此儘歸らんも面目なしとて、三木の城へ押寄せ、一時攻に攻崩さんとせられけるが、別所散々に射立てゝ、寄手、手負・死人二三百人に及びければ、當城侮難し、其後は攻口を寬げ（くつろ）仕寄を付け、井樓を組みて攻められければ、別所勇なりと雖も、味方僅に千餘人、寄手八萬餘の軍士なれば、防ぐに力盡きて、降參を請ひければ、方便りて城を喚出し、竟に首を刎ねられたり。

別所長治殺さる

〔頭書〕上月城落去之由珍重候。別而抽馳走故候。彌〻山口行、急度申付候。可爲感悅候也。仍太刀一腰・馬一匹遣之候。委細輝元可演說候。爲其差越師行候也。

天正六年七月十八日　　義昭

吉川駿河守どのへ

〔頭書〕本文三木細註、或作神吉云々。但三木與神吉別歟。

〔同〕秀吉譜曰、別所小三郎長治者、播州東八郡之守護也。叛秀吉而入於三木城云々。

其後長治構諸城、使櫛橋左京進守志賀多、神吉民部少輔・□（虫入）神吉梶原平三兵衛守高砂云々。長治及其弟小八郎□□□（虫入）進友行山城守賀相・其餘上月・中村・高橋・服部・後藤云々等守三木城云々。

又三木城落去之事、天正六年八月、信忠赴三木城邊、使秀吉屯于平山、而信忠歸上。其後長治數出城、秀吉味方軍士防戰度々也。三木城堪。而同八年糧米竭兵威漸衰、長春刺殺妻子、其身亦自刎、年廿三云々。

又曰、信忠督兵攻神吉城、城主神吉民部拒之。頃之民部族神吉藤太夫、斬民部首以其城降信忠云々。

〔同〕別所長治先祖は、赤松家の族臣なり。赤松滿祐入道、將軍義教公を弑し、其後播州白旗にて別所入道を始め、同小太郎・同小三郎則治・赤松入道と共に自害す。

其餘族殘りて、長治に家名を傳ふと云々。

〔同〕到黑澤山陣替之由、重疊辛勞無比類候。然者織田城之介三木表爾今在之之由候條、此節自然人數等於打入者、敵募軍利上、口覺はたと令相違、今度味方に引付族及難儀、大坂已下勿論、可滅亡間、如何にも以長陣覺悟抽戰功者、彌敵城共令懇望、猶以可得大利候。若備處にては可爲後悔候哉、計策專一候。元春事、從但州招請旨其聞候。雖然凶徒未此口徘徊條、彼等於退治者、北國儀おのづから可屬本意候歟。是非其隆景一手に相働、別而粉骨偏賴入候。爲其上野大和守・一色駿河守を差越候。猶昭光可申候也。

天正六年七月廿七日　　義昭

吉川駿河守どのへ

六　尼子勝久已下自害（附山中鹿之助最期の事）

尼子左衞門尉勝久は、さしも賴みたる羽柴・荒木以下の後詰勢、悉く引退かれければ、

山中鹿之助吉川小早川に詫入る

籠城の者共彌〻力を落す。斯くて山中鹿之助幸盛、使を以て、元春・隆景へ申しけるは、今度上月籠城のこと、全く勝久並に其外の者共の所爲に非ず。偏に神西三郎左衞門が調略に依れり。然れば神西に切腹させ申すべき間、勝久已下命を助けられ候樣にと、再三懇望すと雖も、兩川承引なく、勝久並に尼子助四郎氏久・加藤彦四郎・神西三郎左衞門此四人切腹なきに於ては、殘る輩をも命を助くまじき旨、返事せられければ、鹿之助勝久に向ひ、此上は力なし、御自害有るべし。然れば某事は暫くの命を存命へ、敵に降り何とぞ元春と刺違へ、當家年來の鬱忿を散じ申すべしといへば、勝久、某事抖藪行脚の生涯を送るべき處に、各〻の志に依つて、一度尼子の大將の名を汚しゝこと、生前の本懷是に過ぎず。然るに天命時到らずして、斯く成果つること全く恨と思はず。快く自殺すべし。御邊は何とぞ謀を廻らし、當家代々の舊恩を報じ、勝久が泉下の遺恨をも散ぜらるべしと言ひて、今迄持たれたる太刀・力、其外金銀・珠玉の類悉く取出して、夫々に分ち與へられたり。同七月二日、神西三郎左衞門城の尾崎へ出でて、自害すると披露し、頓て城を出で清げなる膚を脱ぎ、刀を拔きながら麗しき聲を揚げて、「朝顏の花の上なる露よりも」と、言ふより末を緩々と謠ひけるが、末を少し謠替へて、「哀れなりける人界を、何時かは離れ果つべき」と云ふを、「今こそ離れ果てけれ」と謠ひ終り、其聲の中より腹十文字に搔切つて失せたり。同三日左衞門尉勝久、客殿の眞中に疊を重ねて其上に坐し、從子の助四郎氏久・加藤彦四郎次第に並居て、勝久酒を出させ、盃を取つて靜に呑み、其盃を氏久の前に置き、刀を拔持ちて、吾元來東福寺に有りて、佛法商量の道はあら〳〵其旨に至りぬ。最期の一句を擧すべしとて、刀を提げ起ちて、「寶劍在手殺活臨時、這箇是殺活自在底」那箇是勝久末後之一句と、良久自代云ふ、「都來劃斷千差道、南北東西達本鄕」と言ひもあへず、腹十文字に切破らるれば、池田甚三郎其首を討落す。助四郎氏久も續いて腹を切る。加藤彦四郎は庭上に跳出でて、涼く自害したり。池田甚三郎も勝久の死骸の前にて切腹す。山中鹿之助、勝久已下の首を敵陣へ送り、降參して元春對面せられん時、本意を達せばやと思ひ、年來の科を許して召仕はるゝ樣にと請ひければ、元春・隆景許容せられて、頓て先づ元春對面せられしに、

神西三郎左衞門自盡

尼子勝久の述懷

勝久自盡

鹿之助殺さる

鹿之助兼ねて巧みしには様替りて、元春・元長父子一間隔て著座せられ、其次には宮庄次郎三郎元正・今田中務少輔經忠已下數十人並居、二宮木工助酌を取り、二宮右京亮肴を捽ぎしが、何れも刀を横たへ、鹿之助に目を付けて用心嚴しければ、さしもの山中只頓首して退出したり。其後隆景對面せられしも同じ趣なれば、鹿之助案に相違して旅宿へ歸りたり。毛利輝元より粟屋彦右衞門・山縣三郎兵衞兩人に、鹿之助を具して下るべき旨命ぜられて、粟屋・山縣五百餘騎にて播州に到れば、元春・隆景より鹿之助に、備中へ下りて輝元へ目見すべき旨言聞かせられ、粟屋・山縣守護して備中の松山へ下さんとす。鹿之助は家人六十餘人相從へ、信長より給はりたる四十里鹿毛と云ふ馬に乘り、兩使に伴ひ下りけるが、既に備中國阿井の渡に著く。兼ねてより天野紀伊守が嫡子中務少輔元明に、鹿之助を討果すべき旨下知せられける故、天野小船一艘に鹿之助が手勢を悉く乘せて先へ渡し、鹿之助は頸取後藤・柴橋と云ふ者二人を召具し、岩に腰掛けて扇をつかひ袒ぎて汗拭ひなどしける處に、天野が手の者河村新右衞門岸蔭よりねらひ寄りて、袈裟切に丁と切る。鹿之助あつと言ひて川へ飛下りけるを、河村續いて飛下りたり。福間彦右衞門あたり近く徘徊して、透間もあらばと心掛けけるが、其儘聲を掛けて走り寄り、鹿之助が首を討落したり。郎黨柴橋をば、渡邊又左衞門・轉右衞門二人して討果す。後藤彦九郎は散々に働きけるが、是も終に討たれたり。扨鹿之助が首を輝元の實檢に備へたるに、河村・福間相高名の由感ぜらる。立原源太兵衞尉は藝州迄下りけるが、潛に逃上りて、蜂須賀彦右衞門を頼み居けると聞えし。

宇喜多直家の變心

〔頭書〕山中鹿之助、天文十四年乙巳八月十五日、雲州富田庄に於て誕生。十三歳初陣、十六歳の辰、菊地音八と云ふ大將の首を取る。死する時三十四歳。

七　宇喜多和泉守心變の事

宇喜田和泉守直家は、極めて表裏の人なる故、織田信長畿内・畿外に猛威を振はれけるを見て、幕下に志有りければ、上月合戰の時分、信長の嫡子中將信忠加古川に陣取りて居られけるに、宇喜多與太郎に洲波隼人入道如慶を相副へ使として、信長の

味方に屬すべき由潛に言送り、上月表へも病氣と稱して、舍弟七郎兵衞尉忠家已下を差出しけるが、上月落去の後、自ら備前岡山の居城を出でて、播州へ打越え、元春・隆景へ上月勝利の嘉詞を述べたり。其後洲波入道を以て、今度の勢に同國龍野を討取りなば、上方發方の通路宜しかるべしと勸めたり。元春は宇喜多に疑心ある故、龍野發向の事如何有るべきやと言はれけれども、隆景樣々評議せられ、上月を發して黑澤山に到りて、兄弟軍を移さる。治部少輔元長は、上月落去の趣を輝元へ語らん爲に、備中松山へ下向せられたり。此時宇喜多は、家老明石飛驒守が家城八幡山に居て、元春・隆景を彼所へ請待して、饗應に事よせ討果すべしと相計りて、兩川へ八幡山に於て、薄酒を獻じて長陣の御苦勞を慰むべき旨、案内を遂げたり。元春・隆景斯かる企有りとは知らず、其請に任せて則ち許諾せらる。然る處に八月二日の夜、明石飛驒守より弟勘次郎を以て、和泉守隱謀を企て、兩將來臨の節討つ可きとの事、支度仕る由告げ知らせたり。又直家が弟宇喜多七郎兵衞尉忠家よりも、同樣に內通す。故に兩川相談して、先づ今度は開陣し、重ねて宇喜多を誅伐すべしと

直家元春隆景討たんと謀る

直家の隱謀洩る

て、八月三日の東雲に、兩川より和泉守が方へ使を以て、唯今當陣を引拂ふなり、重ねて發向して對面すべしと言遣し、備を固くして歸陣せらる。和泉守支度相違して、後を慕ふこともなし。元春は美作を經て雲州へ打入り、隆景は海邊へ出でてしやくしの浦より船に乘りて、備後國へ下られたり。

〔頭書〕今度播州永々逐在陣、殊打續爾今其表居陣由、重疊無比類忠功候。爲其差越一色宮內少輔、小袖一重遣之候。次、自東國到來（脫アルカ）條馬一匹（靑毛）、將遣之候。猶眞木島玄蕃頭昭光可申候。

天正六年十月十六日　　義昭

吉川駿河守どのへ

〔同〕今度荒木馳參、味方攝州悉屬勝手候。以此勢輝元早速令出馬、彌抽軍忠候樣、加異見馳走者、可喜入。爲其差越昭光候也。

天正六年十一月廿四日　　義昭

吉川駿河守どのへ

南條元次小鴨元清毛利を叛き織田に附く

八　南條小鴨逆意の事

南條伯耆守元次、多年毛利家の旗下なる處に、尼子家の浪人福山次郎左衛門と云ふ者を扶持し置きけるが、彼の者元次に語りけるは、織田信長、武威當時天下に傑出したれば、毛利家も終には信長の爲に家を滅し、其旗下の國士も根を斷ち葉を枯さるべき間、元次も早く信長の幕下に屬して、家の長久を慮り給へかしと、利害を沙汰して勸めければ、元次此事を尤と思ひ、異母弟の小鴨左衛門尉元清に語りて相談しけるに、元清も則ち同意したり。家の子南條備前・同九郎左衛門・山田越中以下を呼び集めて詮議しけるにも、何れも此儀宜しかるべしと一決しけり。之に依つて、頓て羽柴秀吉迄、信長卿の幕下に屬すべき旨言送りたり。此由吉川元春の方へ聞えければ、則ち南條の與力山田出雲守重直、〔頭書〕壁山事なり。毛利家へ志深く篤實の者なる故、彼を呼び寄せ、南條・小鴨心變りせし由、其隱れなし。何とて山田此事を告げ知らせざるやと言はれければ、重直驚き、此儀ゆめ〳〵存ぜざるの由、一紙の起請文を書き

福山次郎左衛門討たる

て出したり。元春其儀に於ては、南條兄弟に異見を加へ、福山次郎左衛門を討つて出すべき旨命ぜらるゝ、山田則ち領掌して、伯州へ歸りたり。福山次郎左衛門は、出雲守を元春呼び寄せられたる事、此程の隱謀漏れ聞えての事にてはなきやと、心許なく思ひければ、山田が館へ越えて、下向の趣を問ひ聞きけるを、出雲守いつよりも睦しくもてなし、相圖を定め、山田十右衛門に目くばせしければ、十右衛門打物の達者にて、拔討に切付け、其刀を引かざる內、出雲守が嫡子藏人續いて切りたれば、福山は刀をだに拔きえず死たり。其後出雲守は、南條に樣々異見を加へければ、元次・元清より、家老津村と云ふ者、伯父・甥兩人を以て、元春へ逆意を存ぜざるの通り申斷ずると雖も、元春承引なく、彼の使をも討ち果さるべきと計らはれける處に、津村其趣を見及び、兩人共に密に立退き、伯州大山の坊中へ夜中に逃げ込みたる處に、杉原播磨守が家人前原木工允、坊中へ押入り、則ち搦取つて差出せば、同國津波並の濱に磔けに掛けさせらる。其後南條兄弟、多勢を以て山田が館へ押寄せたり。出雲守勇謀深く、手の者强卒多しと雖も、自體無勢なる故、一方を破りて藝州へ立

退きたり。其後出雲守は吉川家に奉仕し、忠義淺からざる者の故、輝元よりも知行を加へ與へられたり。小森和泉守・小鴨四郎次郎・北谷正壽院も南條を背き立退き、何れも元春に仕へたり。南條伯耆守元次妻は、元春の内吉川河内守經久が娘なるが、元春養女として四五年已前、婚姻をなさしめられける處に、此度逆意手切として、彼妻を藝州へ送り返す。斯くて吉川元春は、播州上月落城の上は、丹波表へ出馬せらるべき處に、宇喜多・南條心變りに依つて、先づ分國の敵を退治してこそとて、其事を閣かるゝ處に、丹波の國侍中國へ内通する旨、信長へ聞えて、之等を退治として惟任日向守を差向けられたる處に、多分降參して信長に屬したり。其中に荻野一人内通の旨を違へず、家城に引籠り惟任を引受け、比類なく相戰ひたり。

九　毛利三家作州發向附所々落城の事

宇喜多和泉守直家、上方へ一味せしに依つて、渠が領分の城ども攻め取らん爲め、

毛利三家の作州大寺畑城を攻む

毛利右馬頭輝元・吉川駿河守元春・同民部少輔元長・同民部大輔經言・小早川左衛門佐隆景、相共に三萬餘騎を率ゐて、天正七年二月七日美作國へ發向し、同九日同國小寺畑の城へ押寄せらるれば、城兵則時城を明けて、大寺畑へ引籠みたり。同十六日大寺畑を取り圍まる。當城には直家が壻江原兵庫籠りたるに、羽柴筑前守より多く兵を加勢したり。寄手仕寄を付けて攻めけるに、砥石山の城兵是を聞いて、攻めざるに明け退きけるを、吉川勢駈付けて數十人討取りたり。大寺畑には城中に野心の者有りて、寄手の楢崎彈正忠に相圖して、城中の固屋に火を懸くれば、楢崎一番に切岸へ詰寄せ、是を見て諸勢も續いて切岸へ付く。城兵稠しく防ぎけるが、終に叶はで、門外へ出でて落支度をするを、直家よりの加勢富山半右衛門制し留めて、皆城中へ入りけるを、吉川勢跡に附きて攻め寄せたり。城兵矢先を揃へて射出せば、寄手吉川勢今田玄蕃允春政〔頭書〕玄蕃今田勘左衛門祖父なり。を始め、手負多く出來て、朝枝源次郎〔頭書〕朝枝因幡が嫡子なり、松田九郎左衛門兄なり。討死したり。

三家篠吹城ヲ攻む

〔頭書〕市之允始小河内後稱二朝枝氏幡一
　源次郎於二寺□一討死（虫入）
　九郎左衛門（松田）
　又六於二津城一討死
　市右衛門（改二別所一）
　九郎右衛門（別所□□虫入）（改二朝枝一）

斯かれば、其日城乘叶はず、攻口を引退き、重ねて仕寄を附けて、透間なく攻め寄せたれば、城兵防ぐ術盡きて、江原兵庫城を明けて、篠吹の城へ引きつぼみたり。此城には、市三郎兵衛・芦田五郎太郎・市五郎兵衛、初より籠り居たり。三家篠吹へ陣を寄せらるれば、市・芦田並に江原詫言して、城を明渡す。又濱口某が籠りたる岩屋の城へは、元春の勢馳向つて攻崩し、城兵明退きたり。其後三家宮山の城を取圍まる。此時物見として、小早川衆城の尾頭へ取り登り、頓て引取る處に、城より跡を附送り、兒玉平右衛門を討取りたり。又寄手山下の風呂を燒きけるに、城中より足輕廿人計り忍出で、風呂燒きの夫兵共を討取りたり。此騷動を聞き付け、吉川勢江田新左衛門・山縣小七郎〔頭書〕□□原（虫入）右衛門長茂事・同二郎左衛門〔頭書〕越前弟若狭守事歟〔若狭子にして四兵衛父也〕を打合ひけるが、城兵叶はず引退く。江田已下勝に乘つて、是を追詰むる處に、竹土居の内より敵又廿人程駈出で、右の人數に相加はり、槍を以て地打して名乘りかくる。吉川元長此所へ出でられ、あれ討取れと下知せらるれば、各〻彌〻進み懸りて、終に敵を城中へ追込みたり。吉川衆今田孫十郎春佳〔頭書〕松岡安右衛門の事なり。・井下左馬允・森脇彌五郎〔頭書〕越後の事か、又越後が子源右衛門にても有るべし。考ふべし。・小笠原次郎左衛門疵を被り、同朋眞阿彌〔頭書〕一説に少阿彌討死す。其後城兵七百計りにて突いて出でたるに、元長千餘騎を率ゐて、駈合せ追討せらるれば、敵忽ち城中へ逃げ入りたり。頓て此城も明渡して、備前の國へ引退く。之に依りて三家の人々は、境目城々の仕置して、四月初旬藝州へ歸陣せらる。

一〇　備中忍山城合戰の事

美作國外形の城に、毛利家より吉田肥前守・森脇市郎右衛門春方、祝山の城には鹽屋〔冶カ〕豐後守父子・三須兵部少輔隆經を入置かれたる處に、宇喜多和泉守直家、二萬餘の勢を以て兩城を取圍み、猶又荒神山を要害に構へ、花房助兵衛を籠置く由、注進有るに依りて、吉川元春父子三人、八千餘騎を從へて、同年八月二日、藝州新庄を立ちて、

毛利三家忍山城を取圍む

作州へ赴かるゝ處に、宇喜多美作を引拂ひ、備前へ歸陣せし由、中途へ告げ來るに依りて、元春父子も其れより軍を班されたり。斯くて宇喜多直家は作州に於て、味方の城多く毛利家の爲に沒落せし事を無念に思ひ、備中國忍山に一城を構へ、宇喜多信濃守・岡强介を籠置き、毛利家の領内へ働かんとす。此由注進あるに依りて、毛利輝元・吉川元春父子四人・小早川隆景二萬餘騎を引率して、同十一月備中の國へ發向し、同月十五日忍山の城を取圍まる。元春先づ城の樣體を窺ふべしとて、民部大輔經言を差向けらるゝ處に、宇喜多信濃守・岡强介千餘騎を帥ゐて城中より打出でたり。經言見て、是ぞ願ふ處なりとて、鐵炮一頻り打たせ、其儘進んで馬を駈入れらるれば、宇喜多・岡是を見て、口黄の若武者討取るに易しと、經言を目懸けて駈合す。經言軍士に下知して、宇喜多・岡を討取らんと、勇み進んで突懸からる。父元春、先手勝利を謬らば、懸つて敵を一捲りにせんと、後より加勢せらるれば、城兵終に突崩され、營中に逃入りたり。又其夜、經言の家人志茂清左衛門と云ふ者を忍びに遣して、城中の固屋に火を付くる。折節風烈しく、大に燒上れば、是を見て吉川勢

忍山城沒落す

毛利輝元賀茂城を攻む

一番に攻入り、總勢も一同に陣を寄せ攻懸る。此時吉川經言一番に乘入れられたり。城主信濃守・强介を始め討死して、諸手へ首數五百三級討取りて、則ち當城沒落す。其後三家は、國中の仕置を命令して、藝州へ歸陣せられたり。

一一　備中國賀茂城軍の事

備中國賀茂城主伊賀左衛門進は、宇喜多直家の老臣明石飛驒守が壻にして、宇喜多へ一味の者なるに依りて、毛利輝元より三浦兵庫・兒玉小次郎・粟屋與十郎三人に、岡宗左衛門・三輪加賀守・祈屋又右衛門・櫻井與次郎・山縣三郎兵衛〔頭書〕始彌三郎とす。山縣五右衛門の曾祖父なり。父は白原三郎左衛門就政と云ふ。是山縣後の越後の事なり。元政は井下左馬允・山縣源右衛門入道長茂等の兄なり。〔三イ〕井上源右衛門等、其外人數を添へて差向けられ、天正八年四月十四日、彼城の近邊へ相働く處に、城よりも人數を出し、暫く防戰す。然るに寄手素より少勢なる故、頓て城下を引拂ふ處に、城兵頻りに附送りて、寄手難儀に及びければ、粟屋與十郎・山縣三郎兵衛・井上源右衛門返合せ討死すれば、城兵彌ゝ力を得て稠しく競懸る處に、兒玉小次郎槍を携へ少し高き處に

立上つて、毛利家の侍兒玉小次郎と名乗り、百騎計りにて待懸けたれば、敵近付くを得ず、頓て引返したり。

元春伯州發向

元春因州發向

一二　吉川元春伯州因州發向附山名豐國鳥取城退去の事

天正八年伯州羽衣石の城主南條伯耆守元次・同國岩倉の城主小鴨左衞門尉元清、毛利家を背くに依りて、吉川駿河守元春・同治部少輔元長・同民部大輔經言父子三人、其勢八千餘騎を率ゐて、八月雲州へ發向し、富田の城に打入り、伯州表の樣子聞合せしに、同月九日、富田を打出で伯州妻波に陣取られ、軍士に命じて、南條・小鴨が人數を入置きける諸所の砦を攻崩し、在々放火して、元續・元清度々打出でたるに、戰毎に味方勝利を得、數百人を切捨て、其後元春父子、羽衣石岩倉兩城には押へを置き、因州へ赴き、山名大藏大輔豐國〔頭書〕入道して禪高と稱す。が臣森下出羽入道道與、中村對馬守が方へ使を以て、豐國事隱謀の企有る由風聞す。先年已來度々の表裏、侍の本意を

山名豐國播州へ落去

失へり。さりながら森下・中村兩人の儀は、元春一味の志變らざる由相聞え、誠に神妙の至りなり。彌〻其分に於ては、豐國を追出すべきの由言送られたり。山名豐國は、鳥取の城に楯籠り、妻子等は本城に殘し置きたる處に。此向羽柴秀吉勢を帥ゐて、山名が本城を取圍まるれば、豐國詮方なく覺えて、家老森下入道道與・中村對馬守等を近付けて、秀吉へ降參すべき旨相談せられければ、森下・中村一同に、先年尼子富田籠城の砌より、豐國度々表裏を以て敵となり、又味方に降られたる事、世の嘲哢口惜しき事是に過ぎず。然るに今又秀吉に降らんとの御結構、我等に於ては曾て同心相成らざる由、諫言しければ、豐國も其理の當りたる處を恥ぢて、兎角の事なくして居たる處に、秀吉豐國が息女を取りて機物木に上らせ、鳥取の麓に駐並べて、豐國子供の命も惜しく、因幡一國も望むならば、味方に降るべき旨呼ばはらせければ、豐國其分野を見るに忍びず、密に使を以て、秀吉の味方に屬すべき旨言送りて、上方內通の聞あるに依りて、元春より右の如く使を立てられたり。之れに依りて豐國籠城相成らず、近習の者二十人計り引具して、森下・中村にも知らせず、鳥取を出

元春父子茶臼山に陣す

でて播州姫路へ上りたり。森下・中村は、豐國鳥取の城〔頭書〕九月廿一日、元春此方へ□付け城番等差籠めらる云々。を立退きたる由、元春の方へ注進し、兩人の者は前々の如く、少しも別心なく候間、何れにても大將一人差籠めらるゝに於ては、國中を切隨へて御馳走仕るべしと、申越したり。之に依りて同國若佐鬼が城に籠め置かれたる、牛尾大藏左衞門尉を鳥取に加勢せしめ、上方勢寄せ來るに於ては、堅固に相守るべき旨、森下・中村に言聞かせ、元春父子は其れより伯州八橋に到り、南條伯耆守が家人一條市助が籠居る由良の城を、急に攻めらるれば、一條頻りに詫言して城を明退き、羽衣石へ逃入りたり。〔頭書〕九月廿八日由良城落去云々。之に依りて由良の城へは元春下知して、杉原播磨守より木梨中務を入置き、それより元春父子、羽衣石の麓稻刈をせんとて、茶臼山へ陣を寄せらる。〔頭書〕或說に、八幡に於て有地右近・□〔虫入〕左京討死すと言へり。此說非か。

一三　伯州長郷田合戰の事

吉川元春父子三人、茶臼山を本陣として、杉原播磨守盛重・同彌八郎元盛・同又次郎景

元春父子長郷田を攻む

盛、並に盛重が相備宍道五郎兵衞尉正儀・河口刑部少輔久氏等、其勢二千五百餘騎にて、長郷田表へ出張して、民家を放火しける處に、元續が一族南條備前守が嫡子南條九郎左衞門、二千餘騎〔頭書〕御舊記には、南條九郎左衞門二千五六百人とこれあり。にて打出で、又因州よりの加勢武田源三郎五百餘騎にて續きたり。此内南條伯耆守、元春發向の由を聞きて、家人共を近付け評議しけるは、敵は定めて一二萬の多勢ならん、味方は因州よりの加勢を合せても、三千四五百には過ぎまじければ、打出で戰ふに於ては、敵に利を付くべし。唯城中に引籠り、城を落されぬを勝にして、信長の後詰を待受け、全く勝利を得べしと言ひければ、諸士皆此議に同じける處に、南條九郎左衞門進み出で言ひけるは、元春なればとてさのみ恐るべきに非ず。今度も定めて杉原盛重先陣たるべし。彼血氣剛く、後陣をも待たず長瀨河を渡りて懸るべし。其處を渡口に馳向ひ、河水へ追入れて討取るべし。先陣破るゝに於ては、元春機を失ひて敗軍せらるべし。若し又元春旗本にて、二の合戰を遂げられば、是こそ庶幾する處なる間、無二の合戰をすべし。又杉原猛勢にして備堅固ならば、味方の勢を輕々と引入れ、山上に備

長瀨川合戰

ふべし。若し元春の陣を破る事を得ずば、杉原が一手を追拂ひて城中に引退き、城を固く守るべきなり。毛利家に對して逆意せる程にて、敵當城へ働くに一戰もせず、山下を放火せられ、城中に慄ひ居ると云ふことやある。今日は手痛き合戰をする處なり。同意の輩は押續かるべしと言ひて、其座を立ち、緋縅の鎧著、月毛の馬に打乘りて、郎黨百餘人を從へて駈出づれば、南條家の侍我も〳〵と相從うたり。斯くて杉原父子三人竝に宍道・河口が手の者共、長瀨川を隔て鐵炮にて迫合ひ、中にも宍道が郎黨寺本市允、眞先に進みて散々に射たれば、敵はや色めきたり。盛重豫ねて川を渡して戰ふべし。敵半途を討つ事も有るべしとて、勢を三手に分ちて渡すべしと定め置きたるが、敵の色めくを見て、盛重馬上に團扇を振ひて、敵は早引くと見えたり。河を渡せと下知すれば、上の瀨は吉田肥前守・河口刑部少輔・三刀屋が者共少々相加はり、一度に打入りて渡したり。是を見て南條勢、引色に成りけるを、九郎左衞門馬を乘り廻し、敵は小勢にて而も後陣續かざるなり。懸れ〳〵と下知すと雖も、敵上中下の三所より渡しける間、終に叶はず引退きたり。伯耆守元續

廣瀨若狹守討死

は廣瀨若狹守を呼びて、九郎左衞門無二の働して、討死することもあるべし。汝行きて制せよとて遣しけるが、味方悉く引きけるを見て、口惜しくや思ひけん、唯一人馬上にて、引く味方を制しけれども、味方耳にも聞入れざれば、廣瀨若狹守と名乘りて、踏止りて控へたる處に、吉川衆大草甚右衞門走り懸り、廣瀨が高股を切落し、馬より落つると雖も、彼れ大剛の者なる故、伏しながら太刀を拔いて、大草が膝口をしたゝか薙ぎたり。甚右衞門薙倒されて起きんとする隙に、杉原家人安原民部、若狹が首を討取りたり。先陣既に引きける故、後陣の武田も山下より引退きたり。南條が者河に添ひて崕路へ逃懸れば、此所彼所に追詰められて討たれたり。南條九郎左衞門は、能き切所にて取つて返し、一戰すべしと思ひ引退きけるが、亂立ちたる味方なれば、制止にかゝはらざる故、今は力なく、討死せばやと思ひて、羽衣石の麓柵を結ひたる所にて引返したるを、杉原が郎黨久津摩市允渡合せて討取りたり。吉川衆小坂次郎兵衞〔頭書〕森脇次郎兵衞が事なり。敵を追駈けしが、敵一人返合せ、槍にて突懸りけるを、小坂刀にて暫し戰ひ、終に切伏せ首を取りたり。

伯州長郷田合戰の事

〔頭書〕或説に吉川勢井下新右衞門・小谷四郎次郎・山崎次郎右衞門討死。

同勢境七郎左衞門・朝枝新兵衞・二宮七郎兵衞・三刀屋が郎黨羽倉右吉已下、能き首を討取る。其他杉原が家人菊地肥前・進孫次郎・佐田彦四郎・同小鼠已下、宍道が家人寺本市允等分捕す。討取る首數都て百五十餘なり。爰に杉原が内菊地肥前守が嫡子、同左近十三歳より數箇度分捕して、高名を顯はすと雖も、父肥前守首取つて與へつらんと言ひて、人さのみ信せず。左近是を口惜しと思ひければ、今度は父とは伴はず、佐田・小鼠と一所に在りて、南條が郎黨一條新五郎と渡合せて、首取つて家人に持たせて歸りけるが、日來口惡き安原民部・入江大藏兩人連れて、盛重が本陣へ行くに途にて行逢ひたり。安原、菊地に、今日は分捕せられずやと詞を掛くれば、左近右の首を兩人に見せて、一條新五郎と名乘りたるを切伏せ首を取りたり。證人は佐田・小鼠なり。父に附廻らねども分捕せしと言ひたり。其後元春、羽衣石の近郷稻刈をさせられ、軍士に命じて羽衣石の城に三箇所對城を普請し、先づ高野宮に山田出雲守、松崎に小森和泉守、條山には岡本大藏・田根兵部少輔を籠め、又岩

菊池左近が高名

倉の城にも二箇所向城を築きて、宇津茸に二宮木工助・羽根兵庫助・牛尾大炊助・北谷刑部少輔、嶋田には鈴川次郎左衞門・正壽院利安・小鴨四郎次郎等を籠置きて、元春父子は藝州へ歸陣せられたり。

一四　因州鹿野城没落井籠城者誅戮の事

因幡の國の押として、同國鹿野の城に毛利輝元より、三吉三郎左衞門竝に進藤豐後守、吉川家より、森脇内藏丞・佐々木善兵衞・杉原播磨守が家老横山に人數差添へ籠置かる。山名豐國が證人竝に彼の家老中の人質をも此城に置かれたる處に、山名豐國今歳より信長へ内通しけるに依つて、當夏羽柴筑前守五萬餘騎を率ゐて、鹿野の城へ押寄せ仕寄を付けて、稠しく取圍み城中難儀するの時、山名よりの人質を異議なく返すに於ては、三吉を始め悉く一命を助け、毛利家へ送り返すべき旨言入れられければ、三吉以下終に其扱に任せ、彼の人質共を返して下城したり。是に依つて、此者共藝州へ歸りたる上、三吉三郎左衞門已下盡く死刑に行はれたり。

宇津茸合戰

一五　宇津茸合戰の事

南條伯耆守元續・小鴨左衞門尉元清は、元春父子歸陣の隙を得て、同年十二月廿三日、三千餘騎にて岩倉の對城宇津茸〔打吹カ〕へ押寄せ、太鼓を打立て采配を振つて、味方を進め、軍兵えい〳〵聲にて攻め寄せたり。城中より羽根兵庫助・牛尾大炊助・北谷刑部少輔、竝に元春よりの檢使二宮木工助・富永等、散々に射立て突出づれば、敵堪へず引退く。牛尾大炊助・宇山善四郎跡を附け送る處に、南條が家人一條猪助取つて返して、牛尾と散々に突合ふ處に、宇山善四郎馳寄りて、一條が胸板をしたゝかに突きければ、下なる河へ落入りたり。溺死すべしと見る處に、彼水練の達者にて、頓て游ぎ歸りて兩人に向ひ、先に勝負を付けざる事、殘念に思ひ、又來りたりと言ひて、牛尾・宇山に渡合せ、暫く戰ひけるが、終に一條兩人に討たれたり。翌廿四日、宇津茸の城には、南條昨日の鬱憤を散せん爲め、寄せ來る事も有るべしとて、山下に柵を結せけるが、南條が組頭赤木兵太夫が嫡子大力と云ふ者責馬しけるが、口强くして駈出し、彼柵の木結ひける所へ來りけるを、數人寄りて馬より引下し、殺したり。

一六　岩倉合戰の事

伯州岩倉の向城島田には、鈴川・正壽院・小鴨が外に、吉川元春の家老今田中務少輔經忠を始め、其外吉川衆歴々籠り居たる處に、天正九年正月、小鴨元清が手の者共、島田の城へ度々足輕を懸けけるを、城より鈴川次郎左衞門・小鴨四郎次郎・北谷の正壽院など打出で、毎度追立てたり。

〔頭書〕或說に、此時元春・元長は歸陣し給ひ、經言に今田中務・同玄蕃允其外歴々を附け置かれ、岩倉に差置かれしとなり。二月廿二日の迫合にも、經言出陣の由言ひ傳へたり。此時元春公より、笠井宗作への御書の趣を以て見れば、實說なるべきか。

小鴨元清又岩倉より大勢にて下し合せ戰鬪す。是に依りて嶋田の城兵待伏をして、

岩倉合戰

元清打出づる處を討取るべしと謀つて、同二月廿二日、今田中務少輔經忠伏兵の大將として、伊志源次郎・市川雅樂允・粟屋藤右衞門〔頭書〕粟屋始は源藏と云ふ、同參河守孫、父は源三と云ふ。などを先として四百餘人、岩倉の麓大宮と云ふ社の邊に伏を置き、あたりの山上に森脇市正を置き、敵伏勢の上に乘らば、相圖に貝を吹くべしと定め、鈴川・小鴨・正壽等足輕を出し敵を招き、社壇の鼓など打ちて呼引けば、岩倉の城より早雄の者共二百餘人下し懸り、追立て突立て伏兵の眞中へ馳來る。森脇市正時分能しと思ひ、貝を吹くといへども鳴らず。彼是立替りて吹けども終に音出でざれば、詮方なく扇を擧げて招きたり。

〔頭書〕此市川雅樂允事、伊豫守元友の事と云々。併爰に雅樂允を出すこと不審。此時雅樂允は執□（虫）在番の□（虫）此書に見えたり。但し爰に出でたるは市川一家の中別人か、又は爰に出でたるは雅樂允にして、鳥取在番市川□□□（虫入）はなきか。

〔同〕或書に、岩倉の此時の迫合に、吉川經言頻りに駈けらるべきとせられけるを、今田玄蕃允矢鐵炮稠しゝとて強て引止め、土手より下へ引落したるに、經言無理に駈出られたるとあり。本文には、此時は元春父子三人共に歸陣の由見えたり。審かならず。此時笠井與十郎親宗作へ元春樣よりの御書に、經言供奉し隨分相戰ひ、剩へ討死候と有り。然れば經言公は御在陣なるべし。且つ本文にも、元春父子は藝州へ歸陣とばかり有りて、父子三人とはこれなく、本文にもかきと經言一同に歸陣とは見えず。

今田中務弓勢の

伏兵は相圖の貝を待ちけれども鳴らず、敵は間近く寄來れば、何を期せんとて伏を起し切つてかゝる。相圖遲々したる故、起し合ふ拍子些か後れ、敵深く寄せ來り相戰ふ。然れども小勢なる故、終に悐へず、我先にと逃げ歸る。伏兵勝に乘じて、岩倉の麓まで追駈けたり。斯る處に小鴨元清物見を出したるに、かしこの森の中に伏兵ありと告げければ、元清究竟の兵五百計り、弓・鐵炮を前に立て打つて出でけるが、追手に丁と行逢ひたり。元清弓鐵炮を透間なく射懸けたるに、伏兵の者は敵を追うて驅來りし故、鐵炮一挺をなくして多く疵を蒙りたり。今田中務少輔無雙の精兵なれば、大弓に大鴈俣取りて番ひ、敵數多射伏せたるが、矢種漸く盡きて、今

は唯矢三筋計り殘りけるを、一つ取りて能引き放つ。其箭石に中りて、石火活と出で、矢の箆碎けて飛歸る。此時敵一人石の陰に隱れて、時々頭を上げて見る者あり。中務是を見て、次の矢を取りて番ひ、鏃を向けければ、其儘右の小土手の陰に引込みたり。然れども甲の立物と覺しき物少し見えたれば、經忠適れ小土手一つを射貫かんものと思ひ、右の立物をしるべに少し下げて放ちたれば、鎧と共に肩先を手深く射切りたり。今田が側に控へたる粟屋市允、〔頭書〕粟屋宗仲の事なり。後信濃。勇剛の者なるが、物馴れたる若者にて、今田中務仕りたると覺え候と、高聲に名乘りたり。此弓精に敵臆して、續いて來る者右の手負を肩にかけ引退き、暫くは進む事を得ず。此者を後に聞けば、細田源允と云ふ者にて、今田が矢種盡きたるを見及び、あの矢を放たば走り懸り、討取るべきと思ひ、隱れ居たると聞えし。中務又一筋の箭をさしはげ、弓弦引起さんとする處を、敵雨の降る如く射る箭、一筋經忠が頸に中れば、其矢を拔きて捨て、郎黨に扶けられて引退き、總勢も一同に引拂へば、敵勝に乘りて追來る。粟屋藤右衞門・同弟朝枝宗左衞門・〔頭書〕始めは與三太郎といひ、朝板周防守養子なり。同隱岐守父。粟屋新三郎・笠井與十郎〔頭書〕一說作之丞といふ云々。返合せ、敵數多く切伏せ討死す。

〔頭書〕此時粟屋市允中務が側に居て、敵方より射掛けたる矢を拾ひ集め、經忠に與ふると雖も、何れも矢束短くて役に立たず。今田彌、矢種盡きたりと云々。

〔同〕此時鳥羽權之允と云ふ者、中務が矢に中りて死す。之に依りて□（虫入）の細田中務を心掛けし由、後南條家の子孫物語なり。

〔同〕關西鬪記には、此時節天正八年とあり、非なり。天正九年の由、分明なり。

今月廿二日、至岩倉表待臥打出候處、敵下合、數刻及防戰候。然る處其方子與十郎事不慮を致候。中々不及是非次第候。世上雖有之習候、勝氣之段難盡紙筆候。下略。宗作へ、元長樣より下されたる御書の由、又元春樣よりとも言へり。

敵猶襲ひ懸れば、森脇大藏・佐々木豐前守・内藤平左衞門・市川など取つて返し、稠しく防戰して、敵數人討取りたり。爰に安部太郎右衞門・尾崎孫左衞門と名乘り、槍を以て付送りけるに、吉川衆粟屋市允は尾崎、市川が家人長峰彦兵衞は太郎右衞

門に渡合せ、粟屋・長峰兩人共刀にて戰ひ、互に比類なき働なり。其後安部・尾崎は吉川へ出でて仕へしなり。

〔頭書〕粟屋市之允、後信濃と言ひ、入道して宗忠と云ふ。陰德太平記・關西鬪記等には、此時十八歳とあり。宗忠事、承應三年百六歳にて死するの由、然れば岩倉合戰、天正九年は三十三歳なり。天文十八丁酉誕生なり。又一說に、百三歳にて死すと言へり。百三歳にて承應三年に死する時は、天文廿一年の誕生歟。永祿十二年、九州立花御退陣の時、若松蘆屋の渡に於て、船の心遣として差遣されたる由、承應三年百三歳にて死する時は、永祿十二年は十八歳なり。百六歳にて死する時は、此時廿一歳なり。

但し岩倉迫合の時十八歳と云ふは、立花御退陣の時の事にては無きか。然らば死齡百三歳といふ說正儀にても有るべし。承應三年死去の事は、彼家の過去帳に慥にこれある趣なり。百三歳にて死すとなれば、此時天正九年岩倉迫合の頃は、三十歳歟。元春公此時、中務に鞍置馬を給ひて軍功を賞し給ふ。之に依つて

將軍義昭の內書

眞木島昭光の書翰

中務御斷には、粟屋市之允事一所に於て相働き、忠志淺からざる者に候間、此馬我等より彼者へ附與仕り度き旨申上げ、則ち與へたる由、其時の馬具今に彼家に傳はりてこれ有る由、子孫の傳語るなり。又彼家に於て年齡の事を尋問せしに、世上には說々之れ有りと雖も、實は百三歳にて相果てたる由、決定の答なり。扨岩倉勢、是より引返し打入りたる故、伏兵の者も異議なく陣々へ歸りたり。去年元春因・伯在陣の中、公方義昭御內書を成さる。其文に曰く、

其表在陣、別而抽粉骨之由、感悅之至候。彌〻無油斷可被申付事肝要候。爲其差越一色馬一匹鹿毛遣之候。猶昭光可申也。

十月十八日　義昭御判

吉川駿河守殿

元春因州表の趣言上ありける故、其頃眞木嶋玄蕃頭より返狀あり。其文に曰く、

就因幡表之儀御注進之趣、令披露候。抑以御調略、去廿一日鳥取之城此方へ被引付、番衆等手堅被差籠、並由良之要害、去廿八日落去之由、方々御大利並御方

以御覺悟、如此段無比類儀、御感非大方候。近年之御吉事共、公私大慶不過之候。南條家城、是又近日可有一途之旨、肝要被思召候。彌注進待被思召候。北口之儀、早速被切返儀、誠御手柄不被及是非旨上意候。尤御面目之至候。其節御勝利之趣、其聞候條、爲御感被成御内書候。定可爲參著候。其口御勝手趣、於京都事々敷申成之由候。敵味方之覺珍重迄候。來春織田人數打下由風聞候間、其以前堺目至諸城、御人數丈夫被差籠之人質等被取堅、向後尙以無異議樣可被申付事肝心旨候。遠路之所御注進之段、御祝著之通相心得、可申入之旨被仰出候。恐々謹言。

十月廿二日　　眞木嶋玄蕃頭昭光

吉川騎河守殿

一七　吉川式部少輔鳥取籠城の事

因州鳥取の城には、森下・中村が請に任せて、去年より牛尾大藏左衞門を籠め置かるゝ處に、山名豐國が臣磯邊の某が籠り居る、諸寄の城を攻むべき爲め、牛尾・森下・中村相共に一千餘騎にて彼城へ押寄せ、切岸迄付く處に、城中にも究竟の兵數多有りて、弓・鐵炮透間なく射出し、稠しく防ぎたり。牛尾大藏左衞門無二に懸りて、砦の曲輪一つ乘破り、二の曲輪へ乘入らんとする處にて膝口を射られ、足立たざれば力無く引退きたり。其後彼疵痛みける故、湯治の爲め元春に申斷りて、雲州牛尾へ歸りたり。之に依つて其代りとして、市川雅樂允を鳥取へ籠めらるゝ處に、羽柴筑前守商賣船數艘、若狹より因州へ差下して、米麥の類を日來より一倍二倍も高直にして、多く買はせらるれば、鳥取邊の者敵方の謀とは知らず、蓄へ置きける糧米ども迄盡く賣りたり。其後天正九年二月廿二日、森下出羽入道・中村對馬守より、元春へ申越しけるは、當城去年より加勢を差籠めらるゝと雖も、願くは御同姓の老臣一人差籠めらるゝに於ては、大將として防戰すべき旨懇望す。之に依つて元春家臣吉川式部少輔經家に、鳥取籠城すべき旨命ぜられて、森脇内藏大夫・朝枝加賀守・山縣筑後守・野田左衞門尉・武永四郎兵衞・井下新兵衞・井尻又右衞門・高助左衞門・長和

秀吉鳥取の糧米を買取る

吉川式部少輔經家鳥取城に入る

三郎右衞門・大草玄蕃・長岡信濃・小野太郎右衞門・野村藤三・同九郎左衞門・豐島新右衞門・山縣次郎兵衞等を差添へられ、都合四百餘騎にて、吉川式部少輔藝州を立ちて、同年三月十八日、鳥取の城に入れば、市川雅樂允は城を出でて、藝州へ下りたり。其外方角の國侍よりも、人數を出して鳥取の城に差籠る。杉原播磨守より横山彌太郎・南方半介、古志因幡守より古志藏人、宍道五郎兵衞尉より宍道彈正、有地右近大夫より有地左京を籠め置きたり。又鳥取より一里計り去りて、丸山といふ端城あり。此城へ山縣九左衞門或左京共を差置き、奈佐日本助・鹽冶周防守・佐々木三郎左衞門・其近習衆・小石見衆・船手・中間、都合五百餘人籠城す。吉川式部少輔鳥取の城へ入りて見るに、糧乏しく、長々の籠城成し難く覺えければ、則ち元春へ飛脚を以て、當城兵糧乏しく、籠る處の軍士・國衆の加勢を合せ、彼此八百餘人、雜人男女四千に餘り候へば、纔に二三箇月の養ひも續き難く、又森下・中村より、似せ山伏を京都に附け置きたるが、頃日立歸りて京都の樣子を語り候に、信長より羽柴筑前守に、鳥取を取圍むべき旨下知せらるゝ、さ有るに於ては、毛利家より後詰有るべ

經家鳥取より元春に兵糧の援を乞ふ

元春鳥取に兵糧を送る

き間、秀吉無勢にては危かるべし。然れば人數一萬餘騎加勢すべき旨、信長申渡さるゝ由なり。然りと雖も當城名城にて、人數歷々籠城候へば、上方勢如何程多勢にて寄せ來り候共、兵糧さへ續きなば少しも御氣遣有るまじ。急度兵糧差籠めらるべしと注進す。元春杉原播磨守に命じて、少々兵糧を差籠めらるゝと雖も、中々一月の糧にも不足なれば、重ねて大船四艘に米穀を積み、田中宗右衞門・豐島源次郎・有間又八・白井藤次郎・同新左衞門・手島藤次郎等乘り廻りける處に、敵方の警固船百艘計り、夜半に乘懸け攻め戰ふ。藝州船は小勢にて、然も不意なる事にて、散々に戰ひしが、終には兵糧船を敵に奪はるべく思ひければ、船を海へ乘沈めたり。此時多くは討死して、田中・豐島・有間・手島・白井藤次郎此五人は、切拔けて歸りたり。

一八　鳥取落城の事附吉川式部少輔切腹の事

同年羽柴筑前守秀吉、因州表出張有るべきの通り、境目より告げ來るに依つて、吉川式部少輔竝に森下・中村より、元春へ此由注進す。其頃元春は未だ出陣なく、嫡子

元長伯州八橋の城に居られけるが、鳥取へ加勢として、今田孫十郎春佳〔頭書〕松岡安右衛門なり、法體の後宗興といふ。に三木彦四郎・井村與十郎を差添へ、扨亦先様に於ては、井下新兵衛・武永四郎兵衛・儀孫十郎一所にと有る事にて差籠めらる。然る處に、孫十郎が兄今田中務少輔、誰にても今一兩人差添へ給はるべき旨願ふに依りて、山縣源右衛門〔頭書〕長茂の事なり。事、路次計り付けらるべし。孫十郎鳥取に入りて、早速罷下るべき旨命せられて、差籠められたり。然れども山縣も式部少輔抑留して、鳥取に籠居たり。又丸山へは境與三左衛門を差上げられたり。

〔頭書〕境事、丸山城壁不堅固なる由に付き、彼城普請見分として、差上げられたりと言へり。

斯くて天正九年六月下旬、羽柴筑前守秀吉因・但境に到りて出馬せられ、同七月五日、羽柴小市郎後美濃守大將として、藤堂與右衛門〔頭書〕則佐渡守高虎の事なり。已下一萬餘騎、丸山の東の方吹上の濱へ打登り、丸山を見合せて頓て打入りける。是を見て丸山の城より、瀧三左衛門足輕を附け、遠矢射懸けけれども、敵取合はずして退きたり。同七日

秀吉鳥取丸山の兩城を圍む

或十二日羽柴秀吉、六萬餘騎を率ゐて出張し、勢を分つて鳥取・丸山兩城を取圍む。秀吉は鳥取の東北摩尼帝釋山を本陣とし、田間の流尾に堀尾茂介・一柳市介、西表は淺野彌兵衛・中村孫平次・小寺官兵衛・蜂須賀彦右衛門・神子田〔半ノ〕判左衛門・山名大藏大輔・木下備中守・木村隼人・加藤作内已下、袋川を前に當てゝ備へ、東表は信長よりの援兵一萬餘騎、丸山の間雁金山には、織田於萬・宮部善乗坊、宇喜多よりの加勢明石飛驒守・長船紀伊守・福田五郎左衛門・楢原監物・宇喜多七郎兵衛・岡越前守已下八千餘騎、同じく續いて陣を取る。西口は千代川有りて、此大河海續きにて、因州の船入なる故、渡口秋里村に城を構へ、杉原七郎左衛門に一萬の勢を添へて入置かる。海邊は荒木平太夫、三百餘艘の警固船を掛並べて、透間なく陣取りたり。扨丸山の東口は、羽柴小市郎並に增尾隱岐守・山名但馬守・滋田某、北の山には、垣屋駿河守・磯邊・秦・龜井・武田蓑部已下陣を屯して、役所々々に芝土手を築き、柵二重三重に結廻し、堀を鑿ち塀を付け、矢間繁く明けて、さしも堅固の陣取なり。城中より足輕を出して敵を招くと雖も、秀吉兼ねての掟にて、一人も出合はず。只陣中より鐵炮を

元春鳥取城に兵糧を入れんとして能はず

打出すばかりなり。城と敵陣との間には、袋川ありて渡り難ければ、城兵も寄手の陣へ近付くことを得ず。斯くて城中兵糧次第に盡きれば、藝州へ急を告ぐべしとて、水練を選んで袋・千代川を潛らせんとせしが、寄手豫ねて川中にて亂杙を打ち、繩網を張り、所々に鳴子を附けて置きける間、水を潛る者五人迄敵陣へ搦捕られけり。吉川元春は、秀吉出張の事は未だ聞かれずと雖も、鳥取兵糧盡きん事を計りて、有地右近大夫に兵糧を入るべき旨下知せられ、檢使の爲め新見左衞門尉春信（倍カ）〔頭書〕今田以云事也。今田忠左衞門父備中親見杜在城に依りて、新見と稱す。を差添へられ、兩人大崎迄打出づる處に、敵稠しく陣取りたる故、輙く入るゝ事を得ず。糧米を敵陣近く運び寄せ、透間を窺ふと雖も、敵陣構嚴しければ、有地・新見、城へ入るべき術なく、纔三十餘町を隔て兩三日逗留して、空しく本の道へ歸りたり。かゝれば城中糧次第に盡きて、雜人共城の尾崎へ出でて、草木の葉を摘みける處に、秀吉の本陣より敵馳付け、此者共を少々討取りたり。其翌日城兵因州の住人、尾崎の某待伏せをして待つ處に、其日も亦寄手彼雜人共を討取るべしとて、尾上に登り來るを尾崎追付きて、一人討取れば、其後は

丸山城合戰

敵來ることなし。斯くて寄手猛勢なりと雖も、鳥取・丸山兩城、共に堅固に抱へ、輙く落つべしとも見えざれば、丸山の寄手羽柴小市郎、藤堂與右衞門に方術を以て扱を入れ、一命を助くべき間、城を明渡すべしと言ひて、敵の心を引き見よと言はれければ、藤堂頓て阿字戒源太兵衞と云ふ者を使として、丸山の城へ、當城異議なく明渡されば、一命を助け伯州迄送屆くべしと言はせたり。吉川衆境與三右衞門・森脇次郎兵衞〔頭書〕始め小坂を名乘る。當城普請の爲に遣されけるが、此二人出向ひ、山縣九右衞門直に御返事申すべし。是へ入らるべしとて、阿字戒を請じければ、源太兵衞如何思ひけん、頻に辭退しけるを、兎角と言ひて呼入れ、門より内へ入ると側へつと寄り、境阿字戒を抱けば、森脇も續いて取付き、則ち搦めて、其後切岸へ引出し、藤堂殿へ御返事申さんと呼ばはれば、敵陣より人數多く出でたり。境與三右衞門高聲に、山縣九右衞門申候は、先刻の口上の趣具さに承りぬ。其報謝の爲め御使者一體分身せしめ、返し申すなりとて、頸を切岸より刎落したり。敵大に怒りて、其儀ならば一人も助けまじとて、ひた〳〵と陣を寄せたり。境與三右衞門敵陣へ忍びに出でけ

るが、敵二人連れて夜廻するを、境槍を以てしたゝかに突きければ、敵手を負うて早く引退きたり。後に是を聞けば、井合次郎兵衛尉・藤堂與右衛門兩人夜廻しけるが、藤堂境に突かれたると聞えし。斯くて數日を經る中、丸山の麓へ狼一匹走出でたり。寄手鐵炮を揃へて打ちければ、林の中へ逃入りたり。羽柴小市郎丸山へ使を以て、當山に狼一匹籠居り候。城中よりも人數出さるれば、是よりも出して、長陣の眠醒に是を狩取るべしと言はれければ、山縣九左衛門領掌して、則ち人數を出しけるが、狼寄手の陣へ逃行きけるを、彼方にて則ち射留めたり。羽柴彼狼を二つに斬り、首の方は我獲物と名付け、尾の方に美酒十樽・折十合添へて、城中へ贈らるれば、丸山よりも其答禮として、鐵炮の玉藥を折に積めて遣したり。斯くて鳥取の城には、數日の對陣に兵糧漸く盡き、諸卒以外に勞しければ、吉川式部少輔我一人自害して、諸勢の命を扶けんとて、秀吉の方へ使を以て、其事を乞はれければ、秀吉より堀尾茂介・一柳市介兩使にて、大將自害して諸卒を助けられんとの儀、誠に以て感賞に堪へず候。然れども森下出羽入道・中村對島守事、一度因・但・東伯耆迄靜謐

經家自害して諸卒の命を助けんとす

するの處に、兩人逆心の故を以て、再び亂を起し、其上譜代主人に對し不忠の科人に候間、彼等兩人に切腹させらるゝに於ては、其外は一命を助く可き間、式部少輔切腹の事、疑と無用の由申越され、又四五日有りて、丸山に籠居る鹽冶周防守・佐々木三郎左衛門・奈佐日本助此三人、近年北前に於て山賊海賊して、諸人を惱し罪科淺からず。藝州に抱へ置かれても、又上方に差置きても不可なり。然れば是も其に切腹有るべき旨言はれたり。

〔頭書〕一說、扱の儀秀吉より申掛けらるゝとなり。野田左衛門事、因州國方衆の壻たるに依りて、彼舅内證取組み、扱の使堀尾茂介・一柳市介城内よりは野田左衛門使仕ると云々。

式部少輔思ひけるは、鹽冶以下は强ひて斷るに及ばずと雖も、森下・中村兩人の儀は、主人豐國へ不義の段はさる事なれども、各人質を捨て藝州へ馳走し、其志淺からざる者共なれば、何とぞ助けて、元春の陣所へ送り遣し度き事なり。扨又某一身の儀は、時の加番たりと雖も、當城を預り、森下・中村を始め豐國家中の面々に至る

秀吉經家の自害を止む

まで、大將と稱して渇仰を請くるなれば、全く遁るべき所に非ずと、無二に覺悟を究め、堀尾茂介・一柳市介兩人の方へ、野田左衞門尉を以て森下・中村切腹の事、彼等兩人尤も豐國に對しては不忠に似たりと雖も、山名が利害を見て屢〻約を變ずるに比すれば、兩人が守る處又義有るに似たり。且つは當方に於て、志深き者に候間、我等切腹して、兎角彼兩人をば一命を助けらるべし。扨又丸山の鹽冶已下は、海賊を仕る程の不屑の者に候間、是亦助命せらるべし。我等切腹の事は、何等に就きても覺悟を究めたる由、言遣すと雖も、森下・中村以下助命の儀、秀吉曾て承引なく、終に右五人の者共切腹すべきに定まり、其上にても式部少輔切腹の事は、是非に無用の由申越されけれども、經家無二の覺悟の由言切りたり。又二三日有りて、秀吉申越されけるは、前代より諸國弓箭和睦の傳說數多之有り。式部少輔一百餘日の籠城を遂げられ、秀吉天下の軍代として對陣し、互に和睦を以て諸人相助け候事、自今以後御方瑕瑾にはなるまじ。其上重科の森下・中村同前に切腹に於ては、秀吉理不盡の樣に候間、式部少輔切腹の儀は、平に我等扱に任せられ存じ止まらるべしと、再三申越さるゝと雖も、經家曾て納得せず。兎角切腹に議定したる由言切りて、元春父子への暇乞の書狀自筆に認め、秀吉よりの檢使を待ちて、自害すべしと覺悟したり。然りと雖も、其後四五日もとかうの事もなかりけるが、秀吉より使を以て、式部少輔切腹の事、再三申理ると雖も納得なく、誠に家名を恥ぢられ、無二の覺悟神妙の至なり。數日の籠城兵糧盡き、牛馬人肉等を食せる事、天下に其隱れ有るまじ。然るに互に扱を以て、式部少輔を西國へ送返すに於ては、天下の弓矢强みなき處に、貴方覺悟を以て秀吉後代迄の擧なり。然れば筑前守陣處へ一人差越さるゝに於ては、諸勢相助くべき旨神文判形見せしむべし。其外一人にても諸子覺悟だてこれあるに於ては、見掛けたる籠城なる間、弓鐵炮を留立干に申附くべしと言越さる。之に依りて、頓て野田左衞門尉に小野太郎右衞門を差添へ、秀吉の陣所へ遣しければ、則ち誓紙を相調へ、兩人に渡し其後しるし天下へ上すべき間、介錯念を入れらるべしと言含められ、兩人を返されたり。經家誓詞を披見して、秀吉へ暇乞の一札、山縣源右衞門之を書す。其狀に曰く、

經家秀吉へ暇乞の一札

今度因州鳥取、京藝於御弓矢之衞引請、筑州及悴慢、諸人相助候事、乍恐後代之可爲名譽候。此等之趣、於天下御披露所仰候。恐惶謹言。

天正九年十月廿五日　　吉川式部少輔經家

羽柴筑前守殿

斯くて森下道與・中村對馬守、十月廿四日の夜、面々の役所に於て自害すれば、吉川式部少輔經家、同廿五日、秀吉よりの檢使堀尾茂介・一柳市介を待受け、廣間へ出で上座に具足唐櫃を置き、靑黃の袷を著し著座す。秀吉より饋られたる行器酒肴を竝置き、各〻に暇乞の盃せんとて諸卒を集め、今度籠城の中、晝夜の苦辛など懇に謝詞を述ぶ。經家家人小坂永左衞門・野田左衞門尉に向ひ、秀吉よりの檢死をも此方へ請じらるべしといへば、野田其儀向に檢死へ申すと雖も、達て辭退の由申すに依りて、各〻家人等迄召出し、靜間奏者にて暇乞の盃して、靜間之を納むる時、高聲に笑ひ二つ三つしたり。家人福光小三郎重恩の者なる故、豫ねて殉死と思定めければ、白越後帷子を著し、念珠を手に掛け、靜間が脇に著座したり。扨式部少輔

吉川經家以下諸士の自害

秀吉籠城の人々に仁政を施す

經家、唐櫃に腰を掛け脇指に中卷して、座中へ目を附け、高音に、稽古なき事に候へば、無調法に有るべき旨雜談して、同日寅の刻切腹すれば、介錯靜間其首を討落す。生年三十五歳と聞ゆ。福光小三郎式部少輔が前に居て、切腹を見終り。其脇指を胸に押當て、聲を掛けて乘懸り自害したり。若鶴甚右衞門も主人の死を見るに忍びず、續いて腹を切れば、竹崎市允福光・若鶴兩人が介錯す。其後式部少輔首をば首桶に入れ、秀吉への暇乞の一札を添へて、筑前守の陣所へ檢使を連れて、野田左衞門尉持參したり。檢使堀尾・一柳は、森下・中村が首竝に福光・若鶴が首をも、兩人が忠死を感じて取歸り、何れも秀吉の實檢に備へければ、秀吉も式部少輔義士なることを感歎して、泪を流されたりと聞えし。其後彼の首を京都へ上せられ、江州安土に於て、信長諸大名を集め實檢ありしとなり。又丸山の城も兵糧盡きて、奈佐日本助・鹽冶周防守・佐々木三郎左衞門自害して、城を明渡す。斯くて羽柴筑前守、廿五日の朝、一柳市介が陣所尾崎の矢倉に登られ、下城の者を見物して、久しく飢るたる者共なれば、粥を與へて然るべしと下知せられ、頗る仁政を行はる。袋川橋の

左右に檢使百人計り差出して、藝州よりの加番竝に森下・中村が妻子計り勘過して、其外因州國方の者共をば差留めて、己が儘に置かれたり。扨鳥取・丸山下城の者共をば、堀尾・一柳奉行して、杉原七郎左衞門尉先乘して、因州大崎迄送り、其より又河口刑部少輔久氏が居城、伯州泊へ打入りたり。然るに丸山の城總勢下城の時、境與三右衞門・森脇次郎兵衞方便りて、藤堂與右衞門を捕へて人質とせしが、敵よりも山縣九左衞門を質に取りたる故、泊に於て雙方の人質を取替へて歸りたり。

秀吉吉岡の城を攻む

一九　吉岡城攻の事

鳥取の西五三里の近處に、吉岡と云ふ城あり。城主吉岡入道質休・嫡子安藝守・二男右近父子三人、纔三百餘人にて楯籠り、毛利家へ志深ければ、秀吉鳥取・丸山を取圍まるゝ中に、度々敵陣へ忍を入れ、數多敵を討捕へ、多賀文藏と云ふ者の指物を奪取りて歸りたり。之に依りて秀吉、吉岡の城を攻崩すべしと議せられければ、多賀文藏指物を取られたる事を口惜しく思ひ、某馳向ふべき旨望むに依りて、文藏に三千餘騎を差添へ、秀吉の瓢簞の馬印を持たせて、吉岡の城へ向けられたり。彼城湖水差出で、尾頭計り地續きなる故、多賀夜中に湖水を渡り、船を頓て漕戻せば、後陣の大勢船を待ちて渡らんとて、汀に打出でて控へたり。文藏鐵炮百挺前に立て、矢間を射閉ぢ、其後に七百餘人槍・長刀を揃へて、一度に塀を乘破らんと進みたり。是を見て、吉岡安藝守・同右近等、已に突いて出でんとしければ、父入道暫く待つべし。吾矢倉に登りて時分を計るべき間、其采配に付いて突出づべしと言ひて、矢倉に登りて敵の形勢を見計ひ、態と鐵炮をも打たせざれば、敵心安く塀の手へ付く處を、入道早懸れと下知すれば、構へ置きたる弓・鐵炮を一度に放懸くると等しく、吉岡安藝守・同右近・近藤七郎兵衞・大杉某等を先として、二百餘人驀直に突いて出で、眞先に進みたる兵二十餘人切伏すれば、敵周章て退かんとす。文藏、蓬し引くなと下知して、二百餘人にて渡合へば、味方又力を得て、取つて返して攻戰ふ。然れども吉岡已下の城兵勇み進んで防戰すれば、寄手終に殘少に討成され、湖水へ飛入りて

吉岡城合戰

多賀文藏討死

多く溺死したり。吉岡右近は瓢簞の馬印持ちたる者を討取り、馬印をも奪ひ取りたれば、秀吉向の汀より是を遠見して、大に怒られけれども、水面數町を隔てたれば更に甲斐なし。其後安藝守嚴の上に立ちて、水練の者をして溺死したる者共の死體を取上げ、七百餘人が首を取り、勝鬨を揚げ、湖水の汀に竿結渡し、首を盡く掛並べ、奪取りたる瓢簞の馬印をも立置き、當時無雙の弓取と云ふなる羽柴筑前守秀吉を、當城に於て討取りたり。其支證には馬印爰に有りと、高聲に呼ばはれば、多賀文藏手を負うて岩の陰に隠れ居たるが、是を聞きて這出で、某は當城へ向ひたる大將多賀文藏と申す者なり。秀吉は當城へは向はれず。此馬印は某に給ひて持たせたるなり。深手負うて防戦も成り難ければ、是討たるべしと言ひて、頸を伸ばして討たせたり。吉岡則ち文藏並に宗徒の首三十餘、敵の捨置きたる武具・瓢簞の馬印迄、吉川元春の方へ贈遣したり。秀吉は文藏討死し、其外味方多く戦死したる事を無念に思はれて、重ねて羽柴七郎左衛門・龜井能登守を大將として、三千餘騎を差向けらる。羽柴・龜井吉岡の城下へ押寄すれば、則ち城中よりも打出で、稠しく防

秀吉の軍敗北

吉岡城落城

三家鳥取城へ後詰す

戦し、終に敵を追拂ひて、數多の者に手を負はせ、能き首十七討取りたり。羽柴・龜井も一戦に打負け引退き、兩度に於て斯くの如くなれば、秀吉詮なき處にて人數を損じて益なしとて、其後は當城をば攻められざるが、鳥取・丸山落城の時、羽柴七郎左衛門取扱ひて城を明渡し、吉岡父子は伯州へ立越えたり。

二〇　秀吉吉川元春と伯州馬山に對陣の事

天正九年十月中旬、鳥取の籠城兵糧盡きて難儀に及ぶ由、藝州へ到來有りければ、折節方々の手當に遣して無勢なりと雖も、後詰延引に及ばゝ落城すべしとて、吉川駿河守元春・同治部少輔元長・同民部大輔經言、並に毛利少輔十郎元秋・同七郎兵衛尉元康・其外國侍には、熊谷豊前守元直・益田越中守・三刀屋彈正等馳加はり、三千餘騎にて取敢へず出馬せられ、十月廿六日伯州馬の山へ著陣して、翌日は大崎へ陣を寄せんとせられるける處に、鳥取落城の由馬の山へ到來あり。羽柴筑前守は、六月より十月迄味方長陣を張りて、諸勢甚しく倦じければ、軍士の疲勞を休めんと思は

秀吉三家馬の山對陣

れたる處に、吉川元春出張の由、伯州の味方より注進するに依りて、秀吉則ち因州を發し、同廿七日馬の山の向の高山に陣を取り、馬の山を目の下に直下して、數萬の軍勢嶺にも谷にも充滿せり。元春の陣所馬の山は、左は湖水、後は橋津川にて、橋一筋の道あり。元春下知して、後の橋を切落させ、湖水の船悉く陸地へ引揚げ、櫓楫を打折り、前に柵をふり、敵合の道二筋作らせて、敵の寄るを相待ち、無〔二脱カ〕の一戰を遂ぐべしと、元長・經言へも此段相談せられたる處に、國侍熊谷・益田・三刀屋など打寄りて評議しけるは、此度味方若干の少勢を以て、此所にて一戰を遂げられん事、所と言ひ旁、味方勝利有るべからず。一先づ爰をば引拂はるゝ樣に諫詞すべしとて、各、元春の本陣へ參向す。元春如何にも寛やかなる體にて、袴を著し對面し、其後鮭の調味にて饗應せられ、其半ば敵陣を見やりて、今日は雪降り風烈しくして、秀吉山上の陣嘸ぞ堪へ難からん。我等は斯く集會して、酒呑み慰む事よとて、いと打解け戯れ笑はれければ、熊谷・益田・三澤・三刀屋等其體を見て、内議の趣申出すに由なくて、各、頓て退出したり。扨元春は、雪夜の寒氣を凌がんとて燒

秀吉羽衣石の城に兵糧を入れらる

火をさせ、脊を炙りて休息せらる。大將斯くの如くなるを見聞きて、諸勢皆此度討死すと思極めたり。斯くて秀吉の陣にて、蜂須賀阿波守其頃は小六と云ひて、未だ若年なるが秀吉を勸めて、羽衣石の城へ兵糧を籠められて、然るべしと言ひければ、秀吉は雪中の事なれば、先づそれに及ぶまじき旨言はれける處に、蜂須賀又向後味方に屬す者の爲に候間、兎角差籠められ宜しかるべし□申〔とカ〕すに依りて、秀吉尤と思はれ、同廿八日峯傳ひに、羽衣石の城へ兵糧を入れさせらる。元春此日物見を出されけるに、秀吉は陣々を堅く守らしめ。南條が羽衣石の城へ兵糧を入るゝと見えて、山傳する者多く有りける由言ひければ、元春則ち今田中務少輔經忠に、井上平右衞門・山縣宗右衞門を差添へ、鐵炮百挺持たせて松崎へ到りて、兵糧運送の者へ鐵炮を打懸くべし。若し敵打出でば、元春も馳向ひて一戰を遂ぐべしと言はれて、遣されけるが、今田已下二三千の敵に追付きて、鐵炮を放懸けるが、雪甚しく降りて、數兵の間も見分けざれば、敵味方互に控へて待つ處に、五六段前なる小松山の尾崎に、鐵炮一つ鳴りたるが、敵の眞先に進みたる兵糧送りの大將を、馬上

より打落して、吉川の内千代延藤藏と名乘りたり。其手の者共之を助けて、悉く退散す。

〔頭書〕一説には、新見左衞門尉に井上・山縣を差添へらるゝとあり。新見は今田が弟なり。

〔同〕或書に、彌一右衞門又千代延とばかり記せり。與助とは別家たり。

松崎の迫合

是をば知らず馬の山には、敵大勢出でたると聞き、是こそ願ふ處よとて、吉川元長・同經言先陣として、元春は秀吉本陣の體を見合せて打出づべしとて、元長・經言の手勢に熊谷・杉原等を加へて二千餘騎、松崎へ駈付けられたり。南條伯耆守元續・小鴨左衞門尉元清等、唯今打出でたるは元長・經言なり。我等に人數を附けられば、馳向ひて討取るべしといへば、羽柴小市郎尤も宜しからんといはるれば、藤堂與右衞門・中村式部少輔・神子田・龜井等一萬四五千にて、山下へ馳下り打續きたり。元長・經言勢を一面に立て敵を待たるゝ處に、秀吉本陣より軍使を立て、頻りに制せられ、上方勢頓て打入りたり。斯くて元春此兩日、秀吉と對陣して無二の一戰を遂ぐべしと思はれけれども、上方勢寄來らず。味方は小勢なるに依りて、敵の寄するを待たるゝ處に、秀吉元春死地に居て、士卒同志に無二の覺悟を見及びて戰ひては、人數數多損ずべしとて、諸勢を引連れ、因州鳥取迄打入り、當城には木下備中守を入置き、其外諸所の城に人數差籠めて、播州姫路へ歸陣せらるれば、元春父子も、年内雪深かければ働自由ならずとて、境目の仕置等言付けて、藝州へ軍を班さる。

秀吉姫路に退く歸陣

元春父子藝州へ歸陣

元春父子八橋著陣

二一　因州大崎荒神山以下落城の事

元春父子は、因州鳥取・丸山の兩城を秀吉に攻落され、敵城の一二箇所も攻破りて、此無念を晴さんと思はれけれども、年内寒氣甚しければ、年の明くるを待ちて、天正十年正月十七日、吉川駿河守元春・同治部少輔元長・同民部大輔經言藝州を出で、同廿五日雲州富田に到り、爰にて各〻評定して、二月上旬、伯州八橋に著陣せらるれば、其頃杉原播磨守盛重は病死して、嫡子彌八郎元盛・次男又次郎景盛、則ち先陣に相加はる。元春先づ大崎の城を攻めんとて、彼表發向せらる。此時鳥取に木

大崎城合戰

下備中守・宮部善乘坊、但馬に神子田・尾藤在陣すれば、若し後詰することもあるべしとて、熊谷豐前守元直・益田越中守元祥・三澤攝津守爲虎・三刀屋彈正左衞門・湯佐渡守・天野新兵衞尉已下三千餘騎、引分けて是を押へさせ、大崎へは杉原彌八郎・同又次郎・佐波越後守廣忠・富永三郎左衞門尉・周布十兵衞尉・都野駿河守已下、四千餘騎にて押寄せ、透間なく圍み攻む。當城には木下備中守より、同氏民部大輔に、因州の國人山崎・村越・簑部・笠塚など云ふ者、八百餘騎籠置きたり。同月十四日、杉原兄弟一身の功を以て、此城を乘崩さんとて、其日の曙に手勢一千五百餘騎にて、取出の出丸へ押寄すれば、足立治兵衞・安原民部、先を守うて眞先に塀へ乘る。是を見て、皆我劣らじと攻入りける間、城兵周章て二の丸へ逃入るを、杉原續いて攻入れば、總勢杉原に出し拔かれたりとて、急ぎ攻上り、甲の丸を時を移さず攻崩し、城兵所々にて討死したり。木下民部大輔をば、杉原が家人三吉德兵衞討取り、都て得る所の首四百六十餘なり。同二十日元春父子三人、七千餘騎にて荒神山へ押寄せらるれば、其夜城を明退きけるを追詰めて、三十餘人討取り、其儻鳥取の山下へ打入り、在家盡く燒拂ふと雖も、木下備中守小勢なる故、守りて出でず。それより吉岡を攻めんとせられける處に、城兵防ぐに及ばず明退く。其後諸寄の城の麓を放火し、一揆原數百人討捨て、大崎まで打入り此處に逗留し、諸卒の勞を休め、頓て鳥取の城を攻むべしと評議し、秀吉後詰の手當として、雲・伯・石藝の勢を催さる。羽柴秀吉へ此由、木下備中守注進しければ、秀吉夏に至りて、備中表出張すべし。然れば鳥取・私部兩城共堅く相守りて、縱へ敵寄すると雖も、出で戰ふべからず。我等備中表發向せしめば、隆景一分の後詰なり難かるべければ、元春も其邊を差置き、備中へ出張すべき間、其中城を堅固に相抱ふべき旨返事せらる。但州山名入道宗仙・垣屋駿河守・增屋隱岐守、其外因・但兩州の者共七千餘騎、秀吉の出張を待受けて馳加はり、先陣に進まんとて、但州竹田邊に馳集りけるが、此返事を聞きて、皆己が城々へ歸りたり。元春父子三人は、伯州八橋へ打入り、先づ私部の城を攻めんとせらる。

吉岡落城

因州大崎荒神山以下落城の事

宮の森合戰

二二　備前國兒島蜂濱城軍の事

備前の國兒島の蜂濱の城に、宇喜多忠宗入道安心・同嫡子與太郎在城するに依りて、此向城の爲に麥飯山を拵へんとて、天正十年の春、穗田治部少輔元清を大將として、有地美作守・古志清左衞門・楢崎十兵衞以下歷々遣され、城地普請させしめらる。然るところに、蜂濱と麥飯山の間宮の森と云ふ所へ、敵物見として人數を差出しけるに依りて、麥飯山の勢駈付け、則ち追拂ひ、敵城の山下迄逃ぐるを追詰めたる處に、敵其所にて返合せ相戰ひたり。有地美作守、敵一人槍下にて組討にす。古志清左衞門・楢崎十兵衞も槍を合す。之に依りて宇喜田與太郎、味方を救ふべしとて、城より打出でたる處に、乘りたる馬口強く、敵陣へ駈込みて空しく討たれたり。其後小早川隆景・穗田元清を伴ひ、蜂濱の城へ押寄せ、城の尾頭に陣取り、五六日對陣せられし處に、羽柴秀吉・淺野彈正海陸より馳下り、宇喜多が後詰する由風聞あるに依りて、毛利輝元より隆景へ使を以て、先づ端々の働をば差置かれ、其表引拂はるべし。重ねて無二の一戰を遂げらるべき旨、再々申越され、隆景頓て打入れられたり。

二三　伯州羽衣石岩倉落城の事

伯州羽衣石・岩倉兩城附城の者共、互に野伏足輕を出して、度々迫合ありて、去る天正八年より今年同九年（十一）に至りて、向城の者共得る所の首四百餘なり。就中高野宮の山田出雲守重直調略して、羽衣石籠城の小侍十三人、山田に心を合せ時節を見合せ、城中の固屋へ火を懸くべき間、其時外より攻合さるべしと、其約を固めたる處に、一節羽柴秀吉死去せられたりと、雜說有りけるが、是に城中殊の外騷出でたり。例の十三人の者、此時を幸に固屋々々に火を懸けたり。山田出雲守豫ねての相圖なれば、卽時城へ取懸り、城中よりも右の者共心を合せ働きければ、城兵防ぐ事を得ず、方々へ落散りけりを追駈け、首八十餘を討取りたり。松崎の小森和泉守も搦手より乘入れば、南條伯耆守一戰にも及ばず、從士一兩人にて城を逃退きたり。

此時元續、信長より給はりて祕藏したる、天下一と云ふ月毛の馬の長さ九寸五分なるを、山田奪取りて吉川元長に與へたり。岩倉の城へも此の火の手見えたる故、小鴨左衞門尉元清・同夜城を落退きたり。向城の正壽院利安、卽ち駈入り乘取りたり。是も信長より拜領したる、七寸五分の口切栗毛と云ふ馬を取りて、元春へ獻じたり。

二四　高松落城附清水宗治已下自害の事

羽柴筑前守秀吉、備中・備後を切隨へて、信長下向の待設すべしとて、天正十年三月中旬、畿內の勢を率ゐて、播州姫路を打立たるれば、播・但・因の勢馳加はりて、六萬餘騎に及べり。又宇喜多和泉守直家の子八郎秀家は、當年十一歲なれば、備前岡山の家城に殘し置きて、叔父宇喜多七郎兵衞忠家・戸川平右衞門・明石飛驒守・舍弟勘次郎・長船紀伊守・岡越前守・宇喜多河內守・富山判右衞門等を先として、播州二郡・備前一州、備中・美作半國の勢二萬餘騎相加はりて先陣に進めば、秀吉八萬餘騎の命を司りて、四月上旬備中へ下著し、小早川隆景より乃美少輔七郎を籠置きたる、宮地山の城へ押寄せ、速に明渡すべき由言送らる。少輔七郎無勢にして、敵大軍なれば防戰の便なく、則ち城を明退く。其後上方勢冠山の城を攻落し、其より同國高松の上龍王山へ押登り、勢を分ちて高松の城を取圍む。當城は彼鄕中に在る平山にて、尤も地の利を得たる要害なり。隆景より清水長左衞門尉宗治を籠め置き、乃美少輔七郎清水に加勢して、雜兵共に三千餘人楯籠りて、無二の合戰を遂ぐべしと覺悟して、鐵炮を頻りに打懸け、足輕を出して敵を招きけれども、秀吉堅く制して、敵出合はず。此城三方に深き沼有りて、一方には廣き水堀を掘り、最も地の利を得たり。秀吉當城力攻になり難き事を謀りて、城の廻り一里餘に堤を築かせられけるが、晝夜怠らず四月中旬より築きかゝりて、五月初には悉く成就したり。秀吉五月七日、蛙が鼻と云ふ所へ陣を移し、翌八日より兄部川を開入れさせらるゝに、折りしも五月雨の頃なれば、谷々の水漲落ちて、高松の民屋は早や水庭に成りぬ。水次第に湛へて城山の項を浸し、今五尺とも湛へなば、城兵皆溺死すべく見えたり。秀

宮地山沒落

秀吉高松城を圍む

秀吉高松城を水攻にす

高松城合戰

吉大船三艘堤の中へ舁入れさせ、淺野彌兵衛・小西彌九郎を警固の大將として、佛狠鬼を放ち懸け、頻りに攻めさせらる。城兵も夫々持口を請取りて防戰す。秀吉の攻口には、中島大炊助が一族蒐木が一黨、身命を捨てゝ之を防ぐ。宇喜多が攻口池の下は、林與三・片山助兵衛・林與九郎・鳥越五兵衛など鐵炮打懸け、稠しく防ぐ間、寄手塀の一重をも破り得ざれども、今十日と斯くの如くならば、水難遁れがたしとて、城中既に難儀すと雖も、堤の上には柵を付け、下には陣屋を作並べ、夜晝油斷なければ、味方の國々へ急を告ぐべき術もなく、水は漸々に城へ上りて難儀に迫りぬれば、水練を以て水をくゞらせ、此由隆景へ注進しけり。隆景驚き、輝元へ告知らせ、元春へも急ぎ備中表出馬せらるべき旨言送らる。之に依りて元春父子、出雲・石見の勢を率ゐて伯州より打出で、隆景と一つに成りて都合三萬餘騎、備中岩崎の廂山に到りて陣を居る。輝元は高松より三里餘隔て、同國猿懸の城に控へらる。秀吉は中國勢後詰押への爲に、豫て向城を三箇所に構へて、人數一萬人入置かれけるが、毛利三家出張の由聞きて、又一萬の人數を加へて押とし、六萬餘騎にて高松の

輝元元春父子高松を援く

城を取圍み、次第に堤を高く築きければ、水彌〻增して、城兵魚とならんとす。元春・隆景如何にもして、堤を切落さんと思はれけれども、敵猛勢にして後詰を押へ、陣の構嚴しければ、輙く切落すべき樣なし。吉川元春は信長下向なき中、兎角有無の一戰然るべしと、元春・隆景へ內談有りける處に、三澤攝津守爲虎を始め、味方多く秀吉へ內通の者ありと聞えける故、互に心を置合ひて、何となく延引せらる。

〔頭書〕御舊記に、千代延藤藏、門外まで供奉とあり。

是に依りて元長自身、三澤が陣へ赴き、唯一人攝津守が膝詰に居寄りて、爲虎多年の志を飜して、秀吉へ一味の約をなさるゝ由聞及び、其實否を承らん爲め來りたり。彌〻風說虛妄に非ずやと言懸けらるれば、爲虎頓首して、逆心を存せざる由委細に申述べ、牛王の裏に數の誓言を載せて出したれば、元長是に疑心を晴らして歸へられたり。此事は秀吉と和睦の後、中國の諸士上方へ內通せし證文共を、秀吉より毛利家へ送られけるが、其中に三澤が老臣三澤雲波と云ふ者、上方へ一味すべき由言送りたる書狀あり。是に依りて爲虎、此事偏に雲波入道が私の仕業なりと申斷りけ

高松落城附清水宗治巳下自害の事

秀吉信長への書翰

れば、雲波をば頓て首を刎ねられたり。又久代修理亮も逆心の聞えあるに依りて、彼が陣へは民部少輔經言立越えて、實否を尋ね聞かれたり。斯くて兩川敵陣を切破るべき評定ありと雖も、水面十町を隔てたれば、懸りて勝負を決すべき樣もなく、數日が間徒らに對陣せらる。秀吉は猶も勝を全うせんとや思はれけん、信長へ加勢を請はん爲め、羽檄を上せらる。其狀に曰く、

態捧書檄奉伸愚意了。備中高松之城、地之利全、武勇智謀之士數多籠居候故、察地形致于水攻、落城可爲旬日之內外見及候。雖然、毛利右馬頭輝元爲後卷、率數萬騎令對陣、可相救高松之城行候。兩陣之間不可過于十町候。御勢聊於御合力、以其勢爲高松之城圍指向、某勢而遂合戰、卽時追崩、西國悉當年中可屬幕下事在手裏、此旨宜預御披露候。恐惶謹言　羽柴筑前守秀吉

菅屋九右衞門尉殿

是に依りて信長、惟任日向守・筒井順慶・長岡與市郎・池田紀伊守・中川瀨兵衞已下三萬五千、備中へ差下さるべきに定まりたり。高松の城は次第に水難免れ難く、城兵

高松城秀吉に降る

防戰の術も盡きければ、城主清水長左衞門宗治、我一人自害して諸卒の命を助くべしと、筏を組みて使者を乘せ、其由秀吉へ請ひければ、秀吉則ち許容せられ、宗治が請に任せて、堀尾茂介を檢使として城中へ遣し、小船一艘に酒肴を積みて送られたり。斯くて清水長左衞門自害すべきと覺悟したる處に、宗治が兄月清入道も、共に自殺すべき由言ひければ、長左衞門我一人自害せんと望みし事、面々の一命を救ふべき爲なるに、詮なき自害せられんこと、堅く無用なりと制しければ、月清入道當家に於て、我苟くも總領に生れ、忰家相續すべき處に、世俗に交りて肥馬の塵を望まんことを、我心に深く是を厭ひしかば、家督を宗治に讓りて、我安世に樂めり、其時若し謙讓の儀なくば、入道各〻の命に代りて、今自害して諸卒を助くべし。我御邊に總領を讓りし故にこそ、今此難を受けて自害せんとす。吾此故を以て、爭か命を助つて暫くも存命ふべきと、中々制詞を用ひず、一筋に思ひ定めければ、其子右衞門尉も父が供せんと覺悟したり。又隆景より檢使として、籠置かれたる末近左衞門尉も共に自害すべきと言ひければ、長左衞門足下の切腹は何事ぞ。爰を遁

れられたりとて、全く瑕瑾に非ずと、強いて止めければ、末近某當城に入りてより、宗治若し心變し、敵一味の事も有らば、忽ち刺違へて死すべきと思ひ定めたり。

〔頭書〕右衛門尉は宗治が子なりと云ふ説あり。私に云ふ、實は月清が子にして、宗治養子とするか。

〔同〕一書に、末近左衛門尉を近松左衛門尉とあり。又曰く、輝元難波傳兵衛・近松左衛門尉をして、兵二千を率ゐて來り救ふとあり。

然るに今御邊義を專らに守りて、味方の約を違へず忠死を遂げんとせらる。宗治若し逆心あらば、其惡を憎みて刺違へんと思ひたる程にて、今味方に對し、忠功を專らに自害せんとせらるゝをば感心せず。此場を見捨て歸らん事、義に背けりとて、是も同じく自害すべきに極めて、小船一艘を飾りて、清水長左衛門宗治・同舍兄月清入道・其子右衛門尉・末近左衛門尉、並に清水が家人難波傳兵衛・高市允、次に小者一人船に乘りて押出せば、妻子眷屬別を悲みて泣別る。船既に秀吉の本陣近くなれば、長左衛門船を差止めさせ、刀を拔き聲を揚げて、「川船を留めて逢瀨の浪

清水長左衛門自盡

枕、浮世の夢を見ならはしめ、驚かす身ぞ果なき」と、謠の聲の下に腹十文字に切れば、高市允則ち介錯す。月清入道是を見て、「道の邊の清水流るゝ柳蔭、暫しが程の世の中に、心留むるぞ愚なる」と、同じく謠ひて自害すれば、嫡子右衛門尉も續いて切腹し、難波傳兵衛並に清水が小者も、同じく自害したり。

〔頭書〕或説、此難波傳兵衛事、輝元の內鐵炮の小頭なるが一同に切腹すべき由云ふ。秀吉の云ふ、彼はさして大將分と云ふにも非ず。然れば切腹無用の由言はれ、清水等も强ひて留めける故、其儀に應じて自害はせざる由、關西鬪記には見えたり。

末近左衛門尉我も一節謠ふべしとて、刀を拔き翳し船板を蹈鳴らし、「敵と見えしは群居る鷗、鯨波と聞えしは浦風なりけり。高松の朝の露とぞ消えにける」と、末を少し謠替へて腹を切れば、高市允、此等の死骸を取納め、首に家名・實名を記し附けて、堀尾に相渡し、其後船乘戻り、我が身も自害したり。

二五　元春隆景秀吉と和平の事